

# M ediaNet

No.5 1997

慶應義塾大学メディアネット

## 御成敗式目 享禄2 (1529) 年刊本

鎌倉幕府執権北条泰時の編纂した『御成敗式目(或いは貞永式目)』といえば、一度は誰でも日本史の時間に教えられたことと思います。『御成敗式目』は鎌倉・室町・江戸時代と続く武家政権下では、ずっと基本法として位置づけられていました。武家社会の現実に即していたので、道德律の基本でもありました。全部で51箇条あるので、昔から聖徳太子の『十七条憲法』の3倍に合わせたといわれてきましたが、真偽はわかりません。なぜ、貞永元(1232)年に制定されてから300年も経った、室町時代の享禄2年刊本を紹介するのか、疑問を持たれる方も多いことでしょう。当時の歴史書『吾妻鑑』は、藤原不比等の『大宝律令』『養老律令』を海内の亀鏡、本書を「関東の鴻宝」と両者を対比しているように、鎌倉幕府が自信を持っていた法典のようです。ところが、こんなに有名な法典であるのに、制定当時どころか、鎌倉時代に書写されたものも現存しておりません。室町時代になると、51箇条の法典では、実用に不便を来すようになりました。追加条目書や、法律や語彙の解釈を記した注釈書も作られました。当時の書写本や注釈書類は随分現存し、本館でも5・6点所蔵しています。

図版をみると、本文の行間には返り点などの訓点や送り仮名・振り仮名も記されていることがわかります。これらも印刷で、墨筆による書き入れではありません。当時の我が国の刊本で、漢文に訓点などを付刻する例は非常に珍しく、現存最古は『妙法蓮華經(応安5—1372一年刊本)』です。本書はそれに続く古いものと思われます。

巻末の刊語によって、本書は享禄2(1529)年8月に、小槻伊治が博士家の清原家の訓点を付けて作った稿本を用いた、再版本であることがわかります。5年前の大永4(1524)年にも、小槻氏は『御成敗式目』を刊行しております。ところが大永4年刊本は無界本(縦の罫線がない本)で、訓点などの付刻は全くありません。『御成敗式目』は本当の漢文とは少し違い、日本式でもありますので、読み方も色々あったものと思われます。もとは、清原家に一定の期間学び、法典の読み方を伝授されたのかもしれない。ところが本書のような、読み方さえ書かれた刊本の出現によって、それまでの書写本だけの時代より、はるかに簡便に正しい読み方が普及していったに違いありません。同様に、読み方も一定化していったものと思われます。

この『御成敗式目』には、この他大永4年刊本を底本にして作られた、室町時代末期の刊本も現存しています。この時代に同じ本が3版も出版されたという事は、いかに本書が必要とされていたかということを示しております。

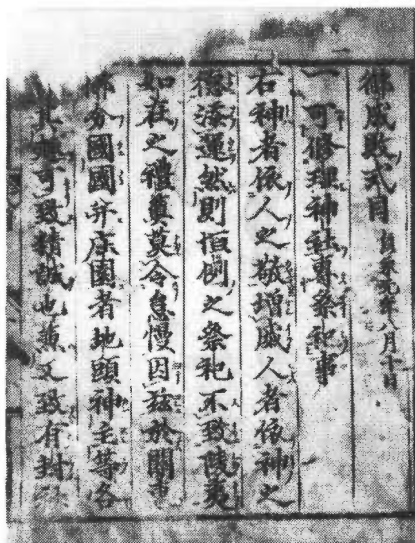
当時の刊行本は『妙法蓮華經』『大般若經』をはじめとする經典類や禅の語録など、仏教書がほとんどでした。その他は『論語』や『三体詩』など漢籍ばかりで、本書のような日本人の著作は稀な例です。

江戸時代になると、法律や武家道德の手引き書としてだけでなく、習字の手本として使われるようになりました。同じ手習いをするにしても、役に立つ内容の『御成敗式目』が都合よかったのかもしれない。江戸時代を通じて、百数十版は出版されたものと思います。寛政元(1789)年蔦屋重三郎刊本などの奥書に、本書巻末にある小槻伊治の刊語が収録されているように、江戸時代の『御成敗式目』は皆、本書享禄2年刊本を底本にしていたのです。

こうした次第で、本書は成立から300年も経った室町時代の刊本ではありますが、後世に様々な影響を与えた重要な本であることがわかります。

白石 克

(三田メディアセンター調査役)



濃縹色表紙(25.0×20.4 cm)(110 X-506-1)

# MediaNet 5

## 目次

### <巻頭言>

新所長挨拶	藤井彌太郎	3
-------	-------	---

### <特集> メディアセンターの位置付け——大学内での融合性を求めて——

メディアネットの人と組織（本部・三田）	斎藤 勉	4
日吉メディアセンターの中・長期ビジョン（日吉）	天野 善雄	8
「メディアセンターの位置付け：融合性」寸感（理工学）	森園 繁	10
信濃町地区の環境と現況（医学）	佐藤 和貴	12
SFC とメディアセンター（湘南藤沢）	小川 治之	14

### <MediaNet レポート>

メディアネット職員研修プログラム	廣田とし子	16
	山田 浩大	16
	岡野 純子	17
	島田 貴史	17

### パブリック・サービス部門のリエンジニアリング

——管理・運営の観点で——

加藤 好郎	19
奥村 朋子	23
金子 秀敏	30
平尾 行藏	33
川上 清子	36
木下 和彦	36
古賀理恵子	39
角家 永	41
杉山 良子	46
五十嵐由美子	52
宮木ささみ	57

### <分科会レポート>

東アジア資料研究分科会	新保 佳子	62
-------------	-------	----

### <海外レポート>

ウィリアム・モリスも訪ねて——イギリスの図書館等見学記——	小澤ゆかり	65
-------------------------------	-------	----

### <スタッフルーム：私のコレクション>

野口 幸枝 18 / 新井 圭子 38 / 村田優美子 61
--------------------------------

### <ティールーム>

東 利江 29 / 山本 純一 51 / 橋本貴美子 73
-------------------------------

### <資料>

メディアネット・メディアセンターに関する書誌	74
スタッフによる論文発表・研究発表・受賞	74
年次統計資料	77
御成敗式目	白石 克…表紙裏
編集後記	86

<表紙> デザイン 石田恵子 MediaNet 編集会議

<カット> 中村亜日香



## メディアネットの人と組織

さいとう つとむ  
斎藤 勉

(メディアネット事務長兼  
三田メディアセンター事務長)

### 1. はじめに

メディアネットはそれを構成する人々、ライブラリアンとコンピュータ関係者の典型的な専門職集団であると人は言い、それゆえに教員、職員の双方から独立した城に依る組織のように思われていることも確かです。

私がメディアネットの事務長に就任し、言い始めたことのひとつに、ユーザーに対してインタラクティブにお話をし、また聞きましょうということがあります。これを組織的にいえば大学内の融合性を求めてということになるかもしれません。

そこで慶應義塾大学の教育研究を支援する質、量共に最高、最大のものを期待されているメディアネットの組織と、それを構成する人について今後の在り方を考える……ということでのこの小稿を始めてみたいと思います。

私がメディアネット事務長の職をお受けしてから、この3月で1年が経過したことになります。

まったく図書館勤務経験のない私が、知識を最大限に活用しなければならぬこのようなポジションをこなすことは容易ではありません。計算室に関しては、それこそだいぶ昔に三田計算室の事務主任を兼ねていたことがあります。

さて現実には無我夢中で1年が過ぎました。最近メディアネットのあちこちで、私の立場を説明する意味で「私は2年目のこの大切な時期にあたって、この巨大なメディアネットという組織のいうならば管財人のような心構えで仕事をしています。」と言うことにしています。慶應義塾の図書館が戦後の荒廃した中からようやく立ち上がり、情報センターの時代を経て、近代化を完成し、私大有数

の図書館になったことは、自他共に認めるところであると思います。

平成3年にメディアネットとして計算センター組織を加え、ネットワークによって結ばれたメディアネット構想も雄大なものと思います。ただこれだけ巨大な組織になれば、あちこちに歪みも出てきましょう。そこに働いている人達も毎日の仕事の目的が明確さを欠くようにもなるでしょう。

そこで、これから私なりにいくつかのテーマをランダムに設けて、この組織はどう変わっていったらよいのか、スタッフ技術の向上、管理の在り方はどうしたら良いのか等について、きわめておおらかに述べてみたいと思います。くどいようですが、これまでのメディアネットを否定していくのではありません。いってみれば、巨大な業務の流れの整理すべき点、修正すべき点はこのへんかなとマークしてみた……という感じです。

### 2. 小さな政府→小さな本部

慶應義塾大学が5つのキャンパスを持ち、各キャンパスが独自の学問分野に依って発展するという、ネットワーク時代の自律、分散、協調のコンセプトは、既に周知のことだと思いますが、私はメディアネットにおける各メディアセンターのあり方も当然これと同じことだと考えています。その意味においては、規定上の本部、支部というよりは、各センターは、もっとのびのびとした活動をしていただきたいのです。本部と密接な関係を持つよりは、各キャンパスの執行機能と密接な関係を持つ割合を強めて欲しいのです。

勿論三田と日吉においては、単独のキャンパス運営機能という訳にはいかないと思いますので、

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

図書委員会とか、学部とか、部会とか、あるいはネットワーク委員会、ユーザー委員会そして塾監局機構とかと緊密な連携を持ちながら（できればユーザーとしての学生との関係も是非強めて欲しい）発展することが望まれます。そのために本部機構は出来るだけ小さく、必要な活動はプロジェクト的な形（現在のデータベースメディア担当グループのような）が妥当と思います。

### 3. 5センターのこれから

学部の編成、これまでの歴史的な経緯からして、5センターの中で、三田があまりに巨大です。短期間にこのキャンパスのバランスが変わる訳ではありませんし、今までのメインライブラリー的な存在も否定することはありません。そして予算や人、購入する図書数のどれをとっても巨大であり、それが故に近代化のめざす方向への立ち遅れが目立ちます。

私の考えでは、いろいろな所で三田はまだまだ近代化、効率化を図らなければなりません。テクニカルな部門では、アウトソーシングの導入、滞貨一掃以来、書誌・所蔵データ改修、そして補助金の導入による中国語等、貴重書、旧分類とデータベース化は進んでいます。次にリファレンスの強化、ILLの強化というのが三田の現在の姿だと思います。

三田の近代化が促進されれば、同じ傾向の日吉も当然近代化が進むと思われます。日吉固有の問題もありますが、キャンパス研究環境プロジェクト（「日吉メディアセンターの中・長期ビジョン」p.8～9参照）の行方によっても独自の発展の仕様が予想されます。医学、理工学の両センターは、専門図書館としての独自の方向をもっと発展して行って欲しいと思います。洋雑誌の値上がりに対して予算を増やしたのですが、今後どんな展開があるのか、その対策はどうなのか、雑誌についてはデジタル化がもっと導入されると考えられますが、どうなるのでしょうか。そして湘南藤沢キャンパス（以下SFC）は発足当初からのメディアセンター構想がどうなるのか次のマルチメディ

ア対応がどうなるのか、興味深いところです。

### 4. 情報システムとNTC、そしてライブラリー

平成3年に発足した情報センターと計算センターの合併は、SFCの様に当初のコンセプトがマッチしている組織では情報システムとライブラリーとの関係は上手にいつていると思います。そして理工学、医学（専門技術者が就任してネットワーク時代の技術の第一歩をようやく踏み出した所）でも情報システムとライブラリーの関係は異和感がないように思います。なのに三田と日吉では、あたかも異なる組織がたまたま一緒という感がぬぐえません。この理由はひとつには三田、日吉の計算室が長い間最大のユーザーである情報処理教育室と共に歩んできたことがあるでしょう。ネットワーク時代になって増え続ける一般ユーザーとの協調というか、対話というか、その面での遅れがあるのではないのでしょうか。つまり個々のユーザーに対してメディア供給の立場に立っての対応という局面で、初めてメディアセンターとしての共通の考え方が出来るようになると思うのですが。勿論現実のパソコン教室の管理は必要欠くべからざるものであることはいまでもありません。この面で、今後NTC（Network Technology Center 仮称）との組織の問題がキーになると思っています。

NTCですが、開設準備室が発足して1年余り、今しばらく人材のリクルート、基盤整備に主力を置くことになりました。どんなことをしようにも、あまりに人材不足なのです。ただこの1年間にネットワーク上での機器の整備についてNTCの果たした功績は大きなものがあつたと私は思います。

NTCと情報システムについては、各メディアセンターと逆になりますが、中央に権限を集中した、ラインをすっきりした機構がないと上手くいかないのではと思われまふ。勿論ユーザー重視の姿勢は、各キャンパス単位でとらなければなりません。

特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

5. ライブラリーと人との関係

日本の企業でも最近では女性の進出が目立ってきています。ライブラリーとライブラリアンは、女性を主とした専門職とその職場として、かつては典型的なものと考えられてきたと思います。ただし、その中でも早期退職と新人採用というパターンが続いていたことは事実です。15年から10年前までは、確かにそうでありました。が、それが変わってきています。メディアネットがそうであるように義塾の他の職員組織でも女性の勤続年数、管理監督職への登用と著しい変化が見られます。

さてそんな組織の中で、メディアネットはメディアネットだけで組織や人の流れが完結してしまっているのでしょうか。学部組織であっても、その中で他大学と交流していることもありましょうし、完結した中でも、学会活動や世界的規模での交流といった形で、進歩発展することができると思います。しかし図書館は、そうなのでしょう。

さらにいうなら、ノンプロフィット型の領域の、教育研究支援の第一人者をもって任じなければならないメディアネットがそれでよいのでしょうか。私は出口のない、入れ換えのない組織は駄目だと思います。

情報システム、NTCの組織では新旧交代は明らかになっておりますし、それが必要であり、また一方で優秀なネットワーク技術者の採用が難しいのです。

ライブラリーの中で、それではどうしたらよいのか。優秀な潜在能力を持ち自己改革が可能なライブラリアンが管理職として、あるいは異なった部門の専門職として、義塾の他の組織に進出していくケースが今後は増えると思います。またもっと若い時期に管理能力の養成のため、一度は一般部署でというケースもあると思います。そして現在のメディアネットに不足している管理職を補う意味での一般事務職からの管理者登用ということも今後はあり得ます。自分の守備範囲は十分守れますというのが、従来の専門職ライブラリアンの傾向ですが、これからはそれだけでは難しい。

6. 管理職、専門職、そして業務改革

現在メディアネットは病院部門と一緒に業務改革の対象外になっています。これは、業務改革導入時に議論したことですが、巨大な組織であるメディアネットを同時に対象とすることは容易なことではない、一部で自身の業務改革実行中（これにもまた議論があることでしょうか）等の理由で対象除外となったのです。組織や人事を対象とした場合には、メディアネットを除外せずできるだけ一緒に考えて欲しいと、私は委員会で発言して居りますので、メディアネットが業務改革の対象となる日は思ったより早く来る筈です。

業務改革では、従来のピラミッド組織から、よりフラットな組織を目指しているように思えます。階層を減らした中で、より優れた管理者群、一般職部分では、現在より一層能力がアップする、等がその中で常識的にも読みとれますが、それではライブラリーにおける管理職（私はとりあえずライブラリーマネージャーと呼びたいのですが）とは、どんな条件を備えていなければならないのでしょうか。

- (1)周囲のすべての領域をカバーする気力そして能力。
- (2)自分の発言、意見の結果がどんな方向に進み、固まるかを予測し洞察する能力。
- (3)(2)のことについて、ある程度まで自分で調整できる能力と責任感。
- (4)必要に応じて、これまでのレーゾンデートルを否定し、自己改革できる意志と能力。
- (5)人、物、金についての知識と経験。
- (5)を除いて、一般的なものとは少し違うことにお気づきでしょう。

そしてこちらは常識のない方になりますが、専門職としては、

- (1)主題専門家の育成。（図書館の古典的な形かも知れませんが）マネジメントの立場からすれば、異常に増加する情報に対応して、どんな情報が本当に必要で、それを所蔵すればよいかについては、現状ではまだまだ不満で

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

す。最近の義塾では比較的力を入れていなかった所ではないかと思えます。

(2)貴重書担当の人材の育成。

(3)いわゆるデジタルライブラリアンの育成。

ライブラリアンとしてデジタルメディア、データベース、ネットワーク等により深く業務に携わる。

といったところでしょうか。一方専門職としては十分に評価され得る論文が一年に数回は出るようになって欲しいと思えます。それが世界に通用するようになれば……と思えます。

さてこれまで述べてきたことがややライブラリーサイドに片寄り、情報システム分野が少なかった

ことが気がかかります。しかしながらここでお知らせしておきたいことは平成9年7月18日に行われた常務会において、3年間に亘る KOSMOS (Keio University System of Multimedia Online Services: 慶應義塾大学全塾統合図書館システム) 目録データベース図書データ改修事業の第1回が、改修の対象となるデータを標準の交換フォーマットに書き換え、多くのシステムに対して互換性を有する事業であることを条件として、承認されました。これこそ第2 KOSMOS の第一歩であり、ネットワーク、情報システム、ライブラリーとのコラボレーションであると私は信じています。

三田図書館・情報学会月例研究会

第88回 日 時：1996年8月30日(金)  
午後6時～8時  
テーマ：全文データベースに対する情報検索  
発表者：大山敬三(学術情報センター)

第89回 日 時：1997年1月24日(金)  
午後6時～8時  
テーマ：新 NACSIS-IR システムについて  
発表者：鶴岡 弘(学術情報センター)

第90回 日 時：1997年3月29日(土)  
午後2時～3時30分  
テーマ：図書館サービスの費用と価値—カウンター等による調査を中心として—  
発表者：安形 輝  
(慶應義塾大学大学院)

第91回 日 時：1997年4月26日(土)  
午後2時～4時  
テーマ：アメリカの図書館・情報学における新しい動向

—UCB の新カリキュラム構想を中心に—  
発表者：高山正也(慶應義塾大学)

第92回 日 時：1997年7月14日(月)  
午後6時～8時  
テーマ：インフォメーション・パラダイム・シフト  
発表者：ノリーン・スティール  
(United Technologies 情報ネットワーク部長)  
(第92回は APL 及び専門図書館協議会との共催)

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年2回刊の機関誌 Library and Information Science は、個人会費(年額¥3,000)、機関会費(年額¥5,000)を支払った会員に送付される。

学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学内、三田図書館・情報学会事務局(Tel. 03-3453-4511 内3147)で受付ている。



## 日吉メディアセンターの中・長期ビジョン

あまのよしお  
天 野 善 雄

(日吉メディアセンター事務長)

### はじめに

日吉メディアセンターは、平成8年10月に、3年から5年後を目指した中・長期ビジョンを策定し、内外の関係者、利用者に資料として配布した。本稿では、ビジョンの内容を紹介するとともに、策定するに至った背景、策定後の具体的な取り組みおよび今後の課題等について概括する。

### 1. ビジョン策定の背景

平成7年12月に慶應義塾は「長期基本構想—新世紀への課題—」を発表した(以下単に構想という)。21世紀を間近に控えたこの時期に、慶應義塾の今後進むべき指針が明確に示されたことになる。中でも構想が掲げる基本理念は、日本の慶應義塾から世界の慶應義塾へ飛躍することと、21世紀社会を共生、創造、貢献へと導く人物の養成を目指すことの2点に集約されている。慶應義塾が示したこうした基本理念は、義塾を構成する各組織、各部門においても、当然より具体的な形で活かされなければならないものと思われる。

眼を塾内のその他の動向に転じると、大学設置基準の大綱化に伴い、各学部で進められてきたカリキュラムの見直しが完了し、平成8年4月からは日吉における教育の内容や方法が一新されている。この事実は、日吉メディアセンターにとっても、教育・学習支援活動を見直すべき時期にあることを示唆していると言えよう。構想と呼応するように、業務の効率化、合目的化、職員の自己実現を目指すために、業務改革推進室が設けられ、業務組織の改革がスタートした。さらに、人事部による目標チャレンジ制度が導入され、管理職を含む全職員が、何らかの目標をもって業務にあ

ることが求められるようになった。個々の職員が目標を設定して業務にあたるとすれば、その職場なり部門の目標が明示されていなければならないであろう。こうした様々な動きに加えて、昨年9月から「日吉キャンパス研究環境懇談会」(以下単に懇談会という)が発足し、日吉キャンパスの研究環境を大巾に改善するための議論がスタートした。このことは、既述した教育・学習支援活動の見直しとともに、研究支援活動をも根本的に見直すことが日吉メディアセンターに求められていることを意味していると言えよう。

このように、義塾全体をカバーする構想が示されるとともに、日吉キャンパスにおいては、新しい教育体制がスタートし、研究体制の抜本的改善が叫ばれるようになり、個々の職員が業務上の目標を設定して業務に臨もうとしている、極めて重要な時期にあたり、研究・教育活動を情報の面で支援する組織である日吉メディアセンターとしても、その役割、中・長期展望にたったビジョンを明確に示すことが必要であると認識したのである。

### 2. 中・長期ビジョン

所長、副所長および管理職が会議を重ね、活発な意見交換をした結果、策定された日吉メディアセンターの基本的役割と中・長期ビジョンの内容は以下のとおりである。

#### 役割

広範な学問の入口に立つ若い学生に対して、最良の学習環境を提供し、彼らを育てる研究者に対して、最良の研究・教育環境を提供するフロンティアたること。また、学内外に学術情報を受・発信することによって情報関連機関および地域社会との共存を図っていくこと、さらに、

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

日吉キャンパスにおける学術情報のセンターとして、常に新たな試みに挑戦すること。

中・長期ビジョン

- i) 情報リテラシーを全学生に浸透させること（情報リテラシーは、さらに狭義の情報リテラシーとコンピュータリテラシーとに細分し、それぞれ一定のレベルに区分し、レベル毎に段階的に取り組んでいく）
- ii) カリキュラムと連携する学習センター機能を拡充すること
- iii) 学術情報サービスを拡充すること（研究者向けサービス、デジタル情報サービス等）

全学共通の図書館システム（KOSMOS）をもち、情報処理教育が広範に普及してきた今日、コンピュータリテラシーを含む情報リテラシーの基本部分を全学生に習得させることは、大学の入り口にあたる日吉キャンパスにおいては必須のことと言えよう。勿論、従来からもオリエンテーションや講習会を開催してきた実績はあるが、それらはメディアセンターが単独で開催していたため、学生の参加数は満足のいくものではなかった。また、メディアセンター側も、必ずしも全学生の参加を目論んで企画していたわけではなかった。それを、教務部や教員の協力も得ながら、新入学時に、組織的、集中的に実施しようというのが i) のビジョンである。

高度情報化社会の中で求められる人材は、自ら課題を発見し、それに関する情報を収集、分析、評価し、課題を解決する能力を持った人材だと言われる。大綱化以降、情報活用能力を重視した授業も散見されるようになってきている。こうした授業では、予習、復習のためにメディアセンターを利用することが必須となってくると思われる。教育現場とメディアセンターが密接に連携することによって、できるだけ早期に、日吉メディアセンターの学習センター機能を拡充することが必要であると認識し、ビジョンに掲げた。

日吉キャンパスには学習図書館しかない、といった声をよく耳にすることがある。そんなことはなく、日吉メディアセンターの4階は研究者フロア

であり、そこには研究室予算で購入した図書も配架されている。しかし、圧倒的に数の多い学生へのサービスに追われ、研究者向けサービスが、ややもすると片隅に追いやられていたり、メニューも豊富でなかったという印象は拭いきれないところである。幸い、日吉メディアセンターでは、資料整理部門の合理化によって得られた要員を研究者向けサービスに振り向けることができるようになったので、中・長期ビジョンの柱の一つに掲げ、教育・学習支援だけでなく、研究活動に対しても積極的に取り組んでいこうというのが iii) のビジョンである。

### 3. 策定後の取り組みと今後の課題

策定後の取り組みについては、本誌の33ページ、36ページに担当者による詳細な報告があるので、そちらを参照されたい。

今後の課題としては、学習センター機能をどのように拡充していくかということと、懇談会から「日吉キャンパス研究環境基本計画委員会」と、より具体的となった日吉キャンパスにおける新しい研究体制とどのようにコミットしながら研究者向けサービスを有効なものにしていくかという点が重要であると考えている。

学習センター機能の方は、情報リテラシー指導の実績を積むだけでなく、コンピュータ、ネットワークを用いた実験教育の場をメディアセンターで提供するなどして、情報利用教育の重要性を教育現場に理解してもらうことも有効ではないかと考えている。研究者向けサービスの面では、懇談会を通じて、日吉キャンパス全体で、研究支援体制を整備していくというスタンスが鮮明となってきたため、単にメディアセンターだけでなく、他部署との協力のもとに全体構想をまとめあげていくことが必要となろう。

いずれにせよ、日吉メディアセンターが中・長期ビジョンに掲げた時期が日吉キャンパスの研究環境を改善しようとする時期と符号したことは、ビジョン達成のために僥倖となることは間違いないであろう。

## 「メディアセンターの位置付け：融合性」寸感

もり その しげる  
森 園 繁

(理工学メディアセンター事務長)

20世紀が終る。まさに“激動の”という形容詞がふさわしい100年間であったと、誰もが想うのではなからうか。

ところで、世紀の境目をもっとも印象づける現象は、テクノロジーの急速な進歩による生活全般への影響であろう。図書館界ももちろんその圏外ではあり得ない。むしろ、新聞紙上などで紹介される電子図書館の出現により、図書館という世界が時代の脚光を浴びつつあるかの如くである。しかし、電子図書館と言い、資料のデジタル化といい、いかにも現代科学の成果を集約したような魅惑的な語句であるが、はたしてそれは選択の余地のない到達点なのであろうか。

### メディアセンターの誕生

編集子からの依頼テーマである“大学でのメディアセンターの位置付け”あるいは“融合性”，こうしたことは、本来図書館と計算センターが一つの組織に改組された時点でのテーマにふさわしいと思われる。その時であれば、マクルーハンの唱える如く「テクノロジーに身を任せれば、調和と安らぎがもたらされる」という夢に暫し浸しむことができたかも知れない。

思うに、図書館も計算センターも同じ情報を対象としても、情報の性質は随分と相違する。こうした違いは日々の業務にあらわれて来るので、組織上違和感がぬぐえず、大学内でのメディアセンターの存在意義を再考する必要ありとし、今回のテーマにも取り上げられたのではなからうか、と推測する。

もともと図書館なる組織は、その背景に社会的文化的な基盤があって発生してくる。そこには個

人のあるいは団体や地域の理念とか理想とかがあり、それを実現するための図書館であり、そこでは知識や知恵の研鑽がなされる。当然情報も扱うが、カウンターでの利用者との応対にみられるように人間的な要素が多分に加味される。一方、コンピュータでの情報は、ビット bit という電波で表示され数学的に計量可能な物理単位である。テクノロジーは本来時間と距離の制限を伴わない、きわめて外延性に富む本質を備えている。地球に蜘蛛の巣 (web) の如くネットを張りめぐらし、全地球を情報共同体とし、ネットワーク上に図書館を構築する、これは World Wide Web で現実のものとなしている。

そうした理論的な面はひとまず置き、理工学情報センターと大学計算センターが一つの組織に改組されて4年が経過した。人も物も変転がはげしく、あわただしい年月であった。とくに、機械化の象徴である KOSMOS (Keio University System of Multimedia Online Services: 慶應義塾大学全塾統合図書館システム) の動静には一喜一憂をななどなく体験し、業務の機械化、また一つの選択肢としてその先にあると漠然とされている電子図書館とくに、ある憶測を持つことができるようになった。振り返ってみれば当然と思われるが、人間とコンピュータとの関係は単純ではないという事実である。人が考えるごとく動いてくれるコンピュータは今のところ存在しないし、その逆もまた然りである。そういう観点からみると、この4年間の積み重ねは貴重であり、知らずして大学でのメディアセンターのしかるべき位置を示しているように思われる。たとえば、図書館の脱物質化、電子化が進行するのと並行して、

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

逆説的ではあるが館としての図書館機能の大切さがあらわれてくるのではない。

### 理工学部での流れ

ところで、今度理工学部では、科学技術分野の急速な変化に対応すべく学部及び大学院課程の改革が行われている。その精神は、未開拓の領域で全く新しい科学技術を発芽させ開花させるためのシステムを樹立したい、との意味合いを含め“創発 Emerging”と表現されている。

この意志を実現させる方針の一つとして、慶應義塾大学理工学部研究室新棟の建築計画が進行中で、2,000年4月に使用開始を予定している。現図書館棟玄関前に建築予定の、地上6階地下2階建て新棟1階の約半分と地下1階には、メディアセンターの図書館スペースとワークステーションルームが計画されており、また2階以上には研究室が準備され“創発”的研究が期待されている。現図書館棟と新棟とは結ばれて一つの館になり、理工学部の中心部分と物理的に融合することになる。現図書館棟もキャンパス入口のきわめて好位置に配置され、矢上台のシンボリック建物の役割を果たしているが、新棟と結合することにより更に利用者との距離が縮まることになる。

エピソードとして、建設委員会では新棟の図書館部分に快適な読書室新設の要望があり、設計図にも盛り込まれている。適度の書物に囲まれて、読書に耽り、しばし思索の時に身を沈ませる。確かに、図書館は人類の知識の蓄積を現在に連鎖する、そして誰もが共有できるキャンパスで唯一の空間、この場所としての図書館は他に替え難い存在である。

かつて、三田にほど近く藤山工業図書館という施設があった。理工学メディアセンターとの関係が深く、現在もその蔵書の一部を引き継いでいる程であるが、創設者藤山雷太が竣工式で述べた演説の一節に「各国の新知識を最も迅速に輸入するに重きを置き……工業上の知識を普及せしめ……社会有用の機関たらしむ……」と続き、藤山が目指した魅力ある読書環境、資料作りは、藤山工業

図書館を利用した人々の後々の語り草になっており、今は在野の一民間人が工業図書館を設立した業績を讃えて、日吉の「慶應義塾日吉記念館」正面に胸像が立てられている。

藤山は「工業立国」の信念でコレクション造りに励んだが、そういう先輩を誇りにする理工学メディアセンターも学内に溶け込むには、やはりすぐれたコレクション造りが欠かせない。藤山が求めたのは、「新刊の雑誌や図書の類」であるが、今様の利用者には当然デジタル資料を含めた、勉強心や研究心を刺激するような良書が更に必要である。図書館を訪れると、そこでは印刷資料を中心として、一貫した知識の体系に従って資料がまとめられ提供されている。目的をもって入館する人も、なにげなく来館する人も、問題の解答や研究のヒントを得て退館できるような環境でありたい。

いわゆるペーパーレスライブラリー論が騒がれた頃、図書館員はペーパーレスの図書館で何をすべきか等が心配された時期があった。その後の展開でこうした議論は後退し、現場ではコンピュータテクノロジーを利用していかに資料を提供するかに注意を注ぐように変化しつつあり、この傾向は今後当然強まるであろう。

しかし、利用者からみたら、図書館はあくまで図書館なのである。メディアセンターが発足して、反って館としての図書館の重要性を省みる機会を与えられたのではないか、と思うことがある。

小論は、図書館側からの所感で、不確定要素の多い現在、過ぎ去ったことにこだわるのは慎むべきであるが、なお次のような箴言を想い出す、「未来は決して過去を繰り返すものではない。しかし過去は我々が未来を予見するために有する唯一の規準である」—Basil Hall Chamberlain

### 参 考 文 献

ウィリアム F. パーゾール. 根本 彰等訳. 電子図書館の神話. 勁草書房. 1996. 254 p.

## 信濃町地区の環境と現況

さとうかずたか  
佐藤和貴

(医学メディアセンター事務長)

### 1. 信濃町地区の諸環境

慶應義塾に勤務する教職員の総数はおおよそ4千6百名と承知しているが、この内訳は、教員は約2千名、職員は約2千6百名である。三田、日吉、矢上、湘南藤沢（以下、他地区とする）の合計では教員数1,370名、職員数は863名である。信濃町地区では病院があることから職員の数が多く、教員は657名、職員は1,754名である。職員のうち約半数が看護職員である。

他地区に比較して、学生数はけた違いに少ない。医学部学生、大学院生がおおよそ6百名、看護短期大学学生が3百名で合わせても1千名に満たない。しかし、これらの学生は、卒業後もそのまま研修医として病院に勤務することになり、看護短期大学の卒業生も7、8割程度はそのまま病院に勤務することになる。学生は身分がかわったとしても、信濃町のキャンパスにながく留まることとなる。大学を離れた医師も職業上の必要から文献を探して図書館を訪れることも多く、卒業生との係わりが長く続くところに特徴がある。

信濃町地区の広さはおおよそ6万8千平米で、大きくは三つの地域からなる。一つは病院、もう一つが医学部で、三つ目が道路をへだてて別館、3号館、看護婦寮、北里記念医学図書館になる。慶應義塾情報スーパーハイウェイを構築する際には、地区の特徴として、狭いところに建物の数が多く、さらには建築年数の古いことが挙げられていた。信濃町には四つの経理単位があり、病院、医学部、看護短期大学、そして医学メディアセンターとなる。平成8年度の消費収入合計額は380億円、消費支出合計額は416億円と報告され、おおまかに

はこの地区だけで全塾の予算規模の4割程度を占めている。

### 2. 医学メディアセンターの現況

メディアネットの発足に伴い、信濃町地区では医学情報センターと大学計算センター四谷計算室が統合されて医学メディアセンターとなった。施設は二つの建物に分かれており、北里記念医学図書館と3号館地下とからなる。人員は専任職員、臨時職員を含めて29名である。このなかから、看護短期大学図書館に専任職員1名と臨時職員1名を派遣している。

医学メディアセンターは年間の収入が約7千万円あり、内訳は附属事業収入と施設利用料とからなる。支出は約4億8千万円である。支出のうち、1億6千万円は資産としての図書支出であり、残りの部分では人件費が約2億3千万円程度を占めていて最大で、他にはコンピュータなど機器賃借料の占める割合が多い。

#### 2.1 総務担当業務

伝統的に、医学メディアセンターでは、事務部門を始めとして、工務など施設関係を含めて対外的な窓口は総務担当が果たしてきた。渉外は総務担当が一手に行ない、センターの中にあっては、扇のかなめとしての役割を果たしている。このことにより、職員の方々がメディアセンター以外の部門との融合を図るには有利ではないものの、窓口の一本化が図られ、業務合理性を維持している。

広報資料には「きたさとニュース」があり、ほぼ毎月刊行し各部署に配布されている。これには教職員に依頼して書評やエッセイを掲載している。

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

## 2.2 情報システムサービス担当業務

ネットワークの運用が開始されるまでも教職員や部署に対する支援活動が行なわれていたが、最近では業務内容を拡大している。

医学部教授会に常設された委員会に医学部ネットワーク委員会がある。委員会は下部に小委員会、世話人会を設けて実質的な検討が出来るように考えられている。この事務局を医学メディアセンターが担当している。慶應義塾情報スーパーハイウェイ構想が現実のものとなり、運用などに課題が生じつつある時には医学部首脳部、事務局首脳部と病院情報システム部、医学メディアセンターで協議の場を作った。これがスーパーハイウェイ連絡会であり、現在も継続され、毎月1回、早朝会議の機会を持っている。

この二つの会議体に共通して設置したワーキンググループの活動は興味深い。研究、教育、診療、事務系、病院事務系の五つのグループを編成し、スーパーハイウェイの利用、活用について検討した。研究、教育、診療については教員と医学メディアセンター職員が、事務系、病院事務系については職員と医学メディアセンター職員が、たびたび会合を持ち、検討、協議した。たくさんのアイデアが提案され、結果は合同会議で報告された。さらには中間報告書を提出することが出来た。

## 2.3 図書館情報サービス担当業務

図書館としての資料の流れにもう一つ別のラインを設けたものが医学部史料の管理である。医学部教授会では医学部の史料が散逸することを怖れて常設の委員会として医学部史料委員会をおいている。この事務局を医学メディアセンターで担当している。医学部歴代の卒業アルバムを収集しているほかに、本だけではなく、博物館をつくれるようなモノが集まっている。収集するだけでなく、展示することも考え、図書館入口に展示ケースを2台おいて展示を企画するとともに、医学部の行事である新年祝賀会や北里記念式にゆかりの史料を展示している。

## 2.4 情報メディアサービス担当業務

医学部では「慶應医学」や *Keio Journal of*

*Medicine* という学術雑誌を刊行している。著者の思い違い、転記のミス、論文の孫引きなどにより、参考文献には間違いが見受けられることが多い。掲載予定の論文に引用されている参考文献が正確かどうかを参考係が資料を使って調べることにしている。さらには、年間索引の作成にも協力し、論文にキーワードを付けて主題索引を作成、提供している。

医学部企画室あるいは医学振興基金の依頼により慶應医学賞の選定の基礎資料の作成に協力している。最近では申請方法が変更されたために、資料を調製する際の大騒ぎはほとんどなくなった。しかしながら、違った角度からの資料や情報の提供を求められることも多くなっている。

「医学部年報」の業績収集の問題が事務担当者の間で検討され、研究業績データベースを開発する端緒となった。実務担当者の意見などをくみ取りつつ、原型が作成され、現在運用されているデータベースとして実現を見るに至った。この業務には初期の段階から参画し、積極的な支援を行なっている。

## 3. おわりに

教職員から依頼される業務は時として日常業務とは異なる次元の業務として降りかかってくる。通常に業務を行いつつ求められる支援だけに、ヒトやモノの投入などに限界が感じられることが多い。とはいえ、予算化できるような性格の業務でもない。この解決にはスタッフ的な職員配置や企画調査担当の設置といった形をとって、平常の業務に左右されない要員や職種をおくことも一つの考えであろうと思われる。

慶應義塾の教職員から期待され寄せられる多くの問い掛けに対して、医学メディアセンターに働く職員は誠心誠意応えていきたいと考えている。

## SFC とメディアセンター

お がわ はる ゆき  
小 川 治 之

(湘南藤沢メディアセンター事務長)

### 1. はじめに

いささか古い言い回しではあるが、“図書館は大学の心臓である”とよくいわれたことを思い出す。戦後米国から導入された図書館学教育の思想の中で出てきたことなのであろう。図書館員はこれを意気に感じ、懸命に高等教育機関における学術、教育情報の提供に努力し、大学図書館活動を支えてきた時期もあった。しかしながら今、このことに自信をもって対応している図書館員がどれほどいるだろうか。専門職による専門的な運用に努力すればする程、いつの間にか大学のキャンパスの活動とは遊離した存在になってしまった。言い方を変えるならば図書館員のための図書館になってしまった、とはいいい過ぎであろうか。

キャンパスの活動の実態に即したサービスを展開するという事は前身であるそれぞれのセンター時代からの基本的な姿勢であり、メディアセンターとして学術情報、コンピュータインフラの支援サービスを一体化した現在、分散型コンピュータネットワーク環境を基盤として、キャンパスに根ざした新たな活動をする段階にきている。幸い湘南藤沢キャンパス(以下SFCと称す)は創設から丸7年と義塾の中で一番新しいキャンパスであり、他キャンパスよりも恵まれたコンピュータネットワーク環境のもとに、理念指導型の新しい教育、研究活動を進めている、いわば実験的キャンパスである。メディアセンター発足のきっかけともなったこのキャンパスでの活動概要について触れてみたい。

### 2. キャンパスに下地があった

キャンパスの活動に即したサービスを展開するためには、キャンパスとの間に深い相互理解を必

要とする。幸いSFCはその発足に当って、メディアセンターを教育・研究プログラムの基盤として位置づけ、従来の図書館、計算センター機能を超えた学術情報支援サービスを求めている。動きの激しいキャンパスにあって、こうした理念に基づく具体的なサービスを提供していくためには、出来る限りキャンパスの日々の活動と一体であることが望ましい。SFCの大きな特色として、教職員一体型のキャンパス運営が、創設時の体制に止まらず現在も随所に見られる。具体的にはキャンパスの最高意志決定機関である教授会とは別に、運営会議とよばれる学部長指名の教員からなる会議体があり、通常の運営の責任はこの会議に負託されている。事務系職員は部門の責任者がこれに参加することが求められている。毎週開催されるこの会議に出席することにより、学部の活動および議論を知ることができる一方、当該部門に対する要望なども提案されるなど、最も基本的かつ重要なコミュニケーションの場であり、その後のサービスを考える上で多大な示唆を与えてくれる。

### 3. 機能的分担

SFCはその事務体制が非常に簡単であり、他キャンパスに見られるような大きな事務組織がない。管理部門である総務担当を除けば、教務・学生部・就職部の全てを担当する学事担当とメディアセンターだけであり、最近ようやく研究担当ができた。このため好むと好まざるとに関わらず、どのキャンパスでも発生する大半の問題を、これらのシンプルな事務組織で対応することとなる。そのために機能分担が強く求められる。例えば、キャンパスの性格上マルチメディアを駆使した教育が盛んとなってきたが、不足する教室の手当て

\*\*\*\*\* 特集 メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—

は教室の運用を管理する学事と、授業をサポートする立場にあるメディアセンターが一体となって検討する必要がある。最近では遠隔授業の教室の設置、運用にも携わっている。およそメディアに関する運用はメディアセンターが担当することが求められており、わずかな職員数で急な対応は無理だが、徐々に対応したいと考えている。

#### 4. キャンパス・プロジェクトへの参加

メディアセンターとしての機能分担は当然研究環境へも及ぶ。教育環境同様、常設の4つの専門委員会を基本的窓口として対応するが、それ以外にもキャンパスに開設される種々の研究プロジェクトとの直接的連携も重要である。関わりの深いテーマには会議などにスタッフを派遣し、情報提供や環境設定のサポートを行う場合もある。例えば、メディアセンターがデータベースおよびその利用環境を設定し、研究者に研究プロジェクトの立ち上げと教育面での利用を依頼する一方、その成果は我々にフィードバックされ、スタッフ自身の評価とともに、次年度以降のデータベース環境整備のための貴重な資料として活用される、などはその好例といえよう。

今後は塾内外で発表される研究成果を電子的にも蓄積する一方、これを広く社会に公開する役割も視野に入れるならば、放送局機能も重要になってくると考えている。とりあえず現存の成果などを、構内ケーブル TV 網で提供する実験もそのステップである。

#### 5. インフラのサポート

キャンパスの教育、研究理念を遂行するためには、コンピュータ資源に関するサポートは極めて重要であり、キャンパスの生死を決定するものといっても過言ではない。このためネットワーク委員会を中心として、キャンパスから求められるコンピュータ環境を調整し、その結果を運営会議へ答申する。また、SFCの特色であるラップトップパソコンの推奨も、学部の組織であるラップトップ委員会とともにやっている。その上で通常は研究・教育

上のニーズを個別に受ける。さらにインフラがUNIXで構築されていることを考えると、これを使った研究活動のためのコンサルティングサービスの必要性についても今後の大きな課題となろう。

#### 6. 館のなかの人々と進化論

このように、SFCのメディアセンターの守備範囲を明確にすることは難しいが、様々な情報処理技術を持った集団が、その視野をメディアセンターという館の中のみに向けていたのでは、とても今後のサービスは考えられない。現代のサービスのキーワードは情報でありメディアではない。館で提供されるサービスはメニューの一つにしか過ぎないのである。我々の目標は、キャンパスにおける教育、研究の実態を把握し、それを情報コミュニケーションを担う立場から支援するためのソフト、ハードにわたる環境を提供することであると思う。この立場に立つならば、目的遂行に必要なと思われる技術を積極的に身につける必要があるだろうし、そのことによってまた新しい視野が生まれ、新しいサービスの展開が図れるのだと思う。こうして新しスタッフが生まれていく。その人たちを何と呼ぶかはどうでもよい。

#### 7. おわりに

先に書いたように、SFCのメディアセンターは理念指導型の新しいキャンパスにあって、そこに求められるメディアセンター像が予め提示されているどころか折り込み済みという、極めて珍しいスタートを切っている。このことがキャンパスでの我々の位置づけの全てを物語っている。従って本稿ではもっぱらそれを前提に、実際にその理念をどのように具体化したらよいか、また具体化する上で必要とされる様々な技術を、既存のスタッフでどのように吸収したらよいか、そうした日頃感じている事柄を念頭においてまとめたものである。これは明らかに一つの考え方、生き方とは思いますが、これが全てというわけではない。しかしこの種のキャンパスにあっては、こうした考え方をしない限り存在できないと考えてはいる。



メディアネット職員研修プログラム

1. はじめに

メディアネット職員は、学術情報の提供およびその環境整備という職責を果たすために、高いモチベーションを持ち常に自己啓発の努力を続けなければならない。メディアネット職員研修プログラムは、その努力を側面から支援するものである。プログラムは以下のような構成になっている。

- A. 本部所管研修プログラム：メディアネット本部が起案・計画・運営する研修。(新人研修, メディアネット研究会, コンピュータ研修, 早慶大学図書館職員合同研修など)
- B. 地区センター共通プログラム：外部の関係協会団体などが主催する研修
- C～G. 各地区センター所管研修プログラム：各地区センターが独自に運営・実施する研修。

(詳細は <http://www.mita.lib.keio.ac.jp/medianet/staff/kenshu>)

研修には、即実務に役立つものと、速効性はないが研修をきっかけとして後の自己研鑽につながっていくものがある。また、最大限の効果を得るためには周りの環境に合わせて常にプログラムを評価検討する必要がある。

本レポートでは実務に直結した研修として COBOL 研修/KOSMOS・汎用機研修をとりあげた。効果がすぐ見えるために受講者・管理職双方から評価の高いこの研修であるが、次期システムも射程距離に入った今、そろそろ見直しの時期にきていると言えよう。

(廣田とし子：湘南藤沢メディアセンター課長  
メディアネット職員研修ワーキンググループ主宰)

2. COBOL 研修/KOSMOS・汎用機研修の紹介

2.1 COBOL 研修

内容：COBOL プログラムの基礎を学ぶ。  
KOSMOS 研修の前段階の研修。

期間：3日間

参加者：8名

2.2 KOSMOS 汎用機研修

内容：KOSMOS のリレーショナルデータベースの基本原則を理解し、KOSMOS データから各部署に必要な帳票、データを得るためのプログラムを作成する。

期間：3日間

参加者：7名

3. 研修を受けて

やま だ こう だい  
山 田 浩 大  
(三田メディアセンター)

COBOL はもはや古臭い言語である。しかしながら、図書館を含む慶應義塾の事務部門において、大型汎用コンピュータと COBOL で書かれたプログラムは、業務処理中に占める割合が未だ高い。

古臭い言語といっても、数年は COBOL の運用は不可避であり、三田の閲覧でも COBOL を使った業務は少なくない。単にデータを取り出し、加工して作業するのなら必ずしも COBOL である必要性はない。しかし、テーブルをまたいで望むかたちでソースデータを取り出したたり、テーブルのデータ自体を書き換える作業には不可欠となる。

96年度は、メディアネット主催の COBOL 研修(1年目・2年目の職員対象)と KOSMOS 研修(COBOL 研修修了者対象)を受講することが出来た。結果、これまで手を入れられなかったプログラムをメンテナンスし、また新たにプログラムも組むことが可能となり、研修が大いに役立っている。

ただし、研修の内容には当然限界がある。プログラムを走らせるためには、ホストの知識、カタプロやサブルーチンの知識、トランザクションの配慮等、不足を補いつつこなしたことも数多い。あくまでも研修は最低限必要な知識を与えるもので、その後の応用は自助努力である。

今後の COBOL・KOSMOS 研修はどうなるのか。現行の KOSMOS 環境下で、データをバッチ処理するには、KOSMOS, COBOL, ホストについての一連の研修が必要となる。現場に要望があれば継続すべきと考える。ただし、次期システムを見据えた言語(C/C++等)への対応、市販データベースソフトのクエリー(SQL文)・マクロ・プロシージャを利用したソースデータの加工等、シフトして行くべき方向性を定める時期ではないのだろうか。

おか の じゅん こ  
岡 野 純 子

(医学メディアセンター)

しま だ たか し  
島 田 貴 史

(湘南藤沢メディアセンター)

平成8年度メディアネット職員コンピュータ研修(C) KOSMOS・汎用機編を受講した。KOSMOSデータから各部署に必要な帳票やデータを得るためのプログラムを作成する研修で、各自で課題を決め、研修期間中に完成させるというものだった。今回は、聞いているだけで良いという受け身の研修ではなく、とにかく自分でやってみなければ始まらなかった。いろいろ試行錯誤をし、他の方の書いたプログラムを参考にして、講師の方を質問攻めにしながら真剣にCOBOLと格闘した。(この研修の直前に、COBOLの基礎研修を受けていたことによりかなり助けられた。)私の課題は、「新着図書リスト」を作ることであったが、結局研修期間中には終わらず、その後も格闘の日々は続いた。COBOLが夢にまで出てきてしまうほどで、こんなに必死になった研修は久しぶりだった。そのおかげで、プログラムやKOSMOSデータベースの構造を少し理解できるようになったと思う。また、研修の成果がそのまま業務に役立てられるというのも良かった。毎月月末になると、自分で作成したプログラムを流し、新着図書リストをホームページに載せている。(ちょっと嬉しい!)プログラムを流す前段階で教わった、KOSMOSデータから必要な項目を取り出す方法(PRINT文・UNLOAD文)も業務に役立っており、例えば、「医学メディアセンターの1996年の除籍図書リストを作成したい」と思えば、「処理状態コードが31(除籍)で、除籍復籍日が1996年で、館コードが70(医学)のもの」というように条件をかけあわせて、ちょっと得意になりながらデータを抽出している。

このように大変有益な研修であったが、講師の方々に助けていただかなければ、落ちこぼれの私は研修を終えることができなかつたと思う。とても感謝している。

私が研修を受けた目的は、蔵書点検リストを出力するためである。そして、この研修で私が学んだことは「既にあるプログラムの一部を変更し、自分たちの使い易いようにする」ということであった。実際、その年の蔵書点検からリストの作成を行っている。

その後も年度末の業務統計や現在湘南藤沢で行っている利用実態調査に関係するリストなどを作成している。このように研修後にリストを作成する機会が与えられ、その都度KOSMOSのデータベースと格闘しながら経験を積むことが本当の研修になっているかもしれない(とは言いつつも、気づけば閉館時刻だった、ということもあって「本当に」楽しい?経験である)。もし研修を受けた後にこういった機会が全く無い場合には、ペーパードライバーになる可能性が高いのではないだろうか。

貸出統計などを作っていて実感するのが、研修で受けた内容だけでは限界がある、ということである。最初にも書いたように、私が研修で教わったことは「既存のプログラムの応用」であって、「プログラム自体を自分で新しく書く」ということではなかった。このためCOBOLの文法や構造についての知識が乏しい(既存のプログラムがあってもその原理が理解できていない)。また、効率の良いプログラムを書くために必要な「考え方(=ロジック)」の部分で、自分では良く分からない箇所もあつたりする。これらは参考書などを頼りに自分で勉強するしかないのであろうが、何から手を付けたいのか分からないのが実情で、出来ればステップアップの研修等で楽をして学習したいと思つたりする。

＜スタッフルーム：私のコレクション＞



テディベアとの出会いを求めて

の ぐり ゆき え  
野 口 幸 枝

皆さんはテディベアとは何かご存じでしょうか？「テディベアが好きなんです」と言う「ああ、クッキーか何かでしょう」(?)なんて言われたこともありましたが、一般的に広義にはくまのぬいぐるみ全般を指し(プーさん、パディントンもこれに含まれる)、狭義には首・手足にジョイントが入れられ動かせる本格的なものを指すようです。

テディベアの“テディ”というのは、アメリカの第26代大統領、セオドア・ルーズベルトの愛称に由来しています。1902年の秋、大統領が狩りに出かけた際、その日は獲物がさっぱり獲れなかったため、お付きの者が瀕死の小熊を用意し、木に縛りつけそれを撃つよう大統領に頼んだところ、彼はその小熊を逃がしたそうです。この出来事が、「ワシントンポスト」に掲載されると、たちまち話題となり、興味を抱いたあるお菓子屋さんが一匹のくまのぬいぐるみを作ります。“テディのベア”と名づけてショーウィンドに飾ったところ大評判となり、そのお菓子屋さんはぬいぐるみメーカーを興したというのがその始まりのようです。

さて、私がテディベアのコレクションをはじめから5年になります。きっかけは、クリスマス・シーズンに、ある店のディスプレイとして使われていた一匹のくま(テディベア)でした。売り物ではないというそのくまを一旦はあきらめたものの、どうしても気になったので、事情を話して譲ってもらったというのがコレクションの第1号。その後徐々に増え続け、今では約80体程になります。決して安いものではないので、あまり数は持っていません。大抵は国内外のショップや、コンベンション、アンティーク・マーケット等で購入しています。中には1000体くらい置いてある店もあり、最初はみんなかわいくて目移りしますが、1時間くらい見ていると、しっ

かりと目が合ってしまう子がでできます。まず家に連れて帰ると、メーカー、アーティスト名、年代、特徴、素材、価格、購入場所、限定何体のうちの何体目かなど、そのくまに関する記録を採ります。アンティークベアなどの場合、どのメーカーのいつ頃のものかということの本で必ずチェックし、その時代の特徴やメーカーの歴史なども調べるようにしています。これは、そのくまの歴史や背景がわかるのでなかなか楽しい作業です。アンティークは状態が良いか悪いかで価格もずいぶん違ってきますが私は特に価値の有無にこだわらず、気に入った子だけを集めるようにしています。

コレクションの子たちには一点一点みな思い入れがありますが、中でも一番古いのはドイツのビングというメーカーの©1910年のくまです。この子はとても幸せそうな顔をしています。(くまは送ってきた人生(?)が表情に出るのです。きっと前の持ち主がとてもかわいがっていたのでしょう。)このくまはあまりにも高かったので、買うか買わないか一ヶ月悩んだ末に買うことに決めました。この時は一緒にいた友人の話によれば、私も興奮していましたが、お店の人も興奮(?)ということにかく店の空気が瞬変わったそうです。(少しオーバーだとは思いますが。)そしてオーナーの人からも「本当にだいじょうぶ？」と何度か念を押されてちょっと困ってしまいました。お店の人だけでなく、特にアーティストの人にとってはくまを手に入るのは娘を嫁にやる、或いは養子に出すのと似て複雑な気持ちがするようです。この時も「かわいがってくださいね」といわれたので、「もちろんかわいがります！」と約束しました。

一度興味を持つといろいろ調べずにはいられない質なので、テディベアに関する本を集めたり、イギリスへ行ったときにはショップだけでなく、おもちゃやベアのミュージアムに足を運ぶことにしています。欧米では、子どもが誕生するとベアを贈る伝統があり、また医療の場でも子供たちの心の病気の治療に使われたり、他にも苦しむ人を助けるための募金活動やチャリティーに活躍しています。これからはテディの持つ、こういった精神性についてももっと詳しく知りたいと思っています。そして新たなテディベアとの出会いを求めていくつもりです。

(三田メディアセンター)

# パブリック・サービス部門のリエンジニアリング

—— 管理・運営の観点で ——

かとうよしろう  
加藤好郎

(三田メディアセンター事務長代理)

## 1. リエンジニアリングとは

1970年代、アメリカはベトナム戦争を契機に財政赤字、国際収支の赤字、ドル不安をかかえ、産業の没落といていた時代であった。日本能率協会マネジメントセンター発行の『実践・リエンジニアリング』(1994)によると、日本の経営者達は、日本型経営の勝利とって次のようにアメリカ産業の没落の理由を上げていた。

- 日本は終身雇用制により、ロイヤリティが高いがアメリカは業績主義のため、解雇・転業が頻繁におこなわれ、そのためにロイヤリティが低く、従業員が熱心に働かない。
- 日本型経営は、長期に会社の繁栄を考えているが、アメリカは短期にしか収益を考えていない。
- 経営管理システムも、従業員参加型の日本とトップダウン方式のアメリカでは異なり、アメリカでは下から積み上げていく品質向上、コストダウンの考え方が存在しない。

1986年 MIT (Massachusetts Institute of Technology) の産業生産調査委員会は、『Made in America』の中で、アメリカ産業が国際競争力に負けた原因として次のことをあげている。

- 開発と生産において技術的な弱さがあった
- 人的資源に重点を置かなかった
- 短期的な経営の視野でしか見られなかった
- 経営戦略が時代遅れであった
- 政府と産業界との協調体制がとれなかった

この報告書で実例として挙げられているのは、まさにリエンジニアリングそのものといえる。

ビジネス・リエンジニアリングでは、仕事の名称、部門、部署、グループ等の配列は重要ではなくなる。重要なのは、市場の需要と技術力を前提として、仕事をどう組織化するかということであ

る。要するに、大量生産方式のプロセスを、顧客本位の新しいプロセスに作り替えることがまさにリエンジニアリングといえる。

## 2. リエンジニアリング導入にあたって

マイケル・ハマー氏(『リエンジニアリング革命』の著者)は、企業に変化をもたらす力を3C: 変化(Change), 競争(Competition), 顧客(Customer)とし、要約すると次のようにしている。

- 変化 企業は品質・価格・サービスについて、常に革新的な工夫をしなければ、競争には勝てない。
- 競争 同じ製品が異なる市場で、異なる競争の条件のもとで売られる事態になると、世界の企業との競争の基準は、品質・価格・サービスになる。
- 顧客 顧客のニーズである、品質・価格・サービスに重点を置くことが必要である。

また、リエンジニアリングには、プロセス、根本的、抜本的、劇的という4つのキーワードがあると述べている。

- プロセス プロセス志向で組織構造に焦点をあてることである。いいかえれば、注文された商品を顧客の手元に配達することが、プロセスの作りだす価値である。
- 根本的 何故いまの方法でやっているのか、その基本を問いただし、基本的なルール、前提を根本的にやり直す。組織が何をしなければいけないか、どのようにしなければいけないかを決定する必要がある。
- 抜本的 既存の規則、前提を一切切り離して、抜本的にデザインしなおすこと。つまり、物事の根から着手することを意味する。

・劇的 リエンジニアリングとは、業績において大飛躍を達成することである。

さらに、『リエンジニアリング革命』のなかでは、リエンジニアリングの成功率は30%から50%しかないともいっている。

リエンジニアリングを行うためには、理由が必要である。既存のプロセスで仕事をしている人にとって、それを変更するには、理由がなければ納得しない。管理者・経営者は、プロセスに必要な価値観や信念を明確にし、従業員を動機づけなければリエンジニアリングは成功しない。

同時に、リエンジニアリングは下からの積み重ねによる改善では失敗する。プロセスそのものを下から改善しようとしたら、組織そのものが混乱してしまうし、また、現場の従業員は、リエンジニアリングに必要な広い視野に欠ける。また、リエンジニアリングは必ず組織の壁を破ることになるが、その権限が現場に近い人にはないのである。したがって、あくまでトップダウンでないとリエンジニアリングは失敗するのである。

### 3. 三田メディアセンターにおけるテクニカル・サービス部門のリエンジニアリング

#### 3.1 整理滞貨の解消

1994年7月より、約7万冊の滞貨本（1994年9月支払い分以前受入れの図書）処理のために整理担当の内部組織が次の3つのグループに別れた。

- a. 滞貨処理班
- b. カレント処理班 I
- c. カレント処理班 II

これらは、業務処理における、コスト・スピード・品質を重視しながら、目標管理を意識した次の様な自律的なグループとして位置づけられた。

- ①業務プロセスの設計は、グループの意思に委ねられた。
- ②業務処理目標値は、構成メンバーが許容できるものとした。
- ③人的・物理的な要求のあったものは具備した。

これらの、業務集団は一日の目標値を定め、当初2年間の予定で滞貨一掃を計画した。

業務プロセスは、記述（慶應のデータ基準に照らした記述・典拠検索）、標目分類（記述の点検・標目決定・分類決定）、点検（総合点検）、入力

（前処理・KOSMOS 入力・請求記号入力）、入力点検（最終点検・統計）という以前よりシンプルなフローを作った。プロセス毎のマンパワーは、1日の目標値を処理するのに必要な時間を、プロセス毎の時間に冊数を掛けることによって割り出し、これを1人当たりの実働時間で割ることで算出した。マンパワーとしては、外部委託も含まれている。また、情報としての外部資源を利用する形で業務のプロセスを簡略化することも可能にした。

一方、閲覧担当の装備・配架体制の要員整備も行われた。具体的には、装備の為に非常勤嘱託を常駐させたり、学生嘱託の業務（カウンター業務、図書の修理等）を配架中心にした。施設面では、書庫の壁際に数カ所書架を増設した。

積年の問題であった整理滞貨も、リエンジニアリング（プロジェクト業務の運用形態としての）によって、予定していた2年を待たずに、平成7年9月末を以て一掃されることになった。同時に、専任職員を3分の1削減でき、なおかつ新たな滞貨を生まない体制が確立された。

#### 3.2 第2次リエンジニアリング

1995年12月より第2次リエンジニアリングが次のように計画された。

- a. 内容
  - ・雑誌の受入れシステムの改善。  
本業務の簡素化を計る。
  - ・予算管理のシステム化。  
書店の仮納品書と図書館の図書予算管理システムを廃止し、業務を簡素化する。
- b. 組織
  - ・対象の組織は、三田の総務担当・収書担当・雑誌担当と日吉の整理担当。
- c. 効果
  - ・図書支出と資料費のシステム、雑誌のシステム、特別図書のシステムから、データを集め、経理システムに合わせた形で編集することで、ダイレクトに会計情報として処理する事が出来るようになった。
  - ・日吉の整理部門を三田の整理担当と一元化することができた。

このことにより、業務のプロセスの簡素化と、リエンジニアリングの果実を利用することで、パ

ブリック・サービス（以下 PS とする）部門の増員による充実と、メディアセンターのオンラインシステムである KOSMOS 目録情報製作・運用ワーキンググループ（現在のデータベースメディア担当）を組織することができ、目録データベースの抜本的な改修事業に着手することができるようになった。

#### 4. 三田メディアセンターにおけるパブリック・サービス部門のリエンジニアリング

##### 4.1 リエンジニアリングの必要性

前述したとおりリエンジニアリングを行うには理由が必要である。既存のプロセス・組織を変えるには、その変化をスタッフが納得することが必要である。同時に、管理者が価値観や信念を明確にし、そのこともスタッフの仕事への動機付けになることが必要である。

1996年11月の時点で、PS 部門には次の様な問題を改善する必要があった。

##### ①貸出規則の簡素化

貸出規則を簡素化することで、利用者サービスを充実させ、今後のシステム構築の際に、そのことを容易にする。

##### ②受付カウンターの実充

慶應義塾図書館の玄関（顔）として機能することができる業務配分と人的環境を整える。

##### ③レファレンス・サービスの充実

カウンター業務以外の業務を整理・移管させ、カウンター業務に集中し、塾生・教職員へのサービスをより充実させる。新館1階と3階・4階にあるカウンターの業務量のバランスを考えた人員配置をする。

##### ④NACSIS-ILL への参加と ILL-システムの概念構築

長年の課題である学術情報センターの ILL システムへの参加と ARIEL 等のドキュメント・デリバリーを含めた、新しいシステムの概念を確立する。

##### ⑤主題専門家の育成・養成

利用者との直接サービスに追われるため、制度としての育成・養成ができない。研修制度の拡大・充実等によりこのことに着手する。

##### ⑥書庫の狭隘化対策

日々の業務のなかでの管理は行われているが、長・中期の対策が練られていない。抜本的な書庫対策を考える。

##### ⑦資料の保存対策

書庫の狭隘化対策と同時に、常に蔵書の状態を調査しておく。

##### ⑧開架図書の入替え

開架図書を常にアップトゥーデートなものとするため改版や貸出の頻度を継続的に調査する。

##### ⑨マイクロ資料の目録と管理

マイクロの目録・管理を、テクニカル・サービス（以下 TS とする）部門の範疇でとらえることで、サービスとの切り分けを行う。

##### ⑩雑誌の製本業務の位置づけ

製本業務の位置づけが曖昧であった。このことも、マイクロ同様 TS 部門の範疇でとらえ、PS とは切り分けを行う。

##### ⑪メディア環境構築のための企画・立案

三田のメディアセンターもデジタル・ライブラリー構想にむけて準備にとりかからなければならない。コミュニケーション機能、情報検索・編集・分析を行うための PC コーナー、OPAC コーナー、CD-ROM コーナーの設置、また、AV 資料の充実・サービスの提供、そしてそれらの支援体制を確立する。

##### ⑫夜間体制の充実

専任スタッフのローテーションと学生囑託にたよっている夜間体制を管理とサービスの両面から改善してゆく。

##### 4.2 リエンジニアリングの定義

ここでは、非営利組織として図書館をとらえ、利用者へのサービス向上を目的にした、組織の再構築を大学図書館経営の管理面から分析し、実行した（する）ことについて紹介する。PS 部門は、TS 部門と異なり実際の成果が、必ずしも図書館側が意図した結果とならないことがある。つまり、利用者の満足度をデータとして収集することに限界があり数値として分析することが困難だからである。このことを前提として、サービスを論じなければならないところが、PS の宿命である。

##### 4.3 リエンジニアリングの実際と将来構想

前述した問題をすべて改善し、実現するには、既存のスタッフ以外の人的支援と財的支援が必要

であるが、それらの支援が不可能とすれば、組織を根本的・抜本的に見直し、劇的に再構築し同時に業務プロセスを見直すことが必要になる。これには、組織のフラット化（部課長制からチーム化へ）を目指し、部長－課長－係長といういわゆるピラミッド型から、業務をグルーピングすることで、一人の管理者と各業務のグループリーダーと密接に連絡をとりあう、セルフ・マネジメント・チーム（管理者がアドバイザー的存在になり、直接、組織の運営に携わらず、チームに権限と責任を与える）を組織することである。同時に、メンバーとして、図書館の専門職的なもの以外は業務委託し、専任の職員は専門業務に集中させ専門性を高めることにも着手した。

具体的には、次のようにレファレンス・サービスと閲覧サービスの組織のフラット化と統合を行っている。

- ①閲覧担当（専任9名、嘱託3名、外部委託6名、学生嘱託8名、夜間担当：専任2名、学生嘱託5名、外部委託3名）受付カウンターが充実され、旧館体制・印刷 AV も固定化され、貸出規則を簡素化することで利用者のサービスを拡大する。
- ②書庫管理担当（案）（専任2名、外部委託2名、学生嘱託8名）書庫の狭隘化に対する中・長期計画立案と資料保存、開架図書の入替えを業務とする。この担当は、第2次山中資料センター構想を含めた保存書庫が具体的にになった時点で発足する。
- ③相互貸借担当（専任2名、嘱託1名、外部委託3名）1997年2月より ILL 検討会を PS 部門に設置し ILL システムについて検討を重ねている。1997年の3月には NACSIS-ILL に参加しサービスをより拡大させた。
- ④レファレンス・サービス担当（専任11名、嘱託2名、外部委託2名）ILL 担当に ILL 業務を移管することでカウンター業務をより充実させた。3階のカウンターの業務であったマイクロの目録と管理は、利用者サービス（日本マイクロに外注）を残して、整理担当へ移管、雑誌の製本業務は TS 部門の雑誌担当へ移管した。このことで、利用者への直接サービスが充実し、1・3・4階の業務量の

バランスが良くなった。

- ⑤マルチメディア・サービス担当（案）（専任7名、嘱託1名）1997年2月よりマルチメディア・サービス検討会を PS 部門に設置し、メディア環境構築のための企画・立案をしている。三田のホームページ作成ワーキンググループも途中からこの検討会の中に置いた。現在は、週及入力終了した後に、デジタルライブラリー構築とイントラネット構築準備のために、TS 部門とジョイントして特別班を組織した。具体的にこの担当を機能させるのは、1998年の2月頃と考えている。

## 5. おわりに

企業におけるリエンジニアリングの実際と、非営利組織のリエンジニアリングとして三田メディアセンターの TS 部門と PS 部門のそれを述べてきた。今回は、あくまでも大学図書館の経営のなかで、業務の効率、サービスの向上を念頭におきながら、合理的で、効果的で、生産的な運用形態を追求したものとした。特に、PS 部門においてコストの問題に触れていないのは、管理・運営に絞って論じたかったからである。最後に、この原稿を執筆しながら、非営利組織の管理・運営が、コストパフォーマンス・業務の効率を考えるなかでは、営利組織のそれと殆ど差のないものになっていることを痛感した。

## 参考文献

- 1) ダニエル・モーリス、ジョエル・ブランドン共著、日本能率協会コンサルティング訳、実践リエンジニアリング、日本能率協会マネジメントセンター、1994、309p.
- 2) マイケル・ハマー、ジェームズ・チャンビー共著、野中郁次郎監訳、リエンジニアリング革命、日本経済新聞社、1993、331p.
- 3) M. L. ダートウズ他共著、依田直也訳、MADE IN AMERICA、草思社、1990、465p.
- 4) 加藤好郎、“蔵書形成・管理と図書選択”、大学図書館研究、No. 50、pp. 49-55 (1996)

# 医学部研究業績データベース

ひら ふき かよこ  
平 吹 佳世子

(医学メディアセンター)

おく むら ともこ  
奥 村 朋 子

(病院情報システム部)

## 1. はじめに

近年、大学・病院をとりまく環境の変化には著しいものがあり、特に大学設置基準の改定による大学の自己点検・自己評価に関して、各研究者がどのような研究成果をあげているのかを、大学・病院として把握すること、ひいてはこれらの成果を慶應義塾として広く社会に積極的にPRすることはこれまで以上に重要となってきた。しかも、研究者の研究業績は年々増加する一方である。慶應義塾大学では昭和37年度から「慶應義塾年鑑」としてこれらの研究業績を刊行しているが、医学部ではこれより1年早く昭和36年度より「慶應義塾大学医学部年報」として刊行していた。そして、昭和51年度より「慶應義塾年鑑分冊医学部年報」(以下「医学部年報」)となり現在に至っている。しかし、この刊行作業はすべて手作業で行なわれ、毎年多大な時間、労力、経費を費やしてきた。研究者側も毎年、限られた期間に多大な負担が集中してかかっている。また、教務課では文部省への提出資料としてこれとは別に研究者側へデータ提出を要求しており、医療事務室でも厚生省に提出する資料のために別に同内容のデータ提出を求めている。また、三十数年の蓄積があるにもかかわらず、印刷体であるため、研究者名や、研究内容から検索することは容易ではなかった。

そこで、医学部では他学部在先駆けて研究業績をデータベース化するために、医学部企画室を中心に、庶務課、教務課、医療事務室、慶應医学会、医学メディアセンター、病院情報システム部の職員によるワーキンググループを3年前に発足させ

た。さらに、医学部企画室、医学メディアセンター、病院情報システム部によるプロジェクトチームを組みシステム化を実現した。

このデータベース化は、パソコン単体で開発する第一フェーズ、ネットワーク化する第二フェーズ、個人端末からの人力検索を可能とする第三フェーズを経て完結するもので、現在第一フェーズの段階ではあるが、平成7年度、8年度の2年分のデータが蓄積されたので、ここに報告する。

## 2. データベースのシステム構成

### 2.1 データベースの機能

使用するハードウェアはDOS/V機(IBM Aptiva)、OSはMicrosoft Windows 95、ソフトウェアはMicrosoft Access Ver 2.0で開発した。Microsoft Accessはファイル(テーブル)間の関連づけが行なえるリレーショナルデータベースソフトで、データの簡易検索機能や、画面作成機能、帳票作成機能があり、またAccess Basic(後続バージョンではVisual Basic)というBasicに近い言語でプログラミングも行なえるデータベースソフトである。世界的にシェアの高いMicrosoft社の他ソフト(Excel, Word等)との相互運用が容易であることも利用価値の高いソフトであるといえよう。但し、本来ならば現在普及しているVer 2.0の後続バージョンであるVer 7.0やAccess 97に移行すべきところであるが、Access Basicのコンバージョン作業の時間的余裕がないため、Ver 2.0に甘んじている次第である。この点は今後時間が出来しだい順次移行していきたいと考えている。



実際のシステム構築においては、まず、教務課・医療事務室・慶應医学会の業務を分析し、データを

- ・論文
- ・著書
- ・学会発表
- ・学術賞
- ・補助、委託

の5分野に分け、その中で最低限必要な項目を洗い出してデータベースの構成を考えた。そして、以下の機能を作成した。

1) セキュリティ

Access のセキュリティ設定機能とプログラムで、Access 起動時のユーザー名によって画面を開く権限やデータを更新する権限を制限できるようにした(図1)。

2) データ入力(画面から)

データを画面から手入力する機能で、研究室名は研究者名のマスターファイル(テーブル)を元にした入力値のリストから選択できるようになっている(図2)。現在はフロッピーディスクからのデータ入力を主に行なっているため、一般利用者は入力できないようセキュリティをかけてある。

3) データ入力(フロッピーディスクから)

ある決まったフォーマットのテキストファイルをデータとして取り込めるように Access のなかでプログラムを組んだ(図3)。必要項目のそろっていないエラーデータは、はじきだすチェックをし、Access 上で手直し、再入力できるようにした。また、紙ベースでチェックを行なえるよう、エラーデータの一覧も出力できるようにした。

4) データ検索

検索条件は、研究室名、研究者名、論題、出版年月などあらゆる項目を指定できるようにし、複数の条件を指定した場合は条件を掛け合わせて検索するようにした。研究者名や論題は完全一致でなくても姓のみ、名のみなどの探したいキーワードから検索可能になっている(図4-1)。そこから簡単なデータ一覧を表示(図4-2)、さらに1件ごとに詳細画面を表示できるようにした(図4-3)。詳細画面はそのままの

ハードコピーを取れるようにした。一覧表示の画面からは、帳票作成機能を利用して一覧リストの出力ができるようになっている。

5) 各種リスト出力

医療事務室から厚生省に毎年提出していたリストを、論文と補助・委託の2分野のデータを使って Access から直接出力できるよう、帳票作成機能で作成した(図5)。

## 2.2 データ収集

第一段階として、研究者側からのデータ収集はフロッピーディスクで行なうことにした。医学部内では比較的 Macintosh の普及率が高いが、以前から NEC 98 シリーズを使い続けている研究室や、DOS/V 機を利用している研究室などもある。そのようなことから、パソコン機種にとらわれない方法でデータを得られるよう次のようにした。

1) 平成7年度分

入力用ガイドをつけたテキストファイル(図6)を配布し、各研究室でエディターを利用して入力してもらったものとそれをプリントアウトしてもらったものを回収、業者にデータ部のみを CSV 形式のファイルに落としてもらい、データベースへ取り込んだ。しかし、入力用ガイドやアンダーラインにガードがかかかっていないため入力しにくいという声があった。また、データの漏れやローマ字名のところに漢字名が入力されていたり、年月の表記の全角、半角の統一がとれていないなどのトラブルが多かった。このため、データベース側のエラーリストでのチェックや修正、再入力の機能を活用してデータを整える作業を行なった(図7)。

2) 平成8年度分

平成7年度分で行ったトラブルを解消するため、フリーソフトウェア(カード型テキストデータ作成ソフト)をパソコン通信でダウンロードして利用することにした。NEC 98 用、DOS/V 用には Card Editor Ver 1.0(図8)、Mac 用には Force Engine(図9)を使用し、各分野の入力用フォーマットを作成した。これらのソフトを1枚のフロッピーディスクに収め、各データの入力上の注意点とソフトの利用方法の両方について、紙のマニュアルだけでなく、フロッ

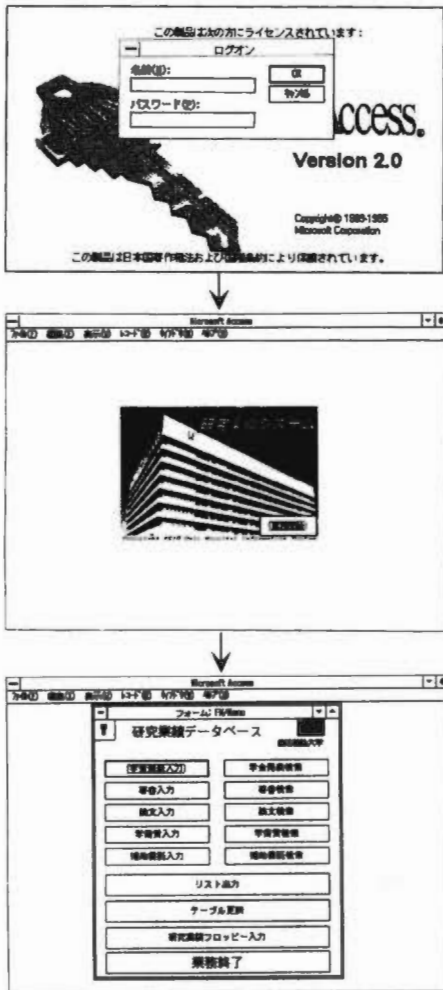


図1 研究業績データベース起動時からメインメニューまでの画面の流れ

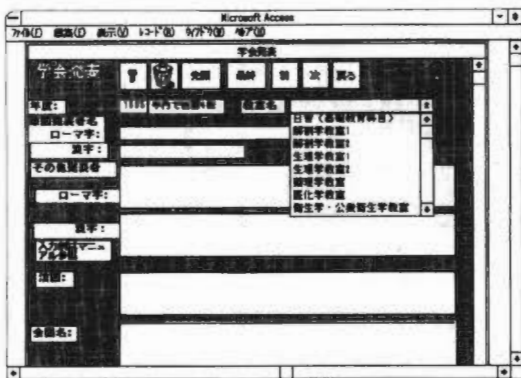


図2 データ入力(画面から)の画面

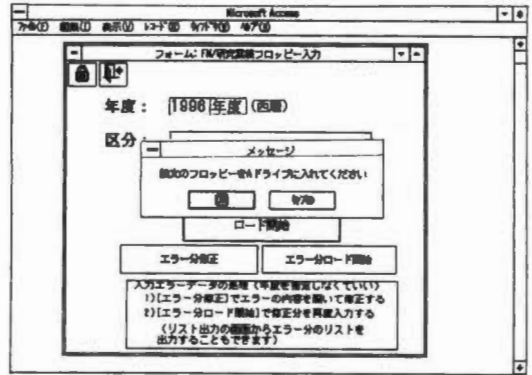


図3 データ入力(フロッピーディスクから)の画面

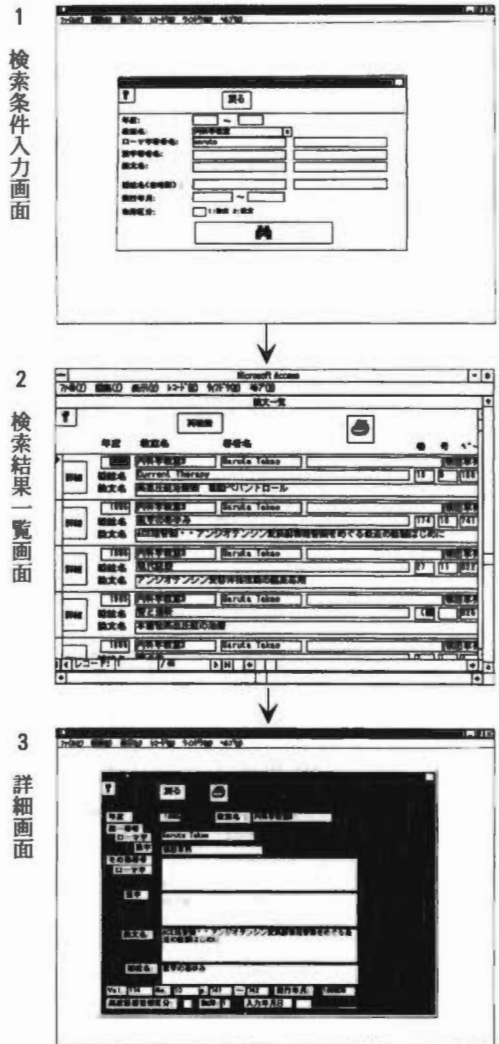


図4 データ検索の画面の流れ



ピーディスク上にもファイルを作って各研究室に配布した。このフロッピーディスクに入力してもらい、特殊文字を含むデータのプリントアウトとともに回収、こちらで全データのプリントアウトと、CSV形式のファイルに変換する作業を行なった後、業者に校正を含めて編集を依頼し、戻ってきたCSV形式のファイルをデータベースへ取り込んだ。各フィールドの属性が限定できるフリーソフトウェアを使ったことで入力漏れや誤りが減少し、研究者側から好評を得ることができた。とくに、Force Engineは入力値を画面から選択する形がとれるため、発行年月などの項目に誤データが入るようなことはなくなった。また、1研究室1枚のフロッピーディスクを配布したが、別々に入力したデータを1つのフロッピーに結合する機能もあり、データ量の多い研究室では入力作業を分散できたのではないと思われる。

図8 平成8年度データ入力画面 (Card Editor)

図9 平成8年度データ入力画面 (Force Engine)

### 3. データベース導入後の変化

平成7年度は初年度ということもあり、データを提出する研究者側から、改良の要望が多数寄せられたり、データの入力ミスが多かったが、これをもとにフリーソフトウェアを利用したため、平成8年度は期限内にデータ回収を終え、データベースへの取り込みも順調に進んでいる。

また、データベース化によるメリットを研究者側に広く理解してもらうため、「きたさとニュース」や「医学部病院ニュース」などに積極的に広報した。これにより、ある程度研究者側のデータベース化に対する理解が得られたと考えている。

「医学部年報」の刊行では、データの回収率が高まったため、30ページの増ページとなったにもかかわらず、時間と手間が短縮されただけでなく、大幅な経費の減額となった。また、教務課や、医療事務室などの事務部門でも、このデータベースを利用して文部省や厚生省に提出する資料を作成したため、大幅な作業時間の短縮がみられた。

医学メディアセンターでは、いつでも検索できるように専用パソコンを設置してある。研究者名を複数指定して検索したり、同姓同名の研究者を研究室名や研究内容から特定したりするなど、あらゆる角度から検索が可能になったため、非常に有効に利用されている。

平成7年度のデータはCD-ROMに保存用として焼き付けたので、将来は研究室へ配布することも考えている。

### 4. 今後の展望

研究者側からは自分でデータを入力するのではなく、個人で所有しているデータベースからデータを取り込んでもらいたいとの要望があった。しかし、既存のデータベースは公的機関に提出する必要なデータ項目が入っていなかったり、データの漏れがあるため、すべてを満たすものではない。取り込んだ上で必要項目を追加することで了解してもらっている。一方、さらにこのデータベースへ取り込んで欲しいというデータ項目もある。これらを解決するために、研究者側との意見調整を今後も続けていかなければならない。

第2フェーズで予定しているネットワーク化も今後の課題である。この医学部研究業績データベースは、現時点ではパソコン単体のものであり、他地区から検索ができるわけではない。ネットワーク上での検索を可能とすることにより、学部の枠を越えた共同研究活動に役立つものと思われる。そのためにも、慶應義塾大学全キャンパスのデータベース化が実現することを希望している。

第3フェーズでは、発生源入力の方策も考えていかなければならない。医学研究は共同研究が多いため、個人単位でデータ提出された場合、重複データを削除する必要がある。現時点でも複数の研究室で共同研究している場合、重複データが生じている。今後発生源でデータ入力した場合、重

複データを検索し、お互いにリンクを張るようなシステムも必要になってくると思われる。

## 5. おわりに

「医学部年報」の刊行や、各省庁提出業務の改善ならびに研究者の数回にわたるデータ提出作業の一元化を目的に、論文、著書、学会発表、学術賞、補助・委託のデータベース化を図ってきたが、この5項目にとどまらず、あらゆる媒体の業績も収録対象として考えていかなければならない時代になりつつある。課題ばかりが山積みではあるが、研究者や関係部署の協力を得ながら一歩ずつ前進していきたい。

### メディアネットニュース

#### 『慶應義塾大学メディアネット メディアセンター要覧 1997』の発行

メディアネット誕生は1993（平成5）年4月のことでした。研究教育情報センター（図書館）と大学計算センター（計算室）を機能的に統合した組織名がメディアネットです。そこで、どんな活動が行なわれているのか、あるいはその歴史に関心を持ってくださる方々のために、1997年5月にメディアネットでは標記要覧を作成いたしました。図書館は情報センター当

時より全地区で統計の標準化を行なってきています。それらの統計数値をまとめ、グラフ化してあります。（日英対応17ページA4版）メディアネット本部および各支部センターにありますので、ご希望の方はご一報ください。学外の方はメディアネット本部（電話 03-3453-4511 内線 2505～2506）にお問い合わせください。

（非売品）

## ＜ティールーム＞

## 神宮の青い空

あづま  
東 利 江

「空を見に行きたいなあ…」

ある日、いつものように検温に訪れた病室で、術後少しづつ歩くことができるようになってきていた患者さん（仮にKさんとする）が、ぼつりと話された。病院のある信濃町地区は、神宮外苑や東宮御所、新宿御苑という緑あふれる場所に囲まれているかたちになっている。私が新人ナースとして配属された病棟は、ちょうど神宮外苑の緑を見渡すことができる位置にあった。したがって病室からでも空は見えるのだが、どうやらKさんはこの空では満足できない様子だった。「そら…、ですか?」「そう、そらだよ」まるで小断のお題をいただいたように考えこむ新人ナースを見て、Kさんと奥様はいたずらっぽく笑っておられる。空、空、Kさんが歩いて行くことができ、きれいな空が見える所。私の頭の中ではただ「そら」がぐるぐると回っていた。ナースステーションに戻り、このことを先輩ナースに話すと、先輩は微笑みながら「いいところがあるわ。病院の中だけれど、とても見晴らしがいいの。」と何やら名案があるようで、思わず「そ、それはどこですか!」と叫んでしまっていた。

その場所とは、私の働いている病棟つまりKさんの病室がある病棟の屋上であった。そしてそこは、かつて俳優の石原裕次郎氏が手術を受けた後、テレビカメラに向かって手をふった場所であるという。これはいいかもしれない。さっそく私はKさんに屋上までの散歩を提案した（もちろん、石原裕次郎氏のエピソードつきである）。Kさんも奥様もとても乗り気で、ぜひそこから空を見ようということになった。

そんなわけで、Kさんの屋上散歩ツアーが計画

された。メンバーはKさんと奥様、私、場所を推薦してくれた先輩の4名である。院内であるとはいえ、勝手に出かけてしまうわけにはいかない。しかるべきプロセスを経て、私たち4人はある初夏の日の昼下がりに目的地に向かった。ひとつだけあやふやなことは、なぜそんな時間に私と先輩の2人が患者さんと散歩に出かけることができたのかということだ。もう10年以上前のことになるので、今となっては謎である。しかし、それ以外のことははっきりと覚えている。それは、証拠写真があるからなのだ。せっかく空を見に行くのだから、写真を撮りたいとKさんが奥様に話されていたのだった。

目的地に到着すると、初夏の眩しい日差しと青い空、神宮外苑に広がる緑がそれは美しく、私たち4人はただもうその景色に見とれていた。

Kさんは「ここが都会であることを忘れてしまうような風景だね」と空をみつめていらした。「さあ皆さん、写真を撮りましょう」奥様の声でそれぞれがKさんを囲んでフレームにおさまった。

後日できあがった写真を見た先輩は、ひとこと「あなたが一番嬉しそうよ」と言った。そんなことがあるかしらと思ひながら写真を見てみると、はたしてそれは事実だった。もちろん念願の空を見ることができたKさんと奥様も、やわらかな笑顔だった。しかし、この写真をながめているうちに、本当に空を見たかったのは、実は私だったのではないかなと思えてきた。新人ナースとして無我夢中で毎日を送り、色濃くなっていく木々の緑や空の青さに気づかないほど心が小さくなっていったことを、Kさんが気づかせてくださった。私は、いたらない新人ナースをあたかく見守ってくださったKさんに、あらためて感謝した。

それ以来、私はあの日の青空が忘れられずに、よく一人で屋上に出た。新棟が完成してからは、屋上から見える空の様子も様変わりしてしまい、あの日見た空にはもう会えることができない。そして、私にあの空を見せてくださったKさんにも、今はもうお会いすることができない。しかし、私はいつも心の中に、あの日の青い空と眩しい光を持ち続けていきたいと思っている。（看護短期大学専任講師）

## 三田計算室リプレース

かね こ ひで とし  
金 子 秀 敏

(三田メディアセンター課長)

### 1. はじめに

計算機のリプレースは、基本的には3年サイクルで見直される。三田計算室(以下、計算室)では今年がこのリプレース時期にあたり、新学期が始まる前の2月中旬から3月下旬にかけて大学院校舎にあるパソコン室(321, 322, 333番教室)と地階にある一部のパソコンのリプレースを行い、夏季休業期間中に、ホストコンピュータと331番教室及び地階の残りのパソコンのリプレース作業が行われた。

リプレースは、単にハードウェアとソフトウェアの交換で済む場合もあるが、多くは、その時点での環境を見直し今後の3年間を展望しなくてはならない。従って、時には設置スペース、空調環境、電力の供給環境をも見直し大規模な工事が伴うことがある。今年のリプレースがまさにこの時期となり、リプレースと同時に計算室の改修工事と空調機器の交換が実施され、長期にわたって地階のオープンスペースが閉鎖され、ホストコンピュータのサービスも停止せざるを得ない事態となり、利用者の方々にはご迷惑をおかけした次第である。

今回このような工事が伴った背景として、ネットワーク環境の充実が挙げられる。かつての計算室の機械室といえばホストコンピュータのためにあったが、前回のリプレースの頃からネットワーク機器が設置されるようになり、先ず空調環境が整っている機械室に設置された。しかし、機械室もスペース的には余裕が無かったので、その後は計算室管理スペースへ順次サーバ等が設置され、機械室の狭隘化と電源容量の不足そして空調機の老朽化の問題が深刻化してきた。

これらの問題を解決するためには、機器の稼働停止と移設が必要なことから、ホストコンピュー

タのリプレースを機に改修工事及び空調機器の交換、電源系統の見直しを行った。

前置きが長くなったが、以下に今回のリプレースについてその概要を述べる。

### 2. パソコンのリプレースについて

今回のリプレースの目的は当初2つあった。

- ①Windows 3.1 から Windows 95 への環境移行
- ②ネットワークサービスの強化

これらは、時代の流れに沿ったもので、大学の情報処理環境と社会の情報処理環境とある程度整合性をもたせることも必要と考える。Windows 95 への環境移行や Web ブラウザの導入については以前から要望があったが、マシンのスペックやネットワークの負荷の問題などがあり、今回のリプレースによってようやく可能になった。

Windows 95 の導入については、Windows 3.1 よりも環境を破壊される可能性が高まるなどの不安もあったが、市販のメンテナンスシステムを導入することによって、思ったよりも安定した稼働ができています。ただメンテナンスシステムもソフトの追加や環境の変更に非常に手がかかるなどの限界もあり、やはり Windows NT を導入して強固なシステムを作る必要があるという意見がでてきた。

また、Web のブラウザソフトを公開したことは好評で、情報の収集・発信という点での教育効果が大きい期待できたが、その反面モラル上の問題も発生している。学外のホームページへの低俗ないたずら書き等があり、Web の管理者やホームページの作成者からクレームがきている。

パソコン室の利用は現在、授業等で使われている以外は、原則サービス時間内であれば利用者登録なしで使える。しかし、ホストコンピュータや

ワークステーションのように利用者登録をしているならば、不正行為やモラル上の問題が発生した場合にその利用者を特定し利用を停止することが可能となり、発生を抑制することができる。

利用登録なしでのネットワーク利用には、いろいろ問題がでてくることはある程度予測していたが、現実に学外からクレームがくると本学の品位や教育水準までも問われることになるので、いつまでも野放しのまま開放することはできない。

やはり、パソコンユーザであってもネットワークに接続されているパソコンを利用するなら利用登録をすべきだろうという意見で固まってきた。だが、利用登録をするためにはそのためのシステムを考えなくてはならないし、そうなると果たして Windows 95 が適しているのだろうか等、振り出しに戻り検討をすることになった。その際に、当然今動いているソフトが使用できなくなってしまっは授業に影響が出てくるので、そのへの調査も必要となる。

結論としては、各地区一斉にとはいかなかったが、三田計算室としてはパソコンもリプレースし能力的には問題がないので、年度の途中であるが、秋学期より OS を Windows 95 から Windows NT に変更し、パソコン利用者も登録制に移行することにした。利用者側から見ると先ず電源投入後に、利用者 ID とパスワードの入力を求められる

が、あとは今までの Windows 95 の画面と大差はない。

メリットとしては、ファイルサーバを備えることで個人環境やデータが利用者毎に保存できるようになり、今後メールなども Windows 環境で利用できるようになるなどが挙げられる。

参考までに今回のリプレース機器を以下の表にまとめる。

特に 333 番教室は、「慶應アドバンストリーサーチネットワーク」という文部省の助成を受けた高速ネットワークの実験を行うプロジェクトの一環として、他のパソコン室に比較してネットワークの高速化や UNIX の X 端末としての機能を備えている。

### 3. ホストコンピュータのリプレースについて

今回のリプレースは、まず本体を FACOM M1700/10 (1 CPU 256 MB, HD: 102 GB) から FACOM GS 8400/20 (2 CPU 256 MB, HD: 105.9 GB) に交換した。

また周辺機器に関しては、磁気テープ装置が 3 台削減、日本語ラインプリンタ (NLP) が 1 台削減、カートリッジライブラリ装置が 1 台増設、Super-NMC の導入による IP ネットワーク接続の強化等が挙げられる。

従来のホストコンピュータのリプレースは、能

教室名	台数	旧機種 (CPU)	新機種 (CPU)	備考
321	37	FMV-499D3 (i486 DX 4 100 MHz)	FMV-6200D7 (PentiumPro 200 MHz)	プリンタも BJC 420J (18 台) に交換。
322	55	FMV-499D3 (i486 DX 4 100 MHz)	FMV-6200D7 (PentiumPro 200 MHz)	プリンタも BJC 420J (28 台) に交換。
331	69	PC-9821Cs2 (i486 SX 33 MHz)	PC-9821 Ra 20/N 30 (PentiumPro 200 MHz)	
333	35	PS/V Vision (IBM 486 SLC 2 50 MHz)	PC 350 (Pentium 200 MHz)	
地階 共用パソコン室	20 (15 から 変更)	FMV-466D2 (i486 DX 2 66 MHz)	FMV-6200D7 (PentiumPro 200 MHz)	プリンタも BJC 420J (10 台) に交換。その他、DOS/V 用のスキャナや MO ドライブも新たに設置。

表 パソコン室新旧機器比較



力アップを目的として行われてきた。しかし、今回のリプレースに関しては能力アップが目的でなく、機械室の狭隘化の解消、空調機も含めた消費電力の節減を目的とし、ランニングコストの削減を目指したものである。因みに、ホストコンピュータのリプレースによって、設置面積及び消費電力が約40%、発熱量が約35%節減される。

ただ、ホスト側でランニングコストの削減を実施しても、ネットワーク機器は今後も拡充されていくので、この分野では逆に設置スペース、消費電力共に増加傾向にある。

三田のホストコンピュータの前回のリプレースが1994年なので、その前年の1993年度と今回のリプレースの前年である1996年度の稼働実績を比較してみると、

年度	処理件数	CPU 時間
1993	191,926	256.5
1996	153,842	103.0

となり、処理件数が伸びず、能力アップした分CPU時間が減っている。このことから、ホストコンピュータの能力は現状でも十分であることが分かる。

これらの要因としては、一つには情報処理教育の実習環境がホストからパソコンへシフトしたこと、研究者の利用も同様にパソコンへシフトしている。それと、三田のホストコンピュータの約半分強が事務の業務システムで使われているが、事務システム自体のホストでの新規開発がなくなっていることなどが挙げられる。

現在、事務システムを除いてホストコンピュータでの処理は、日経 NEEDS 関係のデータ処理が主であるが、最近話題になっている2000年問題とも絡み、これらのシステムとデータの稼働環境の再検討が必要となっている。メディアセンターとして今後データベースサービスを強化していくためにも、計算機環境の決定には十分な検討が必要である。

#### 4. おわりに

以上、今回のリプレースについて述べたが、改修工事関係は本学管財部工務課・施設課の、ホストコンピュータのリプレースに関してはメーカーで

ある富士通のSE・CE・施設関係業者の協力で計画通り進めることができた。

しかし、パソコンのリプレースに関してはかなりの時間と労力が必要とされた。過去のパソコン室のリプレースはメーカーの提案をほとんどそのまま採用し、実際の作業も含めほとんどメーカー任せであった。今回は、計算室主導でシステムを検討し、作業等も、特にシステム作業はメーカーの手をほとんど借りず、なるべく計算室職員だけで行ったように、リプレースのあり方も変わってきている。具体的には、先ず、機種選定から始まり導入ソフトの選定・購入方法の検討・動作確認・インストール、そしてネットワーク環境設定、更に、障害時のリカバリー対策の検討とシステムへの組み込み等である。さらにパソコン室のネットワークケーブルの撤去、新規配線までも行うこともある。

これらの工程はもちろんホストコンピュータにもあるが、ホストコンピュータの場合はパソコンほど選択肢はなく、ある程度メーカーに任せられる。(と言うよりもホストにかかわる人材がいなくなっている。)逆にネットワーク関係についてはマルチベンダー化の流れが非常に顕著であり、専門的知識を持った技術者の育成が急務となっている。メディアネット本部のNTC(Network Technology Center)(仮称)や業務委託要員の協力もあるが、計算室職員の技術向上も考え、作業に積極的に参加するようにしている。

以上、これだけのリプレースを短期間に行うのは珍しいことであり、かなりのオーバーワークとなっている状況ではあるが、ユーザーサービスの向上を考えて、前向きに業務を遂行していることをご理解願いたい。



# 日吉メディアセンターにおける 情報リテラシー教育について

ひら お こう せう  
平 尾 行 藏

(日吉メディアセンター課長)

## はじめに

日吉メディアセンターでは今年4月に文・経・法・商・医・理工の6学部の新入生5,700名を対象に、以下の4つのプログラムから成る「情報リテラシー作戦」を実施した。

- (1)メディアセンターオリエンテーション
- (2)OPAC セミナー
- (3)コンピュータの使い方セミナー
- (4)理工学概論 情報リテラシー入門

これらは、従来の用語で表現すると、段階的かつ組織的な図書館と計算室の「利用指導」ということになるであろう。

## 1. 「日吉メディアセンターの中・長期ビジョン」の策定

一般教育課程を担当する日吉キャンパスの研究・教育・学習支援施設である日吉メディアセンターの役割とは何かについて、平成8年10月に発表された「日吉メディアセンターの中・長期ビジョン」<sup>1)</sup>は次のように述べている。

「広範な学問の入口に立つ若い学生に対して、最良の学習環境を提供し、彼らを育てる研究者に対して、最良の研究・教育環境を提供するフロンティアたること。また、学内外に学術情報を受・発信することによって、情報関連機関および地域社会との共存を図っていくこと、さらに、日吉キャンパスにおける学術情報のセンターとして、常に新たな試みに挑戦すること。」

一般教育課程の学生を利用対象に限定すると目標設定に困難な面があるが、キャンパスの特性を鑑み、固有の問題を追究することにより「ビジョン」は作られたのである。

## 2. 情報リテラシー

「ビジョン」には次のような具体的目標が掲げられている。

- ①情報リテラシーを全学生に浸透させること（情報リテラシーはさらに狭義の情報リテラシーとコンピュータリテラシーとに細分し、それぞれ一定のレベルに区分しレベル毎に段階的に取り組んでいく）
  - ②カリキュラムと連動する学習センター機能を拡充すること
  - ③学術情報サービスを拡充すること（研究者向けサービス、デジタル情報サービス等）さて「情報リテラシー」とは何か。未だ明確な定義はないが、次の6つの要素を考慮すべきであるといわれている。<sup>2)</sup>
    - a. 情報の発生、流通、収集、組織、利用のプロセスあるいはシステム
    - b. 情報を探し出し、入手するためのシステムとサービスの利用法
    - c. 図書館を含む多様な情報チャネルと資源の有効性と信頼性を評価する方法
    - d. 自分の必要とする情報を収集し、加工し、保管するための基礎的技能
    - e. 成果発表の方法
    - f. 広く情報に関する諸問題（著作権、プライバシー、情報公開等）を理解できる知識
- 従って情報リテラシーとは、情報をその発生・流通・蓄積・利用という社会的文脈で捉えつつ、情報探索プロセスに関する知識と技術を持って、情報を批判的に分析・評価・表現することのできる能力ということになる。コンピュータの読み書き能力を前提とした、社会的文脈における情報の

別表 情報リテラシープログラム（対象は環境情報、総合政策の2学部を除く6学部の新入生 5,712名）  
（ ）内は昨年

プログラム	口 程	時間	回数	参加者数	対象者数	参加率	
(1) オリエンテーション	4/4～7 (4/4～9)	40分	10(6)回	3,100(1,350)名	5,712名	54%	
(2) OPAC セミナー	4/8～14 (4/8～5/13)	35	61(19)	819(227)	4,539*1	18	
(3) コンピュータの使い方 セミナー	A コース	4/8～11(－)	90	20(－)	1,049(－)	5,712*2	18
	B コース	4/12～21(－)	90	39(－)	1,435(－)	5,712*2	25
(4) 理工学概論	4/30～6/18 (－)	90	8(－)	510(－)	573*3	89	

- \*1. 理工学部1年生を除いた数字。  
 \*2. 既にキーボード操作・電子メールの送受信方法等を修得済みの学生は受講不要としたため対象学生数を確定することは不可能。便宜的に5,712名を対象数とした。  
 \*3. 理工学部1年生の、ほぼ半数を対象とした春学期終了時点での数字。

読み書き能力のことでありともいえる。

情報リテラシー教育は、従来の用語でいう「図書館利用教育」の上位概念である。

### 3. 情報リテラシーの全学生への浸透

目標①の実現のため日吉メディアセンター内のすべての部署から5名を選出して情報リテラシー実行委員会を設け、平成8年11月から検討を開始した。

「ビジョン」には「情報リテラシーの指導概要」が付されている。それをどのような形で実施するかを検討結果が冒頭で述べた4つのプログラムとなった。内容は、一言でいうと、上の6つの要素の b. と d. に対応している。

実施結果は次の通りである。各プログラムの参加者数等は別表を参照。

#### (1)メディアセンターオリエンテーション

参加者の拡大は従来からの課題であった。これまでも行っていた入学手続後の「図書館のすすめ」等の資料配布に加え、今年度は入学式直後にも情報リテラシー関連資料を改めて配布し、新入生への周知を図った。その結果参加者は約3,100名で、54%という参加率に結びついた。講師は情報リテラシー実行委員会のメンバー5名。ビデオとOHPを用い300名または450名収容の大教室にて実施。

医学部の学生数(100名)はちょうどAVホールの収容人員に見合うところから、医学部日吉主任の教員と協議し、(2)のOPACセミナーと同時開催した。参加率100%。

#### (2)OPAC セミナー

対象学部は文経法商医5学部(理工学部は(4)の別プログラム)。図書館内施設のAVホールを使用し、OPAC端末を用いた講義形式のセミナーを1週間に計60回開催した(医学部のために別に1回開催)。日吉メディアセンターの図書館系職員16名が交替で講師を勤めた。一人平均3.8回。医学部100名を含めて参加者数819名。教務部と慎重に協議した上で開催時期を決定したが、授業開始後に同時並行的に開催したことが低い参加率の原因の一つであろうか。メディアセンター独自企画の限界である。

#### (3)コンピュータの使い方セミナー

(2)と同じく授業開始後であったため、授業で使われていない(複数の)パソコン室を使用し2週間にわたって59回開催。「A. コンピュータ利用の初歩」「B. ネットワーク利用の初歩」という2コースを用意した。講師は外部に依頼し、計算室系職員は準備等を担当。A. と B. 両方に参加した学生の統計はない。メディアセンター独自企画であっても必要性の認識が学生側にあるセミナー

にはそれなりの参加者がいることがわかる。

#### (4)理工学概論 情報リテラシー入門

(1)～(3)の広報方法の改善と同時に、6学部の日吉主任の教員との協議を通じてカリキュラムとの連携を模索した。その結果、理工学部の必修科目「理工学概論」とのタイアップが実現し、「理工学概論 情報リテラシー (OPAC) 講義」と銘打って(4)を実施することとなった(秋学期は「理工学概論 情報リテラシー入門」とする予定)。「理工学文献の探し方」という資料を作成し配布した。一学年1,200名弱を60名または90名ずつに分け、春・秋学期各8回ずつ計16回、週1回(90分)のペースで行われている。内容は、理工学文献の探し方、OPAC セミナー、二次情報データベース(CD-ROM 形態)の使い方の3つから成る。講師は、情報リテラシー実行委員会のメンバーと情報メディアサービス担当職員。

春学期終了段階で出席者510名、履修者数に対する出席率89%であった。参加率をみただけでも、カリキュラムとの連携がいかに大きな力を発揮するかがわかる。また、レポート・感想文を読むと、私達の意図がどの程度学生に伝わったかについても積極的評価を下してよいと思われる。

#### (5)その他

法学部法律学科2年生秋学期の選択科目に「法学情報処理」があり、法学部から委嘱を受け三田と日吉のメディアセンター職員が1回ずつ出講し、図書館の利用法について講義している。平成9年度履修率72%。昭和61年から行われておりカリキュラムとの連携の先駆的例といえる。

個々の教員の依頼に応じ授業の枠内で「ステップアップセミナー」も行っている。図書館利用法、OPAC・CD-ROMの使い方等が主な内容。

その他以下のプログラムはメディアセンター独自企画として毎年改訂を加えて実施されている。図書館系(図書館活用セミナーとして実施)

CD-ROM 検索セミナー、FirstSearch セミナー、レポートに役立つ資料の探し方、OPAC グループレッスン、等

計算室系(利用説明会として実施)

Windows 95 入門、UNIX 入門、電子メール利用法、電子ニュース利用法、ホームページの公

開方法、等

これらの企画とカリキュラムとの連携については今後の課題である。

#### おわりに

慶應義塾大学の図書館(当時は情報センター)が図書館利用者教育を業務として自覚的に取り上げる必要性を認識してから20年が経過した。<sup>3)</sup>

私たちの今回の試みを見る限り、新入生に対するガイダンスの域を出ない部分も大いに残されている。全学生への浸透も未だ掛け声にすぎない。次年度以降の主な課題は次の4つである。

- ・文経商の3学部および法学部政治学科のカリキュラムとの連携について、検討を継続する。
- ・数十名が同時に端末を操作しながら実習形式で行う OPAC セミナーのための環境を作る。
- ・OPAC セミナー、資料の探し方セミナーの内容の質的向上を図る。その際「情報リテラシー」の前記6つの要素のうち、c.の観点を導入することに留意する。
- ・企画のネーミングを再検討する。例えば、入学式翌日の新入生に対して、「OPAC」セミナーという言葉使いが適切かどうか等。

なお、この報告と並行して、一般教育課程図書館における情報リテラシー教育についてというテーマで、共同執筆により、多少理論的裏付けのある論文を作成中であることを付言しておく。

#### 注

- 1) 慶應義塾大学日吉メディアセンター。日吉メディアセンターの中・長期ビジョン。1996.4p.
- 2) 三浦逸雄。“生涯学習時代における情報リテラシー教育”。21世紀に向けての生涯学習と図書館 生涯学習と利用教育 第9回21世紀への大学図書館国際シンポジウム。京都外国語大学編。京都、同大学、1996、p.19-28.
- 3) 渋川雅俊。“ライブラリー・インストラクション——知識への一つの接近法”。KULIC. No.11、p.10-15 (1978)

# 日吉の学術情報サービス

—— 新たな試み ——

かわ かみ きよ こ  
川 上 清 子

(日吉メディアセンター課長)

きの した かず ひこ  
木 下 和 彦

(日吉メディアセンター係主任)

## はじめに

日吉メディアセンターでは、平成9年4月より、教員を主な対象とした「学術情報サービス」を開始した。それまでも教員向けのサービスは行っていたが、どちらかといえば学生重視であった日吉メディアセンターが、教員にスポットを当てたサービス展開をしようという点で、新しい試みであるといえよう。

## 1. 背 景

サービスを開始したのは今年度からであるが、そのための準備は数年前にさかのぼることができる。平成7年に、それまで図書館情報サービス担当課長が兼務をしていた情報メディアサービス担当に専任の課長が置かれ、平成8年には、三田・日吉合同での収書・目録業務の開始に伴い、目録担当の人員を新しいサービスのために充当することができた。また日吉メディアセンター内の業務の見直しをおこない、雑誌業務を合理化することで、さらに人員を捻出した。こうした改革により、従来2名であった情報メディアサービス担当のスタッフが5名に増員され、新規サービスに取り組むための足固めができたのである。

さらに平成8年11月には、教員を対象とした利用者懇談会を開催し、研究者がどのような情報を欲しているかということを含め、メディアセンターのサービスに関する意見を聴取した。

これらを背景として、平成8年10月に発表された「日吉メディアセンターの中・長期ビジョン」

(以下「ビジョン」)において、「学術情報サービスを拡充すること」を正式に目標として掲げるに至った。

## 2. 学術情報サービス拡充計画

「ビジョン」を受け、情報メディアサービス担当では、学術情報サービスの拡充という漠然とした目標を、どのような形で実現していくかについて検討した。

[学術情報サービスの拡充とは]

- メディアセンターで提供している資料・サービスのうち、研究活動に関するものの積極的な紹介による利用の促進
- 研究・教育活動に役立つと思われる、新たな資料・サービスの調査・導入・紹介
- 従来サービスの見直しによる利用の簡便化・研究活動の内部・外部への紹介、およびそのためのデータの収集、加工
- 教員からの意見や要求を取り入れ、これをサービスに反映させるルートの確立

また、これらを実現していくためのステップを短期、中期、長期の3段階とし、平成9年度は短期計画として以下のサービスを掲げた。

[短期計画]

- (1) 図書館4階・研究者用フロアのパソコン環境整備
- (2) 研究者向け利用案内の作成
- (3) コンテンツサービスの開始
- (4) 新着図書情報サービスの開始
- (5) 日次速報データベース(学術情報センター)

への参加

(6) 教員向け利用説明会の実施

(7) カウンターサービスの見直し

次の章ではこのうち(1)から(6)について簡単に説明する。

### 3. 学術情報サービスの展開

(1) 図書館4階・研究者用フロアのパソコン環境整備

メディアセンターでは、FirstSearch などインターネットで利用できるいくつかのデータベースを導入している。しかし、日吉では、図書館内でこうしたデータベースに自由にアクセスできる環境が整備されていなかった。そこで、研究者用フロアである図書館4階にパソコンを設置し、利用に供することを計画している。今夏に工事を行い、秋からのサービス開始を目指している。

(2) 研究者向け利用案内の作成

従来から教員向けの利用案内も存在したが、それはリーフレット程度の、非常に簡便なものであった。教員からも、メディアセンターではどのようなサービスをしているのかよくわからない、という声がよせられていた。こうしたことから、教員にメディアセンターのサービスを把握してもらうとともに、これを活用してもらうことを目的として利用案内を作成した。これを日吉地区の専任教員には全員に配布するとともに、図書館4階カウンターで配布している。

(3) コンテンツサービスの開始

コンテンツサービスは、購読している雑誌の目次のコピーをとることが一般的だが、OCLCのContentsAlertというサービスを利用することにより、自館で所蔵していない雑誌の目次情報までも、利用者に提供することができる。また、この情報は電子メールで送付されるため、迅速に情報を入手できるというメリットもある。

今まで日吉ではコンテンツサービスを行っていなかったが、このContentsAlertを導入し、教員が必要とする学術情報の提供を行っていく。このサービスは今秋から開始予定である。

(4) 新着図書情報サービスの開始

図書館で新規に受け入れた図書にどのようなも

のがあるかを知らせることは、図書館資料をもって活用してもらうための効果的な方法のひとつであろう。教員の希望の分野について、新着図書の情報を出力し、月一回送付している。このサービスは6月から開始し、9月現在7名の教員に利用されている。

(5) 目次速報データベースへの参加

学術情報センターが行っている目次速報データベースは、主に大学紀要のためのデータベースである。このデータは、紀要の発行大学図書館が分担して作成することになっている。すでに三田メディアセンターではこのデータベースへ参加しており、日吉メディアセンターもこのたびこれに参加した。「日吉紀要」「体育研究所紀要」など、日吉で発行されている紀要類についてのデータを作成していくことになるが、このことにより、日吉地区の研究成果を広く学外に流布する効果がある。

(6) 教員向け利用説明会の実施

従来、学生向けの利用説明会は多く開催されてきたが、教員に対してはあまり行われていなかったのが現状である。日吉メディアセンターで行っているサービスを広く教員にも広報していこうという試みである。

平成9年度は、(a) 新任教員向け利用説明会、(b) データベース説明会、(c) OPAC 説明会などを計画し、実行している。

### おわりに

日吉キャンパスでは、現在、新しい研究室棟の建築計画を契機として、日吉キャンパスのあり方、研究・教育のあり方を検討するための委員会が発足している（日吉キャンパス研究環境懇談会平成8年9月～平成9年3月、日吉キャンパス研究環境基本計画委員会平成9年9月～）。こうした委員会で検討される内容にも留意しつつ、今後とも教員へのサービスに、なお一層の努力を続けていく必要があると感じている。

## ＜スタッフルーム：私のコレクション＞

## 西洋陶磁器に魅せられて

あら い けい こ  
新 井 圭 子

好きで集めているものと言えば、洋食器の類である。学生の頃からどこかで西洋陶磁器展とかマイセン展などあれば足を運んでいたが、特に興味をもって集めだしたのは結婚してからである。結婚を機にお祝いにお目当ての食器等をいただいたことから始まる。洋食器といってもその世界は幅広く、白く硬質でなめらかな磁器、ぼてっと厚く温かみがあるが壊れやすい陶器。それにガラス・銀製品やカトラリーも加わる。私が特に好きなものは陶磁器である。

マイセン、ヘキスト、セーブル……と名前を聞いただけでも甘美で魅惑的なこれらの窯は憧れの的であるが、この辺のものはとても手が出ないので美術館、本などで鑑賞するにとどめている。

年とともに好みも変わってくるので同一のシリーズを揃えるというのではなく、その都度いいと思うものを見つけるとつい買ってしまうという具合である。おかげで安物からちょっと高価なものまで色とりどりに雑然と身のまわりに置いてある。何かしら思い出と共に使いたいのので旅先や記念日にかこつけて買うことが多い。洋食器なのでおのずと旅先もヨーロッパが多くなる。

イタリアではベネチアングラス。寒い1月にムラノ島へ行った時は他に殆ど観光客はいなかった。工房に見学に入るとどこからともなく人がすり寄って来て説明してくれるのだが、こちらの質問にはたいして答えず、手っとり早く終わったところでショールームに案内される。それも高価なものが陳列されている部屋からだ。素晴らしい作品に見とれているとあれこれ勧めてくる。「あまり気にいらぬ」とか「ハネムーンで来たときに買った」などと言いつつしていたが結局、青と緑の縞模様の美しい花瓶と

香水瓶を買ってしまった。

聖フランチェスコ教会がある聖地アッシジではうねった迷路のような急斜面のあちこちで朽ちた壁に色鮮やかな絵皿が飾られている土産物屋が目を引く。隣町デルータで焼かれているものである。マジョリカ陶器を模した安物ではあるが温もりがあっても手作りという感じ。絵皿とにわとりの形が可愛い水差しを買った。

この手の土産物屋には吸い寄せられるようになってしまう。ドイツではピアマグと絵皿を。パリで買ったリモージュ焼きは19世紀ヨーロッパ貴族社会で流行し、当時活躍したファベルジェのエッグアートをモチーフにしたものである。宝石の名前がつけられていて綺麗なピンクの色合いが気に入っている。

この5月にはイギリスに行きピーターラビットの故郷である湖水地方を訪れ、物語さながらに残されている風景や作者の原画にふれて大いに触発されてまた記念品と称して買ってしまった。ロンドンではヴィクトリア・アルバート美術館の陶磁器・ガラスのコレクションが素晴らしい。以前、ウェッジウッド没後200年特別展が開催された時はロシアのエカテリーナ2世のフロッグサービス（離宮がある蛙沼から緑の小さな蛙がトレードマーク）の記念プレートも手にいれた。

数年前、超円高の時にはロンドンの某デパートからバーゲンセールを通販でディナーセット一式を衝動買いしてしまったこともある。

今はロココ様式と東洋の趣味の融合で他とは一味違ったヘレンド窯のものを集め始めたところだ。そのうち欲しいものにはジノリ窯の薄浮き彫りが美しい「カポディモンテ」シリーズ（ナポリ王カルロ4世が創設したカポ・ディ・モンテ窯の復刻シリーズ）がある。コーヒーカップひとつでいいから手にしたいものだ。

好きな食器にかこまれて暮らす。こんな小さな幸せを大事にしたい。

（日吉メディアセンター係主任）

# 慶應義塾博物館コレクションについて

こ が り え こ  
古 賀 理 恵 子

(三田メディアセンター)

## 1. コレクション形成の経緯

1997年5月、多くの貴重書を含む慶應義塾博物館コレクションの整理が終了した。これは以前「荒俣コレクション」と呼称されていたもので、荒俣宏著『世界博物学大図鑑』（平凡社1987-1994刊）の底本となる資料を多く含んでいる。博物学資料としては第一級と評価されていた同氏の個人コレクション約200タイトルを購入したのである。

旧蔵者荒俣宏氏は、1947年生まれの翻訳家・評論家・小説家である。1970年に本大学法学部を卒業、9年間コンピュータプログラマーとして会社勤務を終了後、フリーの翻訳家として独立し、紀田順一郎氏らと雑誌『幻想と怪奇』を発行するかたわら、評論活動を展開した。以後、『別世界通信』、『大博物学時代』など博物学・神秘学をテーマにした著作を発表する一方、ベストセラーとなった小説『帝都物語』を執筆するという経歴の持ち主である。

コレクションは、博物学の発展・黄金期である16世紀から19世紀にかけての重要な博物学資料（博物学・博物図鑑・解剖学・旅行記・百科全書等）を包括し、図版を含め保存状況は良好であった。また、写真発明以前の画像情報として博物学資料や風物誌資料は重要であること、蔵書構築の新たな柱となることが確認され、購入が決定された。

## 2. 博物学の展開

ところで博物学とは元来、主として天然に存在する多様な動植物・鉱物などの種類・性質・分布などの記載とその整理分類を行う総合的な学問を

指した。

博物学の発達には探検旅行の成果を流布させる図鑑・図譜の進展が並行しているが、古代博物学の図譜に描かれていた細密画の転写に終始していた中世、図鑑としての機能は失われ、他方では未知のものへの関心が怪物誌として流行するに至った。探検旅行の復活と印刷術の発展が共に訪れたルネッサンス以降、特に彩色した精密図版の作成を可能にする銅版画の技法的発展により、博物学書は大きく進展した。実物標本の精写のみでなく、生物の構造・生態を加味した精密画を描くことを可能にし、多数の博物図鑑の制作、本格的な分類学の成立の背景となったのである。

特に帝国主義が台頭した18世紀から19世紀には、多くの探検旅行が組織され、博物学的知識が蓄積された。やがて多様な自然物は歴史的に形成されたものであるという認識が加えられ、以後、博物学は記載・分類の学と、自然の多様性とその歴史の研究という意味を持つようになった。

## 3. 特記すべき資料

慶應義塾博物館コレクションの中に見られる特記すべき資料を紹介する。

コンラッド・ゲスナーは16世紀のチューリッヒに活躍した学者で、1544年には書誌学の基礎を築いた『書誌総覧』を著したことで有名である。その後、1551年から7年間かけてまとめた動物についての5冊の本は『動物誌』（ラテン語・初版）として知られている。

他の本から図を自由に引用していた当時としては質の高いオリジナルの図が多いという『動物誌』だが、引用・模倣という点では、特にデューラーのインドサイの模倣が有名である。デューラーは



1515年、初めてヨーロッパに運び込まれた生きたインドサイの図を描いたが、ゲスナーはそれを木版画に起こしたため、原図とは向きが逆のコピーが出来上がったという。一方で図中には、1つ前の時代・中世の怪物学の名残も認められるということだが、いずれも当時の技術が駆使されたものである。博物学コレクションにはドイツ語版『動物誌』(1598-1606年)が含まれているが、これもラテン語による初版と同じ図を用い、それに彩色がされているという貴重な資料である。



インドサイの図 デューラー『動物誌』より

また、本文は古典語名と各国語を併記しているが、これは本の成り立ちが実用だけでなくルネッサンスという時代を反映して自国語で書かれていた、という事情を浮き彫りにしている点でも興味深い。

ゲスナーの活躍した時代の博物学では個別のグループ内の記載と分類に力が注がれていたが、この後彼は『鉱物誌』(1565年)、『植物誌』(遺稿)と筆を進め、形態学的な類縁関係を模索し始めて

いたという。

また、1995年に博物学コレクションを受入れた当初、『動物誌』はドイツ語版のみを所蔵していたが、1996年12月にはラテン語版も購入した。

英仏の博物学は19世紀が黄金期である。フランスを代表するのがフランソワ・ルバイヤンの『アフリカ産鳥類の自然誌』(1797-1824年)で、300の彩色された銅版画から成る全6巻の図譜である。

一方イギリスを代表するのはP. J. セルビーの『ハト類』(1835年)、『オウム類』(1836年)である。これらは、石版技法を図鑑に応用して成功を収めたエドワード・リアが挿絵を担当している。

#### 4. コレクションの公開

20世紀に入ると博物学は全般的に衰退し、専ら古いものの模写や、写真版による図鑑制作に頼るようになる。この点でも、博物学コレクションの網羅している資料の重要性が窺える。

コレクションは塾内に留まらず、日本橋丸善にて行なわれた「理性の夢——図版と文字で読むフランス18世紀——」(1995年1月)、旧図書館及び日本橋三越にて行なわれた「HUMI プロジェクト」の展示を通して塾外にも公開されている。

さらにコレクションに含まれる貴重書は、現在構築中の貴重書データベースに搭載される。注目されるべき図版については画像として取り込まれ、WWW上で公開される予定である。

なお、通称コレクションと呼んでいるが、一般の貴重書・準貴重書と混架されている。しかし、コレクション・リストがあり、一覧可能であるということをつけ足しておきたい。

# 医学メディアセンターにおける日曜開館

—— 利用統計を中心に ——

かど や ひさし  
角 家 永

(医学メディアセンター)

## 1. はじめに

医学メディアセンター（北里記念医学図書館，以下：当センター）は昭和12年11月3日に開館し，今年で開設60年を迎えるが，その開設当初から日曜開館を行ってきた。ここでは当センターの特徴のひとつでもある日曜開館の概要と統計からみた利用状況について紹介する。

## 2. 日曜開館のはじまり

当センターにおける日曜開館は昭和12年の開設当初から行われてきた。途中，第二次大戦の影響により中止を余儀なくされたが，昭和24年に再開されて以来現在までそのサービスは継続されている。当初の開館時間は午前8時から正午まで（4時間）と午前中の開館であった。翌々年の昭和14年からは午後1時から午後5時までと午後の開館へと移行している。その当時の医科大学附属図書館統計（現在の日本医学図書館協会加盟館統計）<sup>1)</sup>によれば12の加盟館のうち，5つの加盟館で日曜開館が実施されており，そのほとんどが正午までの開館であった。

## 3. 日曜開館の概要

現在，日曜開館は正午から午後5時までを開館時間としサービスを行っている。日曜が祝日と重なった場合には休館となり，振替休日となる翌日に同様の開館時間で開館している。なお年末年始および夏期休暇期間中の日曜日は一部休館となる。表1に過去5年間の年間開館日数と日曜開館日数を示した。昨年度（平成8年度）は年間323日開館し，そのうち日曜開館は42日であった。勤務体制については，専任職員および学生嘱託，夜間臨

時職員（学生アルバイト）の中から，毎週専任職員1名以上を含む3名でローテーションを組み，勤務スケジュールを立てている。勤務時間は午前11時45分から午後5時15分までの計5時間30分であり，専任職員および学生嘱託に関しては休日出勤扱いとなるため，出勤の予定されている月の上曜日に振替休暇をとるようになっている。利用に関しては，休日開館であるということでの特別な制限はなく，閲覧，貸出，複写およびCD-ROM検索サービスについては，平日と変わりなくサービスを行っている。ただし，参考調査を担当する職員の出勤しない時には高度なレファレンスには応じられないなど，臨時職員のみで対応している平日の夜間開館と同様のサービスが中心となる。後にも述べるが，なかでも複写サービスの比重が大きいといえる。現状では，開館することにより利用者が必要とする資料および情報へのアクセスを確保し保証することが最大の目的であり，それを可能とする最低限のサービスを提供するとどまっている。また，第3土曜日の翌日の日曜開館日には図書館システムであるKOSMOSがメンテナンスのため停止していることから，資料の貸出はマニュアルでの対応となっている。所蔵確認を求める質問については，貸出中や製本中など細かい資料状態を確認することはできないものの，学術情報センターへ登録された所蔵情報が検索できるCD-ROMがありそれを利用し対応に努めている。

## 4. 統計からみた日曜開館

### 4.1 入館者数と学外来館者

表2に，今年度（平成9年度）4月から7月までの日曜開館における入館者数と学外来館者数を

示した。日曜開館における入館者の平均は149人、学外からの来館者の平均は8人となっている<sup>2)</sup>。日によって利用者数に大きな違いはみられない。

#### 4.2 貸出サービス

図1に示したのは、昨年度（平成8年度）の貸出冊数を利用者別にみた割合である。日曜開館では、32日<sup>3)</sup>で計3,502冊の貸出を行っている。利用者別にみると教職員3,063冊（87.5%）、学部生153冊（4.3%）、大学院生286冊（8.2%）と、教職員に対する貸出が9割近くを占め、学部生、大学院生への貸出はわずかであることがわかる。平日と比較すると、特に学部生への貸出が少ないことがわかる。また、貸出のほとんどを占める教職員のうち、勤務先が慶應義塾大学病院以外である、もしくは開業医であるなどの理由から平日の利用が少ないのではないかと考えられる三四会員<sup>4)</sup>への貸出については、平日と比べてきわめて多いという結果は得られなかった。

#### 4.3 複写サービス

医学分野において学術雑誌は最も重要な情報源であり、当センターにおけるサービスのなかでも掲載論文の入手を目的とする文献複写に対する需要が非常に高い。当センターにおける複写サービスは利用者の申し込みに応じて職員が複写するオペレータによる複写の形式をとっている。そのため出勤者が3人の日曜開館においては複写サービスの申し込みが多ければ多いほどそちらに労力が割かれることになり、利用者にとっては所蔵確認、検索サービスの補助などその他のサービスの質に、出勤者にとってはその日の業務の忙しさに影響を及ぼす結果となる。図2は過去5年間の日曜開館における複写枚数について月別の傾向を示したものである。複写枚数は、5月、7月、10月、11月、1月で多い傾向にあり、4月、6月、12月は比較的少ないことがわかる。表3に同じく過去5年間の日曜開館における複写枚数の統計を示した。職員の間で忙しさの目安とされる複写枚数が1,000枚を超える日が平成3年度には5日であったのが、平成6年度には13日、昨年度（平成8年度）には18日と年々増加している。こうした数字から年々複写サービスはその忙しさを増していることがわかる。特に昨年度はそれまで3万枚前半であった

表1 過去5年間に於ける年間開館日数および日曜開館日数

開館日数/年度	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年
年間(日)	325	323	315	319	323
日曜(日/内数)	37	42	41	37	42

表2 平成9年度日曜開館入館者数および学外人館者数

月	日	入館者	学外者	月	日	入館者	学外者
4	6	118	4	6	1	152	8
	13	119	4		8	157	10
	20	169	12		15	*	8
	27	150	9		22	180	12
					29	151	9
5	4	休館	休館	7	6	157	*
	11	140	8		13	148	7
	18	148	6		21	154	10
	25	*	10		27	142	*
合計						2,085	117
平均						148.9	8.4

\*は記録漏れなどにより不明

表3 過去5年間の日曜開館における複写枚数

複写枚数/年度	平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年
合計(枚)	30,485	33,478	34,133	33,957	44,489
平均(枚)	762.1	816.5	875.2	917.8	1,059.3
1,000枚以上の日数	8日	9日	13日	13日	18日

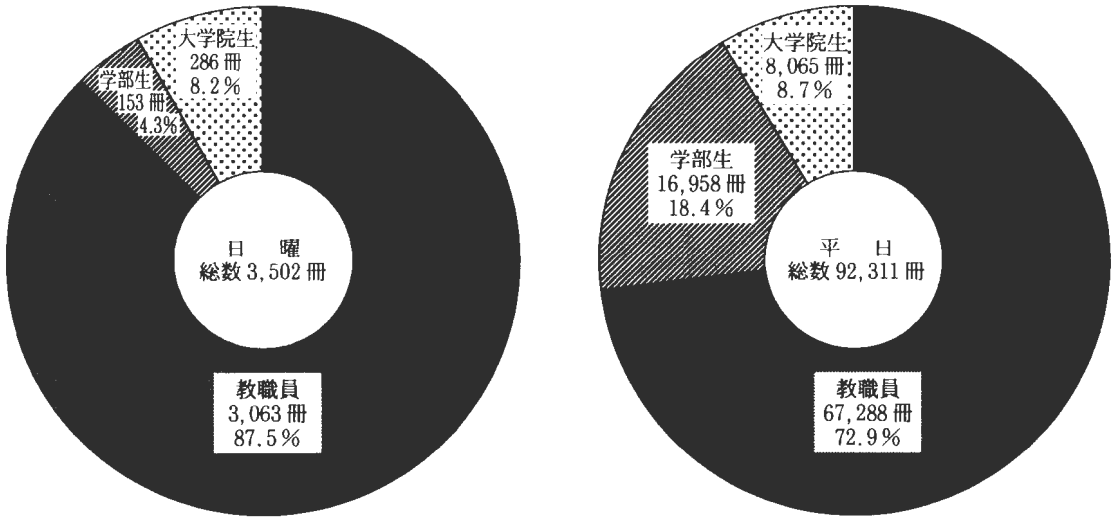


図1 平成8年度利用者別貸出統計

複写枚数 (単位: 枚)

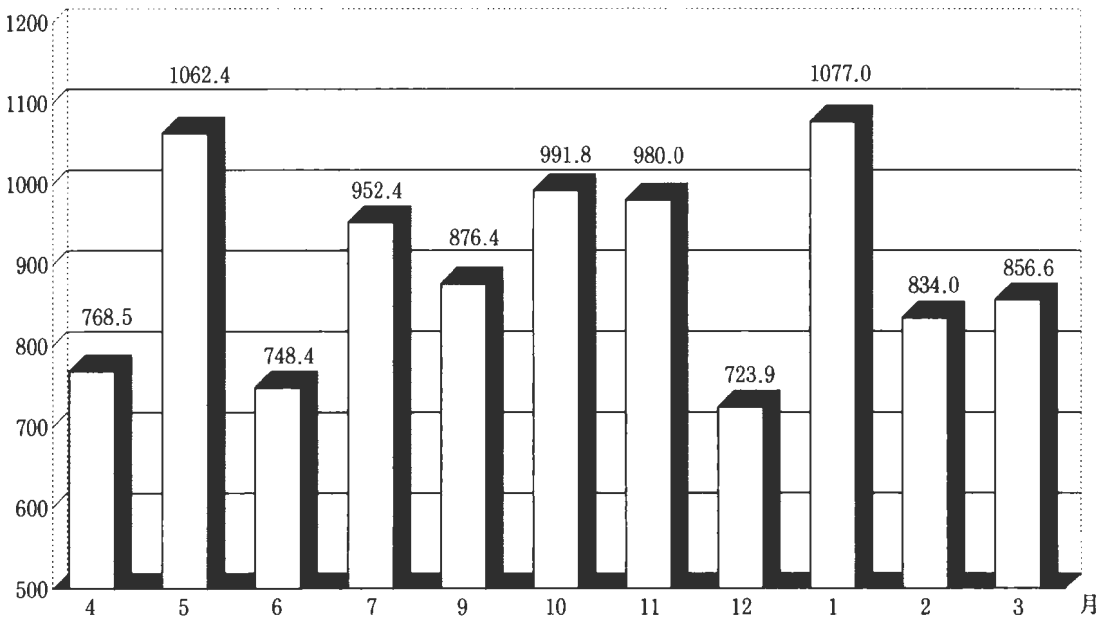


図2 過去5年間における日曜開館月別平均複写枚数

年間複写枚数が4万枚、1日の平均複写枚数も1,000枚を超え近年にない忙しさだったことがうかがえる。ちなみに今年度(平成9年度)4月から7月の4か月間における日曜開館(開館日数16日)では、複写枚数が1000枚を超えた日は2日しかなく、1日の平均複写枚数も750枚と現在までのところ過去5年間と比べるとその数は非常に少ない結果となっている。また、その4か月における利用者別の申し込み件数を調査したところ、半数以上が三四会員を含む学内者であった。ただし、学外来館者による申し込みは35%を占め、日によっては三四会員を含む学内者の申し込みを上回ることもあった。学内者の申し込みに占める三四会員の割合は平均して20%程であるが、日によってかなり違いがみられた。

## 5. 利用状況について

休日開館ということで、平日には来館が難しく利用が少ないと思われる三四会員および学外来館者による利用が多いのではないかと予想していた。しかし、実際に貸出、複写サービスともその利用の多くは普段から当センターの利用機会をもつ学内者によるものであった。これは学内者に平日、休日にかかわらず必要なときに図書館を利用したいというニーズが存在し、開館時間など細かい点は除いても当センターがそれに応えているということを示している。先日、医学部の学生と話をする機会を得たが、来年医師国家試験を控えておりこの秋からは図書館にこもる日が多くなると話していた。資料があるだけでなく静かで集中して勉強ができる場所としての図書館に対するニーズがそこにはある。今回は行うことができなかったが、実際に日曜開館にどういった利用者が、どういった利点を感じ、どういった目的をもって利用しているのか、またどういった要望をもっているのかアンケート調査を行うことにより、数字のうえからではわからない点も含め、今後のサービスを考えるうえでより参考となるデータが得られるのではないだろうか。

## 6. おわりに

利用者が図書館に対して常に求めるのは必要な

時に必要な情報をより容易に入手できる環境・サービスである。これまでの時代は、可能な限り長時間開館することにより図書館が所蔵する資料へのアクセスを保証することが重要なサービスであった。当センターにおける日曜開館もそうした要求にこたえるものである。今後、さらなる利用機会の拡大として、既にいくつかの大学図書館などで行われている時間外の無人開館および24時間開館<sup>5) 6)</sup>が考えられる。また、現在、既に利用者側の環境さえ整えば図書館を訪れることなくOPACで所蔵確認ができ、必要な情報を得るためにMEDLINEが検索できる時代においては、一次文献入手の即時性がこれまで以上に強く要求されるはずである。開館時間の延長による利用機会の拡大だけでなく、そうした要求に応える、対個人へのドキュメントデリバリーサービスや、オンラインジャーナルなどネットワークを介して利用できる情報へアクセスできる環境の早期実現が望まれる。

## 注

- 1) 第11次医科大学附属図書館統計。医科大学附属図書館協議会。昭和16年
- 2) 入館者数は無断持出防止装置であるブックディテクションシステムのカウント数、学外来館者数は「学外来館者名簿」記入数による。そのため学外来館者数については複写申し込み伝票などからも確認できるように実際にはこの平均を上回っている。
- 3) 実際は、42日開館しているが、メンテナンスのためKOSMOSが停止している第3土曜日の翌日の日曜開館日については貸出統計がなく、統計上数字のある32日を対象とした。
- 4) 当センターでは、勤務先が慶應義塾大学病院以外であっても、医学部卒業生の同窓会である三四会の会員に対しては、資料の貸出や相互貸借なども含め、学内利用者と同等のサービスを行っている。
- 5) 平成7年度日本医学図書館協会加盟館統計(日本医学図書館協会、1996)によれば、国公立を含む加盟する96大学の医学図書館のうち、13館(13.6%)で時間外の無人開館、うち5館(5.2%)で24時間開館が実施されている。また過去にいくつかの実施館の報告が「医学図書館」誌上にて掲載されている。

渡部洋二。"24時間開館"。医学図書館。Vol. 40, No. 1, p. 367-368 (1993)

佐々木國明。"本医学分館の無人開館の現状と

図書館管理運営上の課題”。医学図書館 Vol. 44,  
No. 2, p. 173-177 (1997)  
など

6) “24時間開館について”。きたさとニュース No.  
203, p. 9 (1996)

小展示ニュース

<医学メディアセンター>

1. 常設展示

(於 北里記念医学図書館入口展示ケース)

平成8年

7月1日～9月30日

慶應義塾情報スーパーハイウェイ

—信濃町地区運用開始—

10月9日～10月31日

今夏 Berlin, Würzburg 訪問時に収集  
した史料 — Röntgen 記念室・Siebold  
博物館 (Würzburg), Robert Koch 研  
究所 (Berlin)

11月5日～12月29日

日本医学史に登場する古医書 第1部

・日本医療の黎明期 (平安時代まで)

平成9年

1月6日～1月31日

ANATOMIA～ダ・ヴィンチから解剖図  
譜の歩み～ -preview

2月10日～4月30日

日本医学史に登場する古医書 第2部

・日本医療の黎明期 (鎌倉時代)

5月6日～6月30日

日本医学史に登場する古医書 第3部

・大陸医方受容の時代

第1章 中国医学の変遷 (その1)

7月1日～8月31日

日本医学史に登場する古医書 第3部

・大陸医方受容の時代

第2章 中国医学の変遷 (その2)

2. 特別展示

平成9年1月6日 新年祝賀会展示

(於 新棟11階会議室前)

・卒業記念写真帖 2回, 34回, 39回,  
66回-69回, 71回生の写真帖

平成9年6月12日 第66回北里記念式展示

(於 北里講堂ロビー)

・「終始一貫」北里柴三郎書

・「北里柴三郎記念室」ご案内  
(北里大学)

# 湘南藤沢メディアセンターにおける 利用実態調査プロジェクト報告

すぎ やま よし こ  
杉 山 良 子

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

## 1. はじめに

湘南藤沢メディアセンター（以下当館とする）では1996年7月、利用実態調査プロジェクトを立ち上げた。これは、開設以来6年を経過したことを期して、蔵書内容と利用実態を調査することによって蔵書構成を見直し、その結果を今後の蔵書構築に役立てようという目的で行われたものである。メンバーは閲覧担当2人、収書・目録・雑誌の各担当、それにそれらの業務を統括する課長の6人で構成された。

分析対象はKOSMOSから抽出した1995/1996年度分の図書、雑誌（統計書を除く）の蔵書と貸出データである。方法としてはまず日本十進分類法に基づいて主題別に蔵書を把握し、次に利用実態を主題、利用者の所属別に把握し、その上で蔵書と利用を関連づけて分析する、そして最後にこうした分析結果をもとに、今後どう対処するべきかを検討するというものである。

紙面に限りがあるため、ここでは1996年度分の図書のデータの分析結果の概略を報告する。

## 2. 蔵書分析

当館の蔵書数は1997年3月現在図書171,976冊、製本雑誌41,061冊の計213,037冊である。1996年度の増加冊数は、図書と雑誌の合計で蔵書の約1割強の23,000冊であった。

蔵書構成をみると、和図書45%、洋図書36%、和雑誌11%、洋雑誌8%で図書が圧倒的に多く、洋図書の割合は三田メディアセンターの次に多い。

当館では雑誌のバックナンバーが少ないために雑誌の比率は少ないが、カレントタイトル数は、2,653タイトルある。

一般書の主題別の蔵書構成が図1である。割合で見ると社会科学が41%と最多で、中でも経済学は全蔵書の16%を占める。次いで、歴史9%、総記8%、政治、社会学、工学、文学が同率の7%となっている。社会科学の他には総記と工学に含まれるコンピュータ関係の蔵書が多い。これは湘南藤沢キャンパスの2学部（総合政策学部、環境情報学部）の傾向を顕著にあらわしている。また、情報科学、通信工学、各国事情などのいくつかの主題では、洋書が和書の蔵書数を上回っている。

主題別の最後の文庫という項目は、当館独自の書架分類であり、新書・文庫を主題分類せず、一括配架するためにつけているものであり、全蔵書の4%（和書の7%）を占めている。

出版年別に蔵書の割合をみたものが図2である。基本的には現在の出版流通で入手できるものを収書対象としているため、1985年以降出版のものが59%を占め、1990年の開設以降出版のものは37%、最近2年間に出版されたものは11%にも上る。

主題別に出版年ごとの比率を調べたものが図3である。工学分野では1990年以降に出版された図書が約半分を占めており、さらにその中を細目で調べると、都市工学・環境工学、建築、通信工学などが特に多い。これらの主題は授業と密接な関係にあり、特に大学院のプロジェクト科目と呼ばれる共同研究の科目との関連が大きい。また自然科学の内訳では、数学、医学が多く、数学は出版点数が多い主題であること、医学は純粋医学ではなく、厚生行政やエイズ関係の図書が多いことによると思われる。

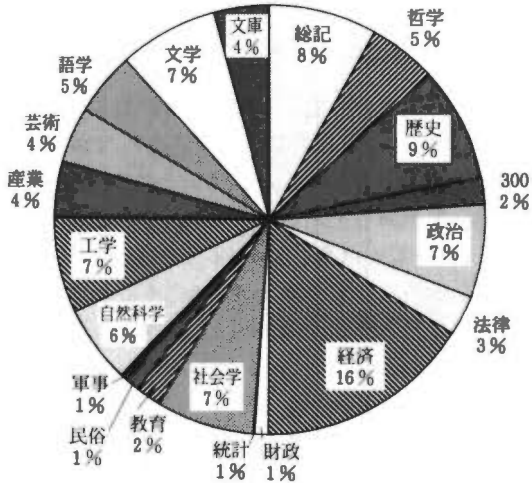


図1 蔵書構成 (主題別)

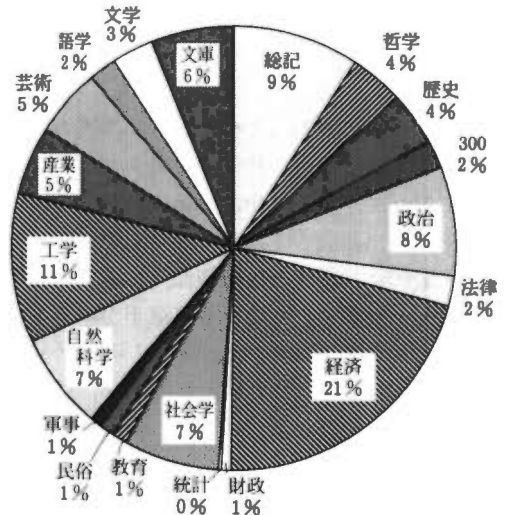


図4 貸出構成 (主題別)

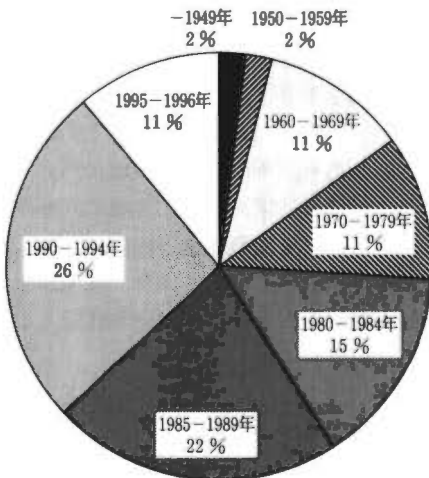


図2 蔵書構成 (出版年別)

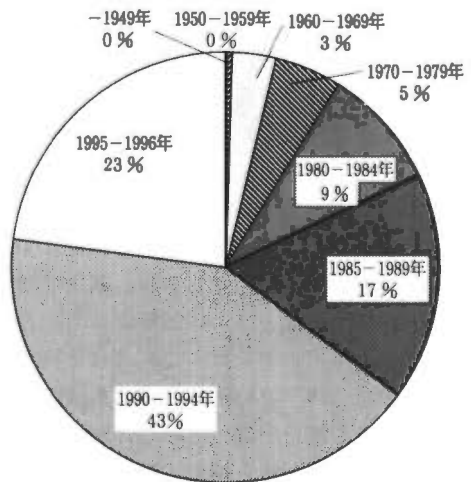


図5 貸出構成 (出版年別)

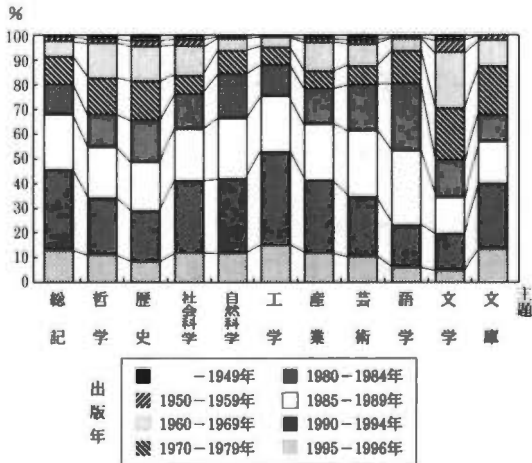


図3 蔵書構成 (主題・出版年別)

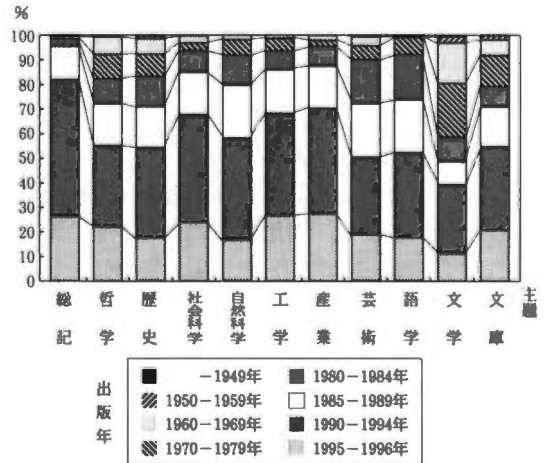


図6 貸出構成 (主題・出版年別)



### 3. 貸出分析

当館の貸出の大半は和書であり、洋書の貸出は極めて少ない。蔵書の和洋の比率が56:44であるのに対して、貸出の和洋の比率は92:8となっている。貸出冊数を主題別にみたものが図4である。一般的には蔵書と類似の傾向にあり、社会科学が44%と最多で、そのうち経済学が半分を占める。あとは工学が11%、総記9%、政治8%、社会学、自然科学が7%と続く。しかし、歴史、語学、文学では蔵書の割合に比べ、貸出の割合が半分くらいと少ない。

貸出された図書を出版年別にみたものが図5である。最も多いものは1990-1994年で貸出の43%を占め、1985年以降の過去12年間に出版されたものだけで全体の83%を占めており、新しいものの利用が圧倒的多数であることがわかる。

さらに、主題別に出版年ごとの貸出比率を調べたものが図6である。主題別にみても、1990年以降の図書の貸出が半分を超えているものが多い。情報科学がその多くを占めている総記では80%を超えている。工学は60%であるが、綱目で調べてみると、通信工学などは、1990年以降の図書の貸出は90%以上を占めていた。これは自然科学分野だけでなく社会科学の分野においても同様の傾向にあり、これも綱目で調べてみると政治、経済などの主題において70%を超えていた。

利用者別に貸出をみたものが図7、図8である。総合政策学部の学生の貸出数が断然多く、社会科学、しかも、経済、政治、社会の3主題に集中している。一方、環境情報学部の学生の貸出も社会科学が一番多いが、貸出の主題は多岐にわたっており、総記、哲学、自然科学、工学、芸術の5主題において、その貸出数は総合政策学部をわずかながら上回る。また、環境情報学部の学生と政策・メディア研究科(大学院)の学生の貸出傾向が似ていることも特徴的である。一般に総合政策学部の学生が社会科学を中心に図書をよく利用しており、環境情報学部の学生はあまり図書には依存しないが、様々な主題を平均的に利用していることがうかがえる。

### 4. 蔵書と貸出の相互分析

貸出数を蔵書数で割って利用率を計算したもの(これを蔵書回転率とする)を尺度として蔵書と貸出の相関関係をみたものが図9である。

貸出冊数が同じ主題であっても、その蔵書数が少なければ回転率は高くなり、多ければ低くなる。

図書全体の回転率の平均が0.45であるのに対して和書が0.74、洋書が0.08と洋書の回転率が極めて低い傾向がある。また文庫の回転率は0.69と平均を上回っており、文庫の一括配架が利用しやすいことを示している。回転率のトップは工学で1.3、次が社会科学の0.94、3番目が総記と産業で0.92となる。産業が高いのはマーケティング、貿易、運輸、通信産業等の主題の利用が多いことによる。また、芸術の回転率がその次に高いことも特徴的である。

綱目で調べると、和書の回転率が1を超えるものが26主題もあり、その主題は多岐にわたっている。トップの情報科学とイタリア語の回転率は2を超え、都市工学・環境工学、南米史、通信工学、心理学がそれに続いている。体育、音楽が1を超える回転率であることは、レポート作成との関係が大きいと思われる。

次に回転率を出版年別に調べてみると、出版年が新しくなるにつれて利用率が高くなり、特に1985年以降の利用率が激増することが図10でわかる。また全体の59%を占めている1985年以降の蔵書で貸出の83%をカバーしており、新しい図書に利用が集中している状況が読み取れる。

貸出回数が多い図書の内容を個別に調べてみると、教員著作やコンピュータの入門書が圧倒的多数であり、また授業やレポート作成とも密接な関係がみられる。当館では授業シラバスに掲載された関連図書を蔵書として購入しており、それらの集中的利用を確認することができる。これらの中で貸出回数が最高の図書は年間18回を数え、複本購入のものは、年間57回にも上った。こうした状況から当館が学習図書館として効果的に利用されている側面を知ることができる。

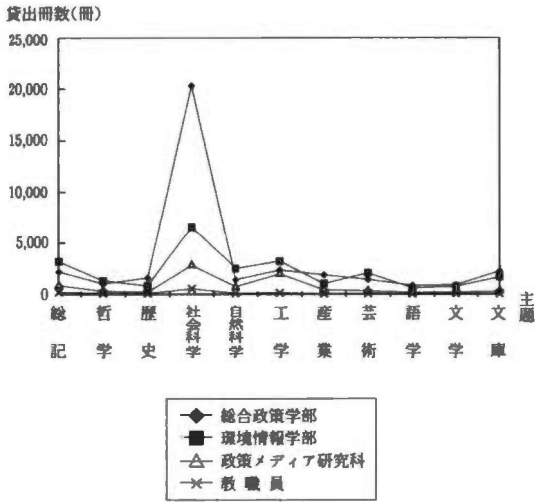


図7 利用者別貸出冊数

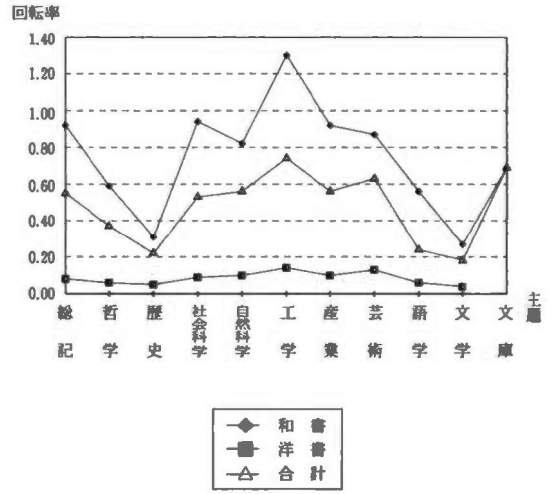


図9 蔵書回転率(主題別)

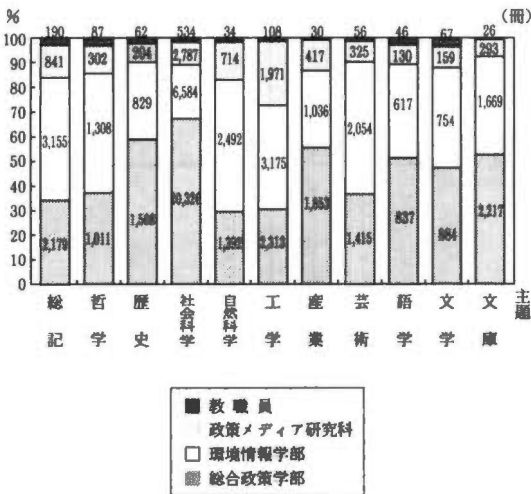


図8 利用者別貸出冊数(比率)

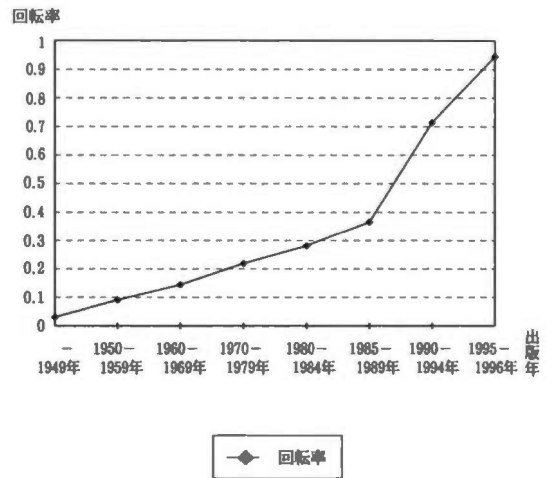


図10 出版年別回転率

## 5. 今後の展望

今回の利用実態調査ではじめて当館の蔵書と利用についての現状が明らかにされた。これは、この時期になってようやくその余裕ができたからであり、同時に、書庫スペースの余地が減少し、今後の蔵書構築を考えるにあたって、早急に資料の利用状況を分析する必要があったからである。これまではふやす一方の蔵書構築であったが、これからはスペースを意識し、利用実態に則した蔵書構築を考えなければならない。

新刊書を基本とした従来の選書・収書体制については、1985年以降の出版物で利用のかなりの部分をカバーできていることがわかり、当館では今後も過去10年から15年程度の新刊書を中心とした蔵書構築を維持することが重要であることが明らかになった。しかし一方で、個々の主題ごとに利用率を調べたところ、利用率に極端な差があり、

主題によっては、蔵書を見直す必要があることもわかった。また、利用率が極端に高い主題については、蔵書不足によるものか、または複本購入の強化が必要なのかを調査し、今後適切な対応をしていかなければならないであろう。

これまで学部学生は、他地区にある蔵書の現物取り寄せができず直接行って貸出を受けていたが、今年の夏からは図書の実物ILLが開始され、これによって、学生が簡単に、手軽に所属する地区以外の蔵書をも利用できるようになった。これは本塾としては画期的なことである。こうした運用上の新たな展開をうけて、これからは、限られた空間、限られた予算の有効利用のために、各メディアセンターが個性ある蔵書構築をしていく必要があるだろう。そしてさらに将来的には、各メディアセンターが相互に協力しあって蔵書の分担収集、分担保存をも思慮に入れていくべきではないだろうか。

### 小展示ニュース

#### <三田メディアセンター>

平成8年

10月2日～18日

イコノロジー入門：イコノロジーの先駆者  
チェザーレ・リーパ「Iconologia」を中心  
にして

10月21日～11月6日

おもちゃ絵展：Bonn Collectionより

11月27日～12月24日

NIPPON へのまなざし—シーボルト生誕  
200年—

平成9年

2月2日～5月20日

小泉信三展—没後30周年記念—

5月21日～6月9日

江戸時代の名所絵図

6月10日～7月9日

平成8年度新収稀観書展

7月10日～23日

江戸時代の名所絵図

7月24日～9月30日

教科書に見る日本の古典

## ＜ティールーム＞

## 赤い薔薇ソースはチョコレート味？

やまもと しゅん いら  
山本純一

赤い薔薇ソースといっても料理の話ではありません。ラテンアメリカ映画の「味のある」題名にまつわる話をしたいのです。

最初は日本でも数年前に大ヒットしたメキシコ映画『赤い薔薇ソースの伝説』（1992年 アルフォンソ・アラウ監督）です。時代はメキシコ革命前後の20世紀初頭、米国との国境近くに住む女系農園家族の歴史を描いています。女農園主の世話をするために結婚を許されなかった長女の得意とする料理が、赤い薔薇の花びらを食材に使ったソースでした。オープンで焼いたツグミにかけるそのソースは官能的な味わいで、催淫効果があるとのことでした。

この映画の原題は“COMO AGUA PARA CHOCOLATE”といって、直訳すると「チョコレート（ココア）用の水のように」という意味です。AGUA は水ですが、ココア用の水とはココアを溶かすための沸騰した熱いお湯のことです。そして「ココアに使う沸騰したお湯のように」とは、意識すると「てんやわんやの大騒動」となります。この原題のとおり、主人公は波瀾万丈の生涯をおくりまします。ちなみにこの映画はフランスでは『情熱のスパイス』という題で上映されたようですが、この映画を撮った監督の夫人で原作者でもあるラウラ・エスキベルは、日本の題名がいちばん気に入ったとインタビューで語っています。

原題と邦題が異なるもう一つの例として、ペルー＝スペイン合作の『豚と天国』（1989年 フランシスコ・ロンバルディ監督）があげられます。確かにこの映画には、借金のかたにとった豚や、大理石づくりの立派な墓を建てて、天国に行けることを夢見ている老夫婦が出てきます。ところがスペイン語のタイトルは、“CAIDOS DEL CIELO”，つまり「天から落ちてきた……」で、日本語に意識すれば「棚からぼた餅」になります。しかし、このタイトルとは裏腹に、映画は悲惨なペルーの現実を寓話風

に描いており、とても「棚からぼた餅」を食べて喜んでいられるような心境にはなりません。ただ、悲劇的な結末を含め、その語り口には独特の味わいがあり、1990年にモントリオール映画祭でグランプリを獲得しました。

最後にご紹介するのはキューバ＝メキシコ＝スペイン合作『苺とチョコレート』（1993年 トマス・グティエレス・アレア監督）です。これは原題“FRESA Y CHOCOLATE”をそのまま訳したものです。この苺とチョコレートというのはアイスクリームのことで、苺のアイスをおもむ男性はホモセクシャル、チョコレート味をおもむ男はマッチョであるという含意があります。ハバナにある有名なアイスクリームの店で、苺のアイスが大好きな芸術家の中年男性とチョコレートのアイス注文した若い男子学生が出会うことで物語が始まります。キューバという厳しい管理社会を背景に、最初はこの男色芸術家に好奇心で近づいていった学生も、次第にその自由な思想に共鳴し、最後には国外追放となる芸術家と「男」の友情を見出すという筋立てです。

私はこの夏、学生諸君といっしょにメキシコ研修旅行に行きますが、その帰りに一人でキューバに寄ります。図書館通いの合間を見つけて、映画の舞台となったアイスクリーム店にも行ってみたいと考えています。そのとき苺にするか、チョコレートにするかはまだ決めかねています。

（追記）SFCメディアセンターにも上記映画のビデオがあります。興味を持たれた方はぜひラテンアメリカ映画の不思議な魅力を味わってください。

（1997年7月18日記）  
（環境情報学部助教授）



# 医学図書館の分担収集・分担保存と 医学メディアセンターの現状

いがらし ゆみこ  
五十嵐 由美子

(医学メディアセンター)

## 1. はじめに

図書館が利用者の要求する情報を提供するためには、あらゆる資料を所蔵していかなければならない。しかし単一の図書館では、資料を購入する予算や閲覧保存する場所に限界がある以上それは理想にすぎない。近代図書館は、相互貸借、分担目録作成等に代表される図書館協力活動によって発達してきた。日本の医学図書館では、一次資料の相互貸借システムの整備によって資料利用における図書館協力は確立されているが、資料を収集・保存するうえでの図書館協力は、うまく機能していない現状がある。

慶應義塾大学医学メディアセンター（以下、医学MC）では、日本医学図書館協会（以下、JMLA）関東地区医学図書館協議会（以下、関東区会）に加盟し、図書館協力活動を行ってきたが、分担収集・分担保存に関してはその普及が今一歩進展をみない。そこで、「JMLA 関東区会マイナー逐刊物分担保存」という活動を事例にあげ、医学MCの現状を報告するとともに、その原因・問題点について究明する。

また、館種やネットワークの分野・地域を限定しない分担収集・分担保存の可能性や電子メディアによって変わる可能性があるかを考察し、今後の課題について論じる。

## 2. 分担収集・分担保存の実情と問題点

### 2.1 JMLA 関東区会マイナー逐刊物分担保存について

JMLA 関東区会では、昭和56年11月に「マイナー逐刊物分担保存検討委員会」（以下、委員会）を設置した。<sup>1)</sup>

マイナー逐刊物とは、「医歯薬学関係の業界誌、PR誌、新聞、あるいは一定期間経過後は多くの館が廃棄している、あるいは廃棄したいと考えている逐刊物」に仮に与えられた呼称である。委員会では、関東区会加盟館（以下、加盟館）が継続受け入れしている国内逐次刊行物の中から対象誌60誌をリストアップした。アンケートによって各加盟館の保存状況を調査し、検討の結果、雑誌34誌、新聞20誌計54誌を分担保存誌（以下、分担誌）として決定し、昭和57年から「マイナー逐刊物分担保存」を実施することにした（表1）。委員会は、今後の運営についての事務局を加盟館が持ち回りで担当することを決めた。また、マイナー逐刊物として分担保存の対象になる資料が新たに発行された場合の対応を以下のように決めた。

- 各加盟館は3年ごとに新規に対象となるマイナー逐刊物を事務局に報告する。
- 事務局は追加マイナー逐刊物を選定し、現状を含め見直しを行い、各加盟館に分担誌を割り当て通知する。

その後、数回の見直しを経て、平成8年度マイナー逐刊物分担保存実情調査のアンケートが行われた。平成8年度現在、加盟館は42館であり分担誌は91誌である。調査の結果、ほとんどの加盟館（96%）が割り当てられている分担誌の保存を継続していることが判明した。また、自館の分担誌に対して複写依頼があったかを問う質問に「依頼なし」の答えが大半であった（図1）。

### 2.2 医学MCで行った廃棄について

医学MCでも、マイナー逐刊物は今までなんとなく製本し保存していた資料である。表1の誌名の中で医学MCがこの当時（1982年）受け入れ・保存していた資料は6誌であった。しかし、

表1 関東区会マイナー逐刊物分担保存館リスト (1982年)

誌名 (雑誌)	分担館	誌名 (新聞)	分担館
1 Chemical Times.	北里 昭和	1 病院新聞	自治 医歯
2 Creaata.	埼玉 医師	2 The Doctor.	東邦 聖マ
3 Digest of Digestive Disease.	日医 順天	3 ドラッグトピックス	中外 中外
4 フジサワ薬報	帝京 杏林	4 医学界新聞	東大 杏林
5 癌治療：今日と明日	中外 国がん	5 医海時報	千葉 日大
6 Glaucoma Review.	日医 東医	6 医療と臨床検査	独協 日医
7 Hoechst Anesthesia News.	独協 横浜	7 医薬特信	中外 山之内
8 Hoechst Circulation News.	独協 横浜	8 Japan International Medical Tribune.	東医 芳研
9 Hoechst Diabetes News.	独協 横浜	9 Japan International Medical Tribune.	東医 芳研
10 Hoechst Immuno-Review.	独協 横浜	(Hospita Ed.)	
11 International Medical News.	自治 医師	10 環境公害新聞	自治 東大
12 石津試薬時報	北里 帝京	11 Medicament News.	群馬 東歯
13 けんさ	北里 杏林	12 日医ニュース	医師 通信
14 興和医報	慶應 昭和	13 日刊薬業	中外 中外
15 Lab. Friends.	中外 城歯	14 日本病院会ニュース	慈恵 通信
16 Literature Index.	千葉 日医	15 日本薬業新聞	中外 山之内
17 Medical News.	昭和 北医	16 サンヘルス	日医 防医
18 Medical Pharmacy.	日大 国医情	17 都医ニュース	順天 日松歯
19 Medical View.	慈恵 聖マ	18 薬業時報	埼玉 国医情
20 Medico.	慈恵 聖マ	19 薬事日報	慶應 筑波
21 Neue Informa.	自治 埼玉	20 薬事ニュース	昭和 北里
22 Practice in Gerontology.	筑波 防医		
23 Pure Chemicals "Daiichi"	東邦 鶴歯		
24 Roche Review.	日医 日松歯		
25 サクラ X レイ写真研究	埼玉 東海		
26 参天眼科ゼミナール	埼玉 東海		
27 サトウ	日大 東歯		
28 Scope.	群馬 慈恵		
29 診療手帳	慶應 東大		
30 東洋薬事報	埼玉 医歯		
31 和漢薬	東大 北里		
32 和光純薬時報	日歯 東歯		
33 薬局の友	東女 山之内		
34 薬事新報	東女 北医		

医学 MC が1982年に  
受入・保存をしていたタイトル

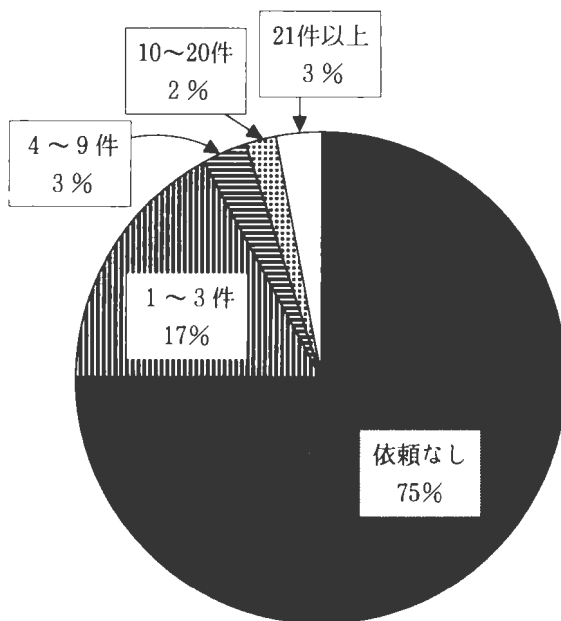


図1 自館の分担保存誌へ他館から複写依頼がありましたか (平成7年度中)

分担保存が開始されても分担誌以外の3誌を従来どおり受け入れ、保存を続けたのである。この時、廃棄できなかった理由は、自館の利用者に対する利用調査をする手間を惜しんだこと、現状での学術的価値を考慮した蔵書構築を行ってこなかったこと、蔵書量によって図書館が評価されることに対する不安から保存と廃棄の基準を曖昧にしてきたからである。保存を相互に依存することに意味がある分担保存は、他館の分担誌について廃棄することを同時に考えなければ、有効に利用しているとはいえない。

医学MCでは、年々迫る書庫の狭隘に対して、今まで所蔵していた資料を廃棄するという策を講じることはなかったが、平成8年度実情調査のアンケートがきっかけとなり、所蔵雑誌の中で他館の分担誌である6誌について廃棄することにした。

手順として、廃棄処理をする前に、その資料の分担館の所蔵をNACSIS-CATで調査し、医学MCの所蔵と照合して未所蔵分について要・不要をFAXで打診した。寄贈希望を確認した館には、資料に除籍印を押しして送付し、重複・不要の分に関して廃棄した。

また、NACSIS-CATの所蔵を削除し、ローカル所蔵データの除籍と今後の受け入れについて最新号のみ所蔵する管理に切り替え、廃棄処理を完了した。

### 2.3 分担収集・分担保存の問題点

医学MCが行った廃棄処理によって、分担館へバックナンバーや欠号を補充することができたが、今後は最新の数冊が一時的に保存されるだけで、時間の経過とともに欠号を補充するという協力は困難になる。また全加盟館が自館の分担誌以外のマイナー逐刊物を一切保存しないことになれば、分担館にとっては、さらに負担が重くなり不安である。

しかし、分担館以外は深く廃棄することを考えなくては、分担収集・分担保存を行う意味がない。今後、他館の分担誌については必ず分担館に要・不要の確認をして廃棄していくように心がけ、分担収集・分担保存制度を確立していかなければならない。

一方、分担保存をするということは、同時にそ

の資料が欠号のないように収集する義務が発生する。マイナー逐刊物は寄贈される資料が大半である。しかし、何らかの理由で届かなかった場合は、こちらは分担しているので責任があるという勝手な言い分は伏せて、再度寄贈を依頼する厄介な仕事が発生する。マイナー逐刊物の分担条件に、「割り当て資料が有料のものは敢えて購入することはしない」という取り決めがあり分担館の負担を軽減しているが、購入誌であればかえってクレームが容易である。この場合、どの館にも寄贈されている資料ならば、分担館が欠けている号の補充を非分担館に依頼する権利があり、依頼された館はその依頼を受ける義務があるのではないだろうか。こういった取り決めをすれば、補充を依頼された非分担館の所蔵は欠号が生じて、必然的に保存する気が失せてくるだろう。

資料の利用頻度を調査する場合に、容易な方法として図1のような相互貸借の申し込み件数調査があげられる。しかし、自館に所蔵があればわざわざ他館に申し込むことはない。現状でこの方法を使って正確な利用頻度を調査するのであれば、他館の分担誌については、自館に所蔵があっても分担館に申し込まなければならない。この無駄な作業を回避するためにも、他館の分担誌を非分担館が所蔵してはならないのである。

また、他館の分担誌であっても所蔵していることを総合目録に報告すれば同様のことがいえる。文献複写を依頼する側にとっては、どこに申し込もうと文献さえ入手できればそれが分担館である必要はない。医学MCでは、保存しているすべての雑誌所蔵情報をNACSIS-CATに登録しているため、他館の分担誌である資料の文献複写を依頼されている可能性がある。つまり、「依頼なし」が一概に利用が無かったとは断言できないのである。

### 3. 関連他機関との連携

研究・教育を目的とした大学図書館には、時間が経つにしたがって利用の頻度が減少する資料の保存スペースとともに、利用頻度の高い新しい資料を置くスペースも確保しなければならない。利用頻度の減少した資料については、共同利用ので

きる保存図書館で保存され、確実な利用が保証されれば、利用上有効なスペースを確保することができる。しかも分担保存という責務を軽減することができるだろう。

しかし、共同利用のできる保存図書館がすぐさま現実化する見通しはない。そこで、従来から各専門分野別に大学図書館が中心となって行ってきた図書館協力を、他の組織や関係学協会と連携して進めることはできないだろうか。たとえば、医歯薬関係の業界誌、PR誌あるいは、学会誌や大学紀要など著作権の所有が明らかな資料に関しては、発行元が責任をもって保存し、研究者へ情報を提供する。インターネットによる情報公開が普及しつつある今日では、ホームページで資料を公開することも可能だろう。これによって比較的容易に分担保存の肩代わりができるのではないか。

資料の効果的な収集と利用、流通の促進、そして永遠の保存が保証されるには、従来の同館種にこだわったネットワークをもう一步広げて、学術情報を提供する機関のネットワークを拡大することが必要である。

#### 4. 電子メディアによって解決できるか

最近では、電子メディアとしてCD-ROMなどを媒体とした資料やオンラインジャーナルが出版されている。電子メディアの資料は紙メディアに比べ、資料自体はコンパクトであり、保存上場所をとらない。しかし、現段階では、CD-ROMの寿命は10—15年という説<sup>2)</sup>があり永続性の面で問題がある。オンラインジャーナルも発信には力を入れているが、保存維持管理に関しての公式な保証は得られていない。また、利用者へ提供するためには様々な機器が必要となり、その場所の確保も迫られる。このことから、スペースセービングの意味で電子メディアの資料が紙メディアの資料にとってかわることは考えにくい。

一方、医学の分野では電子メディアの資料に対する利用者の要求は多く、新しい情報の提供法として積極的な導入が望まれている。「場所の制約を受けずどこからでも利用可能」であり、「検索や複製が容易」であること、「同一の資料を複数の人が同時に利用できる」などの歌い文句は、多

忙な医師にとって魅力的である。また、音、映像による資料が古くから出版されていたことを踏まえて、パソコンでテキストと音や映像が同時に表現できる点、そして何よりも外国出版物の情報が、紙メディアの資料が図書館に到着するよりも速く入手できることが最大の利点である。このことから利用頻度の高い資料については、電子メディアの資料も所蔵していかなければならないだろう。

しかし、オンラインジャーナルの利用については、利用できるユーザー数を限った契約は存在するものの、誰でも利用できるようにするためには著作権の問題をクリアしなければならない。そこで、学術情報を研究者に提供する目的で著作権者が図書館と契約するオンラインジャーナルに関しては、国がその著作権者の利益を保証する制度を設けてはどうだろうか。実現すれば、ユーザー数を拡大した契約を図書館に安価で販売することも可能だろう。これによってオンラインジャーナルを自館の利用者以外でも利用できる体制を整えば、ある雑誌のオンラインジャーナルを分担した館は、その雑誌の最新情報の提供を分担することになり、他館はその雑誌の紙メディアの資料を永久保存することを分担する。これを相互に行えば、メディアの違いによる分担収集・分担保存も可能である。医学図書館においては、紙メディアの利便性や保存性と電子メディアの速報性や柔軟性を使い分けることによって分担収集・分担保存をとらえる考え方も必要ではないだろうか。

#### 5. おわりに

分担収集・分担保存は、各館の状況によって資料の収集基準や収蔵量、他館との関わり方が違い図書館協力のなかでも標準化が難しい。しかし、自館に所蔵しなくてはという考えを捨て、増えつつある資料に対して、図書館界全体での積極的な蔵書構築を考えていかなければならない。流動的な情報としての資料、固定的な資産としての資料、あらゆる媒体の資料を本気で分担収集・分担保存することを実行に移す時がきたのである。インターネットによってあらゆる情報が容易に入手できる時代だからこそ、資料の欠号補充、製本作業や書庫移動に体力と時間を奪われ、これからの図書館



が何をすべきかを見失わないよう、まずは分担収  
集・分担保存の実行である。

注

- 1) 山崎美智子. “関東地区会におけるマイナー逐刊  
物分担保存について”. 医学図書館. Vol. 29,  
No. 4, p. 433-435 (1982)
- 2) 島村隆夫. “図書館サービスは今後どうなるか”.  
びぶろす. Vol. 46, No. 2, p. 5-8 (1995)

参考文献

- 1) 日本医学図書館協会中国四国部会. “中国四国地  
区におけるバックナンバーの分担保存制度”. 医  
学図書館. Vol. 38, No. 1, p. 17-21 (1991)
- 2) 牛崎進. “資料廃棄論—立教大学図書館の事例と  
私立大学図書館協会の新規事業の意義—”. 情報  
の科学と技術. Vol. 45, No. 2, p. 74-79 (1995)
- 3) 布施芳一. “大学図書館における資料の廃棄と保  
存—桐朋学園大学の場合—”. 情報の科学と技術.  
Vol. 45, No. 2, p. 85-88 (1995)

小展示ニュース

<日吉メディアセンター>

平成8年

10月1日～21日

資料にみる横浜～神奈川県コーナー紹介～

11月1日～30日

食文化探訪～メディアを通して～

12月2日～19日

「三国志」の世界

平成9年

1月13日～2月12日

作家の手稿

～「複製・近代文学手稿100選」～(第1期)

2月24日～3月31日

作家の手稿

～「複製・近代文学手稿100選」～(第2期)

4月4日～30日

福澤諭吉を味わう

5月6日～31日

新聞のすすめ

6月2日～30日

色彩の世界

7月1日～9月30日

東と西の世界最初の印刷物

# 10回目を迎えた慶應義塾図書館貴重書展示会

みやき さえみ  
宮 木 さえみ

(三田メディアセンター課長)

## 1. はじめに

慶應義塾図書館主催の日本橋丸善における貴重書の展示会は、平成9年1月開催の「ANATOMIA～ダ・ヴィンチから解剖図譜の歩み」で、10回目を迎えた。ここで、これまでの展示会のテーマや内容を概観し、毎回作成しているダイレクトメール用の絵はがきを写真で紹介することにした。

## 2. 第1回目の開催の経緯

初回の「キャクストンとアーサー王伝説」展は「マロリーの『アーサーの死』出版500年を記念して」というサブタイトルのもとに、昭和60年7月15日から23日まで開催された。展示目録の前書等には、その年がサー・トーマス・マロリーの「アーサーの死」がウィリアム・キャクストンによって出版されて500年目にあたり、英米では関係するシンポジウムや展示会が開催されているため、是非、慶應義塾図書館でもこのテーマで所蔵資料を展示したいという関係者の熱意によって実現したことが記されている。この展示会ではキャクストンの印刷物のオリジナル7点をはじめ、キャクストンの印刷物のファクシマール版、キャクストンに関する研究書多数、さらに、マロリーの初期の刊本のファクシマール版、1634年以後のオリジナル版、マロリーに関する研究書、その他アーサー王文学関係の資料等合計175点が展示された。また、会場ではこの展示会の企画・監修者であった高宮利行文学部教授によるギャラリートークが行われた。

## 3. 2回目以降のテーマと内容紹介

第2回目は平成元年11月に「書物に見る西欧哲学・科学思想の流れ」というテーマで行われた。

展示資料はシュメールの粘土板文書のレプリカに始まり、ユークリッド「幾何学原論」の1482年のヴェネチア版、ダーウィンの「種の起源」の初版本まで、西欧の哲学、科学思想が著された約120点であった。また、会期中には大江晁文学部教授他による3回の講演が行われ、以後、講演会が定例となった。

第3回目は平成2年1月の「資料に見る日本食文化と食養史」である。福澤諭吉の食養に対する関心の強さを示す「西洋衣食住」をはじめ、慶應義塾の食養への啓蒙活動を示す資料、また、昭和54年に寄贈を受けた「魚菜文庫（旧称石泰文庫）」等113点の展示であった。

平成2年4月には湘南藤沢キャンパスの開設を記念して「広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで」展を開催した。これは第4回にあたり、高橋誠一郎浮世絵コレクションを中心に広重の東海道錦絵72点を展示したものである。

第5回は「驚ペンから印刷機へ 目で見る西洋写本文化と印刷文化」展で、平成3年11月に開催された。この時は例年の丸善の協力だけでなく、ミズノ・プリンティング・ミュージアムの協力も得、中世ヨーロッパにおける写本文化から印刷文化への移行の諸相をたどることをコンセプトに約110点を展示した。さらに、ワークショップとしてカリグラフィーの実演も行われ、大好評であった。

第6回の展示会は慶應義塾図書館の開館80年を記念して、「和漢書善本百選」と題して平成4年11月に行われた。この時は図書館だけではなく、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の協力をあおぎ、中国・朝鮮の旧刊本、日本の古写本、旧刊本等を100点余り展示した。

第7回は平成5年11月に「高橋誠一郎旧蔵 古

版西洋経済書展」と題して行われた。慶應義塾大学名誉教授であった故高橋誠一郎氏の旧蔵書が慶應義塾図書館に寄贈され、その整理が終了したため、トマス・モアの「ユートピア」をはじめ、アダム・スミスの「国富論」など重商主義期の古版西洋経済書約130点を展示した。

第8回は平成7年2月に「理性の夢～図版と文字で読むフランス18世紀～」というテーマで行われた。展示目録のカラー挿絵にも使われているクラマーの「世界三地域珍蝶類」やゲスナーの「動物誌」等図版を多く収めた貴重な古版本が約130点展示された。

第9回の展示は「広重『東海道五十三次』錦絵展」で、平成8年2月に開催された。第4回の「広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで」の時の展示品であった保永堂版以外の比較的一般には知られていない「行書東海道」や「隸書東海道」「狂歌入東海道」などのシリーズから約114点が展示された。広重の錦絵の美しさと解説の洒脱さの故か、この時の展示目録も人気が高く、会期終了後も入手についての問い合わせが集中した。

記念すべき第10回目は冒頭に述べたように解剖学をテーマに「ANATOMIA～ダ・ヴィンチから解剖図譜の歩み」という題で平成9年2月に開催された。この展示会はテーマがこれまでと違って地味なものであったが、展示資料は和も洋も多岐にわたり、北里記念医学図書館（医学メディアセンター）の協力を得て、近世ヨーロッパから明治前期までの解剖図譜、画像など、約80点を展示した。

#### 4. おわりに

このように第1回目の「キャクストンとアーサー王伝説」展から順次、テーマや絵はがき、展示目録を振り返ると、この展示会が徐々に形を整え、発展してきたことがわかる。初回の展示目録は詳しい解説と展示資料のリストで構成されており、まだ展示資料の写真はない。開催日の年度も記されておらず、そもそも「第1回…」と銘打たれていないところに、このように毎年毎年行われるようになるとは想像もしていなかったことがうかがわれる。2回目以降は展示目録が上質紙になり、

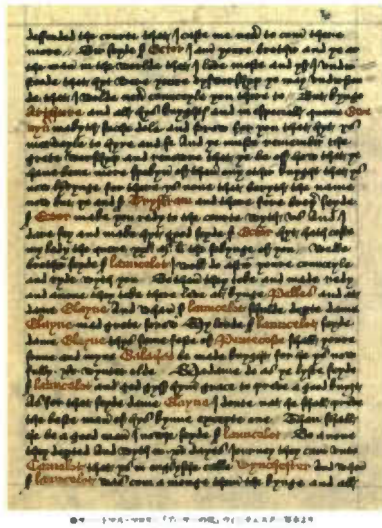
展示資料の写真と詳しい解説が付くようになった。また、会期中に講演会を催すようになったのも2回目からである。

この丸善における貴重書展示会の発展の陰には貴重書担当の尽力は言うまでもなく、監修者としてコンセプトの提案から展示資料の選定、解題の作成などに貴重な時間を割いて協力して下さる教員の方々と、毎回協賛という形で、会場の提供、広報・宣伝を引き受けてくださっている丸善株式会社の強力なバックアップがあることを忘れることはできない。

今年度も第11回の展示会が「日本中世印刷史」というテーマで1月末に開催される予定で、すでに準備に入っている。今回は展示目録の一部をWWW上に公開することも検討されており、この展示会が新たな発展の段階をとげようとしていることを暗示しているようである。

#### 参考文献

- 1) 丸善株式会社広報宣伝部一同. “慶應義塾大学展示会に際して”. KULIC. No. 25, p. 58 (1991)
- 2) 小澤恒二. “三田における資料展示の流れ”. KULIC. No. 26, p. 49-52 (1992)
- 3) 白石克. “広重東海道五十三次錦絵を読む”. KULIC. No. 24, p. 52-58 (1990)
- 4) 白石克. “統・広重東海道五十三次錦絵を読む”. KULIC. No. 25, p. 59-67 (1991)
- 5) 山下光雄. “「資料にみる日本の食文化と食養史」展にあたって”. KULIC. No. 24, p. 49-51 (1990)



第1回 「キャクストンとアーサー王伝説」展



第2回 「西書に見る西欧哲学・科学思想の流れ」展



資料に見る  
**日本食文化と食養史**  
A HISTORY OF DIET IN JAPAN  
主催：慶應義塾図書館 協賛：丸善

本展では、慶應義塾図書館が所蔵する日本食文化：食養史研究の貴重資料の中から、約120点を並び展示し、解説いたします。



第3回 資料に見る日本食文化と食養史



第5回 「鴛ペンから印刷機へ」展



第4回 広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで



第6回 和漢書善本百選



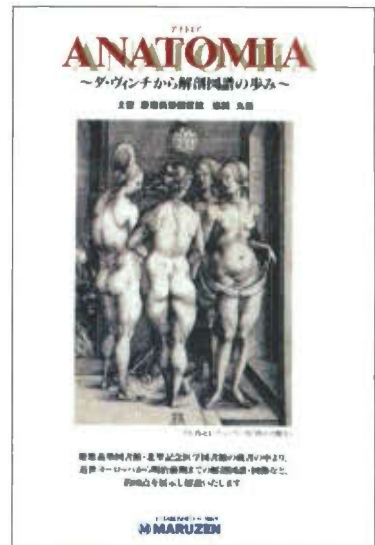
第7回 高橋誠一郎旧蔵 古版西洋経済書展



第8回 理性の夢～図版と文字で読むフランス18世紀



第9回 広重「東海道五十三次」錦絵展



第10回 ANATOMIA  
～ダ・ヴィンチから解剖図譜の歩み～

## ＜スタッフルーム：私のコレクション＞

## 道

むら た ゆみ こ  
村 田 優美子

初めて出会ったのは、たしか私が高校生のとき。あまりにも有名なその作品は、国語の教科書の表紙になっていた。東山魁夷の「道」。教科書には画伯の随筆も載っていて、「風景は心の鏡である」というフレーズがあったのを記憶している。

その後、別の作品を見る機会があり、それまで見たこともないような清々しい青色と、「魁夷」という、芸術家にしては少し厳しい響きの名前を覚えていった。

見たこともない風景なのに懐かしいようでもあり、荘厳な雰囲気なたたえつつ暖かさがある。心がすーと軽く、透明になっていくような気持ちになる。特に絵画鑑賞が趣味というわけではないし、日本画のこともよく知らないが、シンプルな構成と微妙でやわらかな色合いの画伯の絵がとて好きになった。

だからといって、私などが何万円もするリトグラフや、まして本物の絵など集められるはずはない。あるのはせいぜい画集や図録、カレンダー、同じものでもつい買ってしまっただけで増えていく絵ハガキなどである。それだってコレクションといえるほどの量はないけれども。

やはり本物を見たくなった時は、長野県の善光寺近くにある信濃美術館東山魁夷館に行く。静かで落ち着いた大好きな場所だ。画伯が住んでおられる千葉県市川市の生涯学習センターには、東山魁夷アートギャラリーといって複製画などが展示されている場所があるし、また中央図書館には画集や著作物がまとまっているコーナーがある。こちらは家からわりと近くて便利だ。デパートで展覧会が催されるときは、期間中に数回見に出かけている。

展覧会といえば、こんなことがあった。95年夏、

某デパートで「米寿記念東山魁夷展」が催された時のことである。13年ぶりに唐招提寺の襖絵が一般公開されるということで、平日なのに会場はとて賑わっていた。

会場に足を踏み入るとまもなく、あの「道」があった。もう何度も見たことのある作品だ。でもなぜだろう、その日はすぐにその絵の前を離れられなかった。他に何も無い、ひとすじの道。その道を見ているうちに、それまでの23年間と、これから続くであろうそれ以上の長い年月に思いをはせた。突然、広くて何も無い所にたった一人で立っている気分になった。これから先、私の前にはどんな道が開かれるのだろうか。どれくらい長い道なのだろうか。どんな草が生えていて、どんな石につまずくのだろうか…。

その時は就職してまだ4ヶ月目。一人前になったつもりでうれしくて夢中で走っていた私は、その時立ち止まったのだ。一人の大人としての自由と責任、それまで私を支えてくれた人への感謝の気持ちと孤独感、懐かしさと漠然とした未来への不安。そんなことがいっぺんに浮かんできたら、思わず涙が出てきてしまった。こわくて嬉しくて淋しくて、涙が止まらなかった。絵の前を離れたくなかったけれど、さすがに恥ずかしくなってその場を離れ、その他の作品を一通り見てまわった。襖絵も素晴らしいが、帰る前にもう一度「道」の前に立ってみた。落ち着いた、静かな気持ちだった。これはしっかりと潤った早朝の道。これから歩いていく道。今度は不思議とそんなふうにして前向きな気持ちになった。私は大きく深呼吸して、その絵の前を離れた。

「風景は心の鏡である」。1枚の絵にその時の心が映し出され、その絵に救われた気持ちになる。それまで、どんな絵もせいぜい「きれい」とか「おもしろい」というほどの感覚で見えていた私にとって、それは初めてのことだった。今はその経験自体を、大切なコレクションの一つと呼んでもいいかな、と思っている。(三田メディアセンター)

## 東アジア資料研究分科会

しん ほ か こ  
新 保 佳 子

(三田メディアセンター)

私立大学図書館協会東地区部会研究部では、各研究分野において分科会という形で会員を募り研究活動を行っている。今回紹介する東アジア資料研究分科会（以下、分科会）は、平成6年度に発足した非常に若い分科会である。漢籍・現代中国語資料・現代韓国語資料に関する様々な問題を扱っており、年度ごと・月ごとにテーマを決めて活動を行っている。現在、第1期（平成6年度から7年度）が終了し、第2期目（平成8年度から9年度）に入っている。私は発足時より現在まで参加の機会を頂いているため、これまでの活動について簡単にまとめてみることにする。

### 1. 分科会の活動

#### 1.1 概要

第1期初年度の会員は16名であった。自己紹介を終えた後の第一印象は、中国語図書に造詣が深い方からほとんどそれらを扱ったことのない方まで、会員の知識や経験の差が非常に大きいということだった。それでも、ほとんどの方が何らかの形で漢籍や中国書の目録業務に携わっており、話し合い・相談の場や知識習得の場を求めて、ということに参加動機にあげる方が多かった。この期には、慶應からは赤尾氏（当時三田メディアセンター）と私（当時日吉メディアセンター）の2名が参加した。和書・洋書の目録については半数以上の会員館がオンライン目録に移行していたが、中国書・韓国書についてはカード目録使用館がほとんどであった。

第2期は会員の入れ替えが多少あったものの、総数15名、オブザーバー2名と、人数的にはあまり変わらない状況であった。いろいろ教えて下さっ

た方々の異動等による退会が非常に残念であったが、会員全員で参加して進めていく形に、徐々にではあるがなりつつある状況である。

ハングルで書かれた資料については、詳しい会員が皆無であることと、ハングル資料所蔵館が少ないこともあり、議題となることはほとんどない。

#### 1.2 例会

分科会の主な研究活動として、毎月1回午後には開かれる例会がある。その主な活動内容を年度ごとに紹介する。

##### 第1期1年目

中国の図書目録規則と日本の図書目録規則とを比較・検討し、相似点・相違点等を見ていった。このようにして中国の目録法を知ること、日常の中国書目録作成において出現する疑問点・問題点解決の参考になることを期待しての作業であった。使用した目録規則は、中国の「中華人民共和国国家標準普通圖書著録規則（以下中国著録規則）」（翻訳）と日本の「日本目録規則1987年版改訂版（以下NCR）」である。必要に応じて、中国古書の目録「古籍著録規則」も参照していった。目録規則の見出しごとに一人一人担当箇所を割り振り、比較表やレジメを作成して例会で発表する形で進めた。責任者が僧尼の場合や、既婚夫人で夫の姓を冠している場合の規定など、中国著録規則には中国の文化事情ならではのものも見受けられた。また、具体的な規定を設けている部分がNCRより多いように思う。

##### 第1期2年目

1年目と同様の形式で、韓国の目録規則「韓国目録規則3.1版」（翻訳）とNCRとの比較を行った。これら2種類の比較結果は、全ての発表が終



## 分科会レポート

了した後に一つの報告書の形にまとめる予定であったが、第1期中にはできずに終わってしまった。また、この作業は学術情報センター（以下、学情）のCJK対応目録計画に目を向けつつ、CJK目録の有り方を検討する目的をも含んでいたが、この時期は比較することに終始してしまった感がある。

また新たに、基礎的知識を得る目的で輪読会を行うことに決め、日本と中国の古書について書かれた「古書のはなし」（長澤規矩也著 富山房 1994 新装第1版）をテキストとして使用した。1年で全てを終了することができなかつたため、次年度も引き続き行った。

## 第2期1年目

分科会世話人である麗澤大学の若山氏が学情の「中国語資料データベース化検討ワーキンググループ」のメンバーとなったため、それに関連する若山氏の報告と会員間の意見交換が不定期に行われた。

また、前年度から引き続き進めていた「古書のはなし」の輪読が終了した。この本は少々読みにくいものであったため、輪読形式で進めることが出来て良かったと思う。馴染みのない言葉が本文の多くの箇所に出現するため、用語の説明に終始してしまう場合が多かったことが反省点である。細かな箇所は省略し、大まかな流れを理解するような方向で進めていくと、より初心者にも理解し易いものになったと思われる。しかし、この輪読によって自分の古書の見方が変わってきたことは大きな収穫であった。

夏からはこれらに平行して「古書籍目録演習」を行った。会場校の漢籍を数冊ほど見せて頂き、データシートに必要事項を記述する。ここで、実際に漢籍を手で触りじっくりと見る機会を得ることになったため、この試みは会員に好評であった。

## 第2期2年目

分科会発足4年目に当たる今年度は、第1期1年目に行なった中国著録規則とNCRとの比較結果をまとめ、学情における中国書目録の規則制定に際しての検討を加え、一つの報告書の形にまとめる計画である。また、前年度に引き続き若山

氏の報告を踏まえた会員の意見交換も行う。

「古書籍目録演習」は、より効果的に進めるために手順・方法の改善を行い、参考資料として京都大学人文科学研究所発行「漢籍講習会資料」を使用することになった。今期は全体的に漢籍を扱う機会が多くなっている。

## 1.3 合宿

毎年夏季に2泊3日の日程で開催している。その年度の研究テーマの集中発表・検討とともに、自主的な個人研究発表等も行っている。私は平成7年度、8年度に「ハングル辞書の引き方」という題で、ハングル文字の構成と読み（音）、辞書の引き方についての講義・演習を行った。

## 1.4 見学会

毎月の例会の後に各会場校の図書館見学を行っている。ほとんどの会員館の漢籍・中国書・韓国書（貴重資料を含め）の所蔵量はそれほど大きいものではなく、改めて慶應の規模の大きさを感じた。一方で、設備や取り扱い方法の点で見習う点が多かったことも事実である。また、図書館により、収集資料の質・量・取り扱い方針等が異なることも実感した。面白いと思ったのは、文教大学の古書資料室である。図書館入口横に位置するこの部屋には、普通の古書籍のみならず貴重資料も収められている。学生はそれらを自由に手にとって見ることができ、時には貸し出しも可能である。長所短所はあるにせよ、古書を身近に感じさせるという点では興味深い試みであると思った。その他、一般書架やその他の設備も同時に見学させて頂いたため、色々な面で非常に参考になった。

不定期に外部機関の見学も行っており、今まで見学に訪れた機関は以下の通りである。

- ・東京大学東洋文化研究所（平成7年5月10日）  
講演と書庫見学
- ・斯道文庫（平成7年11月8日）  
書庫見学
- ・東洋文庫（平成7年12月13日）  
書庫見学
- ・東洋文庫（平成8年2月14日）  
資料保存とその修復技術についての講演・実



分科会レポート

演・見学

この2年ほどは諸々の事情から見学会の機会が少なかったため、今後はまた増やしていきたいと思っている。予定では、平成9年秋に静嘉堂文庫を見学する計画である。

2. 分科会に参加して

私はもともと古書や中国書・韓国書にそれほど興味があったわけではなく、業務において中国書担当というわけでもなかった。外国の本に少々興味があったことと、業務の一つとして中国書の目録をとる機会もあったために何らかの役にたつのではと思い、ごく軽い気持ちで参加することになったのである。そんな状態であった上に自分の知識と経験の乏しさも手伝って、他の方の発表内容についていけなかったり、分科会での活動内容が業務に直接結びつく実感が持てなかったりしたこと

もあった。しかし、普段の業務ではなかなか出会えない資料や情報に触れる機会が例会にはあり、楽しみながら参加することができた。そして何より、あまり興味があったとはいえないこれらの資料類に対して、徐々に親しみが湧いてきている今日の状況は自分にとっては驚くべきことである。

勉強以外でも会員間の交流の中で発見や教わる点が多々あった。他大学の現状の話や、その意見を聞くことにより、非常に広い視野から考える機会を得た。

昨年度より担当業務が整理・貴重書兼務となったため、漢籍関係の知識を広げる場として残り半年間の活動にも大いに期待しており、自らも貢献していきたいと思う。最後に、このような機会を与えてくださった方々と、忙しい中活動を心よく許して下さいいる職場の皆様にも心より感謝申し上げます。

メディアネット研究会

平成8年度

第3回(9月30日) 於 三田メディアセンター (慶應義塾図書館新館)

テーマ: テクニカル・サービス部門のリエンジニアリングについて

報告者: 新倉利江子

第4回(12月16日)

於 日吉メディアセンター(日吉図書館)

テーマ: 海外図書館長期実務研修報告

報告者: 落合啓一

テーマ: 海外図書館中期研修報告

報告者: 小澤ゆかり

第5回(1月31日) 於 三田メディアセンター (慶應義塾図書館新館)

テーマ: 図書館にとってのZ39.50

報告者: 上田修一「Z39.50 概論」

報告者: 亀井温子「SiteSearch 紹介」

第6回(3月17日) 於 理工学部厚生棟会議室

テーマ: 塾内他部署紹介: 人事部

報告者: 原 邦夫

平成9年度

第1回(7月10日) 於 三田メディアセンター (慶應義塾図書館新館)

テーマ: 電子メディアと著作権

報告者: 苗村憲司

## 海外レポート

## ウィリアム・モリスも訪ねて

## —— イギリスの図書館等見学記 ——

お ざわ  
小 澤 ゆかり

(医学メディアセンター係主任)

## 1. 研修先はイギリス

1996年の秋に海外研修の機会を得て3か月間イギリスに滞在した。一番の目的は、長年興味を持っていたブリス分類表 (Bliss Bibliographic Classification 第2版。以下 BC 2<sup>nd</sup>) を使用している図書館を訪ね、分類番号の合成例を収集することであった。残りの期間は多くの大学図書館等を見て回ろうと考え、かなり多くの図書館へ見学依頼の手紙を出したところ、ほとんどの図書館から返事があった。また日頃からの習性で旅先で図書館(公共)を見かけると入ってしまったので、最終的に見てまわった図書館は40館近くになるだろう。(正式に訪問したのは20館)

いまだに誤解している人が多いのだが、ウィリアム・モリス<sup>3)</sup>に関する見学等は、研修の主目的ではなかったのである。とは言え、私のモリスフリークを知っている方々のご想像どおり、研修を平成8年度に希望したのはモリスの没後百年にあたるから、秋にしたのは命日が10月3日だからで、めばしいモリス関連地は大部分クリアし、モリス関連の展示もかなり多く見に行ったのは事実である。図書館見学では、



V&amp;Aのウィリアム・モリス展

蔵書の検索システムにも重点を置いたが、検索キーはやはり“Morris, William”, “Kelmescott”, “design”, “architecture”, “Victorian” となってしまうのであった。<sup>3)</sup> また、没後百年の展示や出版が相次いでいたこともあってイギリスでのモリスの知名度は高く、見学先での話の糸口としても大変役に立った。

写真など紙面が楽しい資料も多いので、今回はモリスをからめた形で、イギリスの図書館等の状況を報告することとしたい。

## 2. 国立図書館 (National Library)

5年間有効な入館証が発行されたので、British Library (BL) は、分館の BLISS (British Library Information Science Service) や新聞図書館も含め何度も利用した。有名な円形閲覧室で待っていると依頼した出納本が席に届けられるという優雅なシチュエーションはなかなか実現が難しい。本館に所蔵されている資料はごく一部なので、私のように古い SF などしか思いつかない者は、1, 2日後に窓口で出納本を受け取ることになる。それでもあの部屋での閲覧は感慨深いものがある。当日出納が無理でも、OPAC で何時間でも楽しく過ごすことができる。検索もかなり快適な上に、検索対象があつた BL の蔵書なのである。<sup>4)</sup>

モリス関連の資料は、North Library と呼ばれる貴重書閲覧室で閲覧した。ケルムスコット・プレスで出版された著書 ‘Gothic architecture’ の校正刷と、ケルムスコット・プレスの出版広告などのシートものの束2種である。Gothic…の方はモリスによる訂正や各頁の Side Caption が直筆で書き込まれており、「百ウン年前にモリスが



Gothic Architecture の刊本

これに触って書き込みしたのね」とミーハーな感慨にひたりつつ、厳肅な閲覧室の雰囲気の中で、貴重書としては百年なんてかなり新しい方なのだと感じたのであった。

BLの新館は引っ越し開始直前で見学ができず残念であったが、National Libraryとしては、スコットランドとウェールズのものも1日閲覧者として利用した。この2館も小規模ではあるがBLに劣らぬ質の高い展示を公開している。National Library of Walesは、ウェールズの他の機関と同じく、ウェールズ語による表示、利用案内、検索等が当然のように併用されており、ウェールズの特徴を活かした資料収集も盛んである。展示では、ウェールズ語で初めて印刷された聖書、ウェールズ語で初めて発行された新聞等のオンパレードであったし、OPACの検索では、あのモ

リスとは違う Morris, William という人物のウェールズ語の著作が多数あり、「そういえばモリスも“あの変なウェールズ人”と大学仲間に言われてた」ことを思い出したのであった。

### 3. 公文書館 (Public Record Office)

研修出発時は三田メディアセンターのマイクロ資料担当だったので、外交文書のマイクロフィルムなどで、Public Record Office (PRO) には馴染みがあった。資料についているファイル番号というのが規則性に欠け曲者なのだが、現地に出向いて謎がとけた。ジャンル分けして番号をふった膨大な文書の、リストを綴じたファイルの番号そのものだったのだ。家系をたどる事などが盛んなため、入館証は簡単に入手できるが、いざ入場すると、このファイルの山が待ち構えている。莫大な資料の中から必要な文書を請求するのは難しいので、様々なマニュアルが用意されている。目的や資料の性質別に PRO で作成されたマニュアルの他にも、研究者達の手で作られた「昔の文書に出てくる単位」、「昔の手書き文字の判読法」といった変わった手引き書なども売店で販売されている。

建築物に関するファイルをあさっていた私は、没後百年を記念するモリス展を大々的に開催したヴィクトリア・アルバート美術館 (V&A) の、外壁の彫像の一つがモリスであるのは何故か探るべく、V&A 関連の文書の箱を請求した。この日



National Library of Wales



Public Record Office

## 海外レポート

は、この資料の二箱のうち一箱しか出納されず、残りは行方不明とのことで、モリスの謎は次回までお預けとなったが、V&A命名のいわくと言われるヴィクトリア女王の希望を伝える文書を複写してもらった。閲覧室には鉛筆とメモ用紙とパソコン類しか持ち込めず、見張りの係員もいるが百年以上前の文書などを一般の利用者がじかに閲覧できるのであった。

## YOUR COMPUTER WHEN YOU NEED IT... OURS WHEN YOU DON'T

Drop in and use the latest computer equipment when you need it. We offer Apple Mac and IBM compatible machines, all with colour monitors. Ideal for personal, business or training needs.

### GENERAL/DESIGN D.T.P

Equipped with a wide range of the latest software for all requirements from simple word processing, CVs and letters, to advanced design and desktop publishing.

QUARK • PHOTOSHOP • ILLUSTRATOR  
MICROSOFT WORD FOR WINDOWS AND MAC  
WORD PERFECT • EXCEL  
POWERPOINT • PAGEMAKER • FREEHAND

### GRAPHICS & OUTPUT FACILITIES

What you put in must come out looking great. That's why we offer a full range of input and output hardware.



SCANNERS • 600 DPI LASER PRINTERS  
15" COLOUR MONITORS • COLOUR PRINTERS  
FAX • B&W & COLOUR PHOTOCOPIERS

### INTERNET

Now you can cruise the Digital Information Super Highway from the Library. We offer all internet services, from the World Wide Web to e-mail. We can even create Web pages for you!

## PRICE LIST

All prices are ex VAT  
Ask about concessions.

DIY WORKSTATION HIRE	
General Use Mac or PC (per hour)	5.00
Discount block of 10 hours	40.00
SCANNING	
Black and White (line art) per A4	5.00
Grayscale per A4	7.50
Colour per A4	9.00
Power Mac with Scanner and iQueue (per hour)	25.00
PRINTING	
A4 Black and White 600dpi Laser (per copy)	.25
A4 Colour (per copy)	2.00
<small>(PRINTING PRICES DOUBLE IF YOU ARE NOT HAVING A COMPUTER)</small>	
PHOTOCOPIING	
A4 (per copy)	.10
A3 (per copy)	.20
INTERNET ACCESS	
Access to all Internet services (per hour)	FREE
TRAINING	
Hourly	12.00
10 hours for	99.00
Designers Diet: <small>(100 hours of Quark, Photoshop and PowerPoint)</small>	275.00
The Complete CITing: <small>(100 hours of Word, Excel and PowerPoint)</small>	240.00

**TRAINING**  
We offer full comprehensive training facilities at highly competitive rates. Only individual booking guarantees that you learn all it once you are comfortable with.

**+FREE**  
INTRODUCTORY SESSIONS



INPUT-OUTPUT センターのサービス内容のチラシ (ケンブリッジ)

#### 4. 大都市の図書館

バーミンガムを始めとする大都市の公共図書館も、それぞれ特徴があり興味深かった。マンチェスターの中央図書館は、イギリスで最も大きい公共図書館だったことがあると観光案内に書かれている、クラシックな雰囲気のある図書館である。それでもビジネス情報、地方研究、EC 情報、中国語コレクション等といった特殊なサービスも展開しており分館との協力体制も強く主張していた。

グラスゴーでは、大学図書館を含むグラスゴー



バーミンガムの公共図書館

地区の学術図書館リストが提供されていた。グラスゴー公共図書館の一館として位置づけられるミッチェル図書館は、レファレンス専門の伝統ある図書館であり、充実したコレクションを持つ。見学したグラスゴー大学やスターリング大学でも、自館にない雑誌を SALSER (Scottish Academic Libraries Serials) で検索するとミッチェル図書館が所蔵していることが多く、助かっていると言っていた。

バーミンガムは BLCMP (Birmingham Libraries Co-operative Mechanisation Project) という OCLC のような図書館サービスネットワークの地元であり、「バーミンガムの図書館」という、大学図書館を含めたパンフレットが出来ているほど協力体制が出来上がっている。見学した Aston 大学は中心街から歩いていける場所にあり、小規模ながらとてもセンスのあるサービス展開をしていると共に、蔵書については地元開放していた。中央公共図書館はエスカレーターまである新しい大規模なもので、ビジネス情報、AV 資料、INPUT-OUTPUT センター (次節参照) など新しいサービスにも積極的な他に、アジア、中東などのマイ

ナー言語による利用案内が用意されているところに大都市独特の事情が感じられた。

パーミンガムとマンチェスターは、モリスの巡回展とケルムスコット・プレス全出版物を所蔵するマンチェスター大学図書館の展示に合わせて訪れたので、公共図書館でもモリスに関する展示を同時開催していた。モリスに関してはビジュアルで展示を企画しやすく、多少歴史のある図書館ならばなにかしら資料を所蔵している程度に歴史上では新しい人物ということなのだろう。

## 5. 「i」と図書館

多くの図書館等を見ようと英国内の数多くの町を訪れたが、「i」印のインフォメーション<sup>®</sup>には随分とお世話になった。観光地の「i」は楽しい売店もあり、観光案内所という感じだが、普通の町にも「i」がありそこは文字通り「街の情報」を提供するところだ。地図、バスの路線、時刻表、各施設の（きっと他にもいろいろな）情報を入手できる。例えばモリス商会が手掛けた郊外の邸宅スタンデンを訪れた時は、「イーストグリンステッド駅から南に2マイル。車ならA22かB2110号線」ということしかわからずに駅に降り立ち、まず街の中心に向かって「i」を探す。図書館の1階に併設された「i」の窓口で現地を通る路線バスが日曜は無いことがわかり、印をつけた地図をもらって「30分歩けばちゃんと着くわよ」と送りだされたのであった。

こういった郊外の町の「i」は、図書館と同じ建物に同居していたり、図書館が「i」の機能を合わせ持っていたりすることも多かったように思う。電話帳等の街の情報と並んで、週末のレクリエーション向きの観光施設のパンフや街の行事のお知らせが図書館内のスタンドに沢山たっていたり、併設の場合は、日本の公民館と図書館が同居しているスタイルを思い浮かべていただければよいだろう。

公共図書館の雰囲気は日本とあまり変わりはない。異なる点といえば例えばカセットやビデオの貸出が有料なこと。このため企業が協賛という形



レッドハウス

のCD-ROMの貸出もスムーズに始まっている。また窓口で金銭を扱う体制があるのでチャリティの為に除籍本や手作り品を展示し販売しているのも何度か見かけた。また今回はケンブリッジとパーミンガムでしか見かけなかったが、INPUT-OUTPUTセンターとして、パソコンとソフトの利用、データの入力、出力、インターネット等の使用や指導を有料で行うサービスコーナーを併設しているところもあった。

## 6. レッドハウスと郊外の住宅地

モリス関連で見学した中で唯一個人が所有しているレッドハウスは、夏期のみ、予約による内部のツアーが行われる。この建物は、新婚のモリスのためにモリスと相談してフィリップ・ウェブが設計したもので、この設計や内装に関わったことが、後にモリス商会としてデザインの道を進むきっかけをモリスに与えたと言われている。伝統にとらわれず、暮らしやすさを重視し、美しいと思うものを取り入れていくというコンセプトに基づいており、後のモリス商会が手掛けた商品見本のような濃厚な空間ではなく、意外にシンプルで居心地の良さそうな家であった。

レッドハウスは、ロンドンから列車で1時間程の郊外の住宅地にあるのだが、見学日が日曜であったため、なんと路線の一部が休みで振替のバスで行った。今ではロンドン等の大都市のデパートや商店は夜間や日曜も営業しているが、郊外では今

## 海外レポート



ケルムスコット・マナー

でも夜6時頃までには商店は閉店し、日曜日は営業しないところがほとんどである。BC2の調査をしていたケンブリッジでも、遅くまで調べものをしてしていると中心街の店が次々閉まりあせることが何度かあった。

## 7. モリスをめぐるツアー

モリスの著書『ユートピア便り』の扉絵でお馴染みのケルムスコットマナーは、田園風景の美しいとても小さな集落にある。車でないと行きにくいので、モリスソサエティの主催する、没後百年の命日のツアーの時に見学した。行事の内容は、教会での百年記念のセレモニー（講演、朗読、室内楽演奏など）、墓参、マナーの見学であったが、バスや車で現地集合したらまずお茶の時間、セレモニーが終わったら簡単な昼食とデザートとお



モリスの命日に集まった人々



地下にあるモリスソサエティの部屋

茶、見学が終わったら帰る前にお茶といった具合で、この種の行事では、お茶と談笑は欠かせないのであった。モリス関係のツアーは、モリス商会の携わった教会のステンドグラスをめぐるブライトンでのツアーにも参加した。ここでも、まず最初の教会でお茶とお菓子が用意されており、その機会を利用して、解説ゲストとして招かれていた『デザイナーとしてのモリス』の著者レイ・ワトキンソンにサインをもらうことができた。

## 8. モリスソサエティとハマースミス

前出の命日ツアーを主催したモリスソサエティの本拠地は、モリスが最後に住み、ケルムスコットプレスの仕事に情熱を燃やしていた、ロンドン南西部のハマースミスにあるケルムスコットハウスにおかれている。ただし、地下室と隣の馬車小屋部分に間借りしているだけで、建物は個人の所有で、地上部分は全く公開されていない。モリスソサエティ主催の講演会をハマースミスで行う時も、馬車小屋部分にビッシリと椅子を並べていた。この建物が昨年なんと売りに出されていた。モリスソサエティの会報にも記事が載っていたので、その後新しい展開があったことと思うが、地下室等の使用は本棟の所有者の好意にかかっているのである。

ハマースミスには、モリスのケルムスコット事業に大きな影響を与えたエマリー・ウォーカーも住んでいた。チェルトナムでのモリス展示は、規



ウィリアム・モリス・ギャラリー



古本屋の本棚

模は小さかったが、このウォーカーのコレクションを所有しているため、活字のデザインや扉絵の下絵、試し刷り、モリスが花柄を書き込んだ本など、珍しいものがたくさん展示されていた。

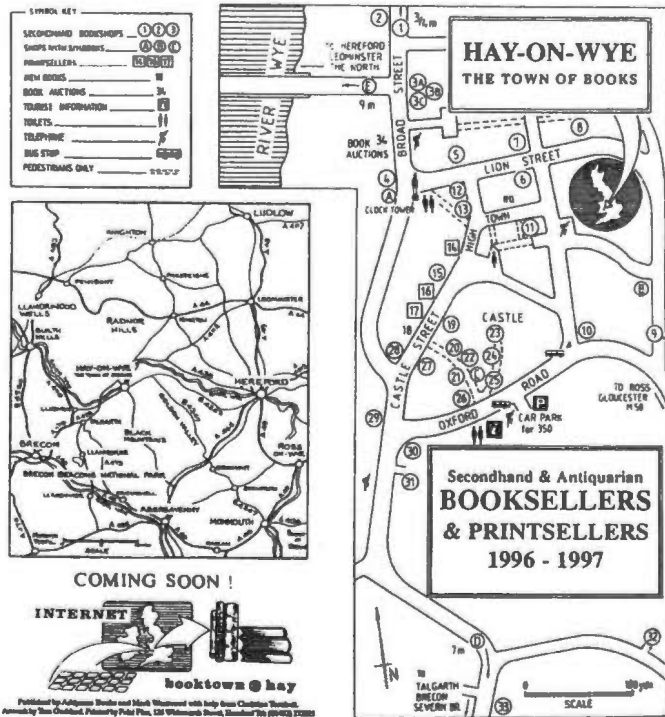
ロンドンには、北東部のウォルサムストウにもう1箇所モリス関連のスポットがある。モリスが子供時代に住んだ家を利用したモリスギャラリー

である。こちらでは地区をあげてモリスの没後百年の催しを行っており、ギャラリーにおける数種の展示の他にも、講演会や協賛行事がいくつも行われたようである。またこれらの行事やモリスの業績を紹介した美しいパンフレットが、自治体によって作成されていた。

### 9. 古本屋の町ヘイ・オン・ワイ

図書館見学のついでではないが、どうしても泊まりがけで行きたかったところが、古本屋の町ヘイ・オン・ワイである。有名なロンドンのチャリングクロス街とは違い、三十年程の歴史しかないが、何十軒も古本屋があるとのこと。見学先の図書館の人との話でも、「質を期待してはダメだが、かなり楽しめるはず」というので、古書というより「古本あさり」の好きな私としては、はずせない訪問地であった。

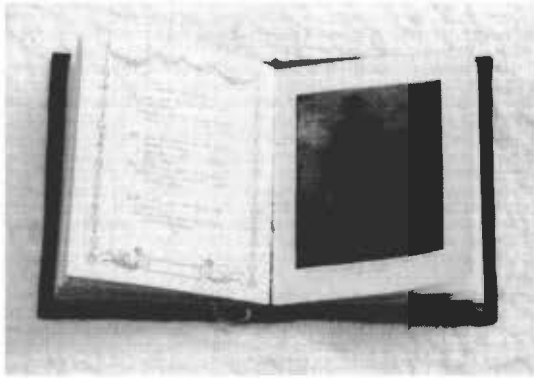
鉄道の駅から車で30分以上離れた、ウェールズ東端の谷間の小さな町は、30数軒の古本屋の他には最小限の店しか無く、文字通り「古本屋だらけ」であった。確かに、数軒を除いてはコンディションより品揃え重視という感じで、隅の方の本棚が埃っぽい店などもあったが、日本と同じく、ペーパーバックの古本がまとまってあることは珍しいのでSF やら小説



ヘイ・オン・ワイの古本屋案内図



## 海外レポート



Gems from William Morris

を探している方には良さそうだ。私の場合は、美術館の薄いパンフレットなどがバサバサ箱に入っている中から、昔 V&A で開催されたヴィクトリア朝・エドワード朝の装飾芸術展のカタログを掘り出してご機嫌であった。モリス関連としては、コンディションは悪かったけれどモリスの没年に発行された装丁のきれいな『地上の楽園』のコンパクト版を見つけた位で終わりかと思ったら、閉店まぎわに珍しいものを発見した。発行年がわからないが 'Gems from William Morris' という、GEM 辞書サイズのモリスの詩集で、各頁には縁取りがあり挿絵も何点か入っている、“モリスっぽい” 愛らしい一点であった。

こんな感じで、特定の本を探すには向かないが、つらつらと見ていくうちに面白い本が見つかって、沢山買っても破綻しない（荷物は大変だけど）程度の値段で、まわりの自然もきれいなので、2、3日十分に楽しめそうなおところであった。泊まった B&B (Bed & Breakfast。イギリスに多い、民宿のような安価の宿) のおばさまも、季節にかかわらず利用者がいるので経営的にも条件が良いと言っていた。

## 10. おわりに

正式に訪問した図書館のほとんどは大学図書館で、メディアの変化への対応、コンピュータサービスとの融合といった問題で大きく変化しつつある途上という点では、日本の大学図書館とほぼ同

じ段階という感触だった。各大学それぞれの解決策、細かい工夫などは大変参考になったのだが、ここでは特に触れないこととする。ただ、日本と目立って違う点として、多くの大学図書館で見られる主題別のライブラリアンの存在とそれに対応する蔵書構成という構造は、急激な体制の変化という点ではマイナス面となりそうであったこと、旧ポリテクニックから大学となった新しい大学の方が活気や工夫があって見学するには面白い可能性が高いことだけはお知らせしておこう。

私はもともと公共図書館や学校図書館から興味を覚えて図書館員という仕事を選択し、職場としては大学図書館に入り十年程を過ごしてきた。今回 BL や PRO を始めとして公共の施設にも大変深く興味を感じたのは、大学図書館に慣れた目に新鮮に映ったということかもしれない。この新しい視点から日本の公共の施設を改めてじっくり見てみたいという気がしている。今後の大学図書館で取り上げていくべき点が、イギリスの大学図書館との比較だけでなく、さらに見つかるような気がするのである。

(見学の記録等はホームページもご覧ください。)

<http://www.sfc.keio.ac.jp/~kari/index.html>

## 注

- 1) NDC や DDC, LC 分類など本表に大部分の番号が提示されている列挙型と違い、分野毎に合成の為の要素が提示され、複合主題や観点の違いなども表現して分類記号が合成できる事後結合型分類法。主題の分析法から始め、分類法、記号付与、件名索引の作成などを定義し、理論的に明確で優れていること、合成した記号の配列順にも矛盾が生じない記号法、分類記号と件名索引が同時に発生することなどから一部で注目されている。今年、日外アソシエーツから刊行された『資料分類法の基礎理論』は、BC2 の序論の部分訳である。
- 2) 19世紀 (1834-1896) のイギリスの芸術家。当時は詩人や社会主義活動家として有名であった。最近では、モリス商会の事業などを通して直接的また間接的に手掛けた装飾芸術が、近代デザインの創世として注目されている。
- 3) モリスは直接は建築には携わらなかったが、古建



- 築保存運動に関与したこともあり、建築についての文章も多い。図書館に大きく関係するのは、晩年に手掛けた私家版印刷所ケルムスコット・プレスである。後のアール・デコなどに影響を与えたモリスではあるが、彼が実際に生きていたのはビクトリア朝時代である。
- 4) いよいよ1997年11月末に新館が開館するのにともない、円形閲覧室は10月末に、North Libraryは1998年2月に閉室される。BLISSは調べ物に便利でBLの検索端末も利用できたが、1997年8月に閉室し早々に新館に移行する。
- 5) 日本ではあまり見かけないが、「i」はインフォメーションポイントの共通のシンボルマークである。ツーリスト・インフォメーションにかぎらず広く使われているようである。
- 6) 古本に限らずSF、ミステリー、ロマンス小説のペーパーバックを探すには、ロンドンのチャリングクロスにある“Murder One”が断然おすすめである。古本やバックナンバーも少しだけがある。新本のビジュアル本を探すなら、大手のチェーンの中では、“dillons”がおすすめ。“Waterstones”もよい。

## 理工学メディアセンターニュース

## 『学術雑誌目録 1997』の発行（理工学メディアセンター）

この目録は1997年4月末現在で理工学メディアセンターが所蔵する全ての学術雑誌を収録しています。慶應義塾の教職員の方には無料で配布しています。ご希望の方は、理工学メディアセンター松下記念理工学図書館カウンターにおいていただくか、理工学メディアセンター総務

担当（電話 内線 73-2302）へお問い合わせください。

なお、学外の方で入手ご希望の方は、慶應義塾大学理工学メディアセンター総務担当（電話 045-563-1141 内線2302）へお問い合わせください。

## 医学メディアセンターニュース

北里記念医学図書館は昭和12年に竣工、落成してから今年で60年になります。医学メディアセンターでは、図書館所蔵の貴重図書、資料の展示会を開催するとともに、記念の絵はがきを

作成いたしました。なお、絵はがきを頒布希望の方は医学メディアセンター総務担当までお問い合わせください。

（電話 03-3353-1211 内線 2751）

## &lt;ティールーム&gt;

## 本にまつわる記憶

はしもと きみこ  
橋本 貴美子

小さい頃はよく親に“本を読まないと偉くなれない”と言われ、親の買ってくれた本や、学校推薦の本を何冊か読んだ。今でも記憶に残っているのはがんくつ王（“モンテクリスト伯爵”の子供用短縮版）、シンドバッドの冒険、アイヌの海（だったか？）等。数枚の挿絵を見ながらドキドキして先へ読み進んだのを思い出す。昆虫、動物図鑑、日本妖怪図鑑も大好きだった。中高生の頃は推理小説が好きで、一日に一冊ぐらいのペースで読むこともあった。生活は完全に夜型で、よく先生に“朝型に直せ”と注意された。女の子だけで集まって、更衣室でHな本を見てキャーキャー騒いでいたのもこの頃である。私が買って学校へ持って行った本を、ある男の子に貸した。彼は授業中にそれを見ていて先生にみつかった。“こんな本を持って来たのは誰だ？”一瞬シーンとして、彼が“ボクです”と言って立ち上がった。あれから20年たった。

大学生になりあまり読みたい本も見つからず、研究室に入ってから本を読む時間の都合も気持ちの余裕もなくなった。この頃は研究のための文献を集めに、学内中の図書館をかけずりまわることになる。コピー機が一般化して10年もたっていない頃だろうか。ある研究室の学生はコピーをとることを許されず、その場で読み、要旨をノートに書き取るということをやっていた。“コピーをとって安心するようではきちんと論文を読むことにならない”耳の痛い話である。最後までこの姿勢をくずさず、学生に指導された先生は3年程前に亡くなった。北大の図書室は中央、教養、学部、学科、とものすごい数がある。特に農学部は歴史が古いだけに蔵書の数は膨大である。鍵を借りて天井の高い薄暗い部屋

に入ると、壁に取り付けられた本棚に題名も消えかけた本がそびえたつ。本を手にとって裏表紙を開くと、本の貸し出しカードが入っている。私の前に誰が何時借りたのかも中身と同様気にかかるところである。先輩達もここで同様に勉強したというあたりまえのことに気付く。化学の分野は“進歩”というよりも“積み重ね”という表現の方が正しいのではと感じるのもこういう時である。

学位をとってからは自分の日本語が未熟なことや、あまりに専門しか知らないことに気付き（親は“専門しか知らない人を博士という”と定義している）再び縦書きの文章を読むようになった。周囲の人々が面白いと言う本や、書店で気に入ったものを手あたり次第読んでみる。気に入った作家の作品は全部読む。こうしているうちに本がどんどん増えていく。子供の頃には本を足で踏むと“本は大事にしろ”と叱られ、親は未だに子供たちの小学校の教科書をしまっている。これくらいだから増えていく本が捨てられない。小説の類に加えて専門書も洋書、和書と次々に発売される。たいして読むわけでもない本を脅迫されるように買い込み、机に積み上げ、床、本棚へと移動させる。

最近では印象のない本が増えてきたような気がする。研究の論文もまた然り。自分の書いた本をコピーして学生に読ませる。ごみ箱に捨てられているのを見ると腹がたつ。書いた人の気持ちも考えなさい！と怒ってみても、自分は？と考えれば、著者の目の前で捨ててはないというだけである。効率を優先したシステムがますます自分達の首を締め、便利なようでいて大切なものを失ってはいないか？私は物事への対処の仕方がのろいせいか、どうもこれ以上の速さにはついていけない。律速段階は自分の頭での処理だから。それにしてもずいぶんとたくさん本やら論文を読んできたつもりだが、ちっとも偉くなんかなれないのは親にだまされたのか、単に読んでも偉くはなれないだけなのか。やはり能力の問題か。 (理工学部応用化学科助手)

資料 I

メディアネット・メディアセンターに関する書誌 1996.8~1997.7

- “活字文化の原点、電子復刻：慶應義塾常任理事高橋潤二郎氏”。日本経済新聞。1996.9.12, 朝刊, 40面
- “歴史資料のデジタル化 使う側の発想次第：研究の場で威力発揮”。毎日新聞。1996.11.29, 夕刊, 20面
- “仮想博物館”で収蔵品公開：パソコン画面上、バーチャル・リアリティを応用”。東京読売新聞。1997.1.3, 朝刊, 25面
- “学生生活ワンポイントアドバイス 学生生活に欠かせない施設と制度の基礎知識：メディアセンター”。塾。No.204, p.10-11 (1997.4)
- 井上輝夫。“慶應義塾大学湘南藤沢の革新と伝統：そのアイデンティティをめぐって”。大学時報。No.255, p.44-49 (1997.7)
- “閉鎖社会 大学・SFCの実験5”。朝日新聞。1997.7.21, 朝刊, 8面
- “学生生活ワンポイントアドバイス 学生生活に欠かせ

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表・受賞 1996.8~1997.7

〔論文発表〕

〔三 田〕

- 市古健次。“キルヒャー『シナ図説』(秘蔵(111))”。三田評論。993号, p.80-81 (1997.7)
- 市古健次。中国参考図書ガイド：近現代史篇。東京, 汲古書院, 1997.1, 112p.
- 加藤好郎。“蔵書構成・管理と図書選択”。大学図書館研究。No.50, p.49-55 (1996.10)
- 加藤好郎。“新私立大学図書館改善要項を承認”。図書館雑誌。Vol.90, No.10, p.762 (1996.10)
- 加藤好郎。“私立大学図書館の新しい歩みに向けて：私立大学図書館協会の今後の戦略計画”。図書館雑誌。Vol.90, No.12, p.986-987 (1996.12)
- 加藤好郎。“大学教育と大学図書館の連携”。平成8年度(第36回)大学図書館司書主務者研修会報告書, p.41-63 (1997.2)
- 加藤好郎。“新私立大学図書館改善要領：サービス”。新私立大学図書館改善要項, p.1-2, (1997.3)
- 村上篤太郎。“電子図書館時代の図書館業務と図書館員”。薬学図書館。Vol.42, No.3, p.270-276 (1997.7)
- 新倉利江子, 原田悟。“図書館の経営管理”。大学図書館研究。No.50, p.14-21 (1996.10)
- 大賀裕。“慶應義塾情報スーパーハイウェイの構築とその運用”。塾監局紀要。23号, p.14-19 (1996)
- 斎藤勉。“平成7年度「財務状況の概要」を解説する”。大学時報。Vol.46, No.253, p.90-99 (1997.3)
- 酒井由紀子。“ジェンナーと種痘の歴史：種痘発明から200年”。医学図書館。Vol.43, No.3, p.380-383 (1996.9)
- 白石克。“正応五年刊『表無表色章』(秘蔵(106))”。三田評論。988号, p.104-105, (1997.2)
- 白石克。慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図(一枚刷)：補遺編。東京, 慶應義塾大学三田メディアセンター, 1997.3, 図版36枚, 14p。(文献シリーズ, No.25)
- 白石克ほか。“広重東海道五十三次 保永堂版初摺集成”。東京, 小学館, 1997.5, p.219
- 白石克。“地図の修正作業”。別冊歴史読本事典シリーズ。No.32, p.28-31 (1997.7)
- 白石克。“古地図コレクション慶應義塾図書館”。別冊歴史読本事典シリーズ。No.32, p.396-397 (1997.7)
- 梁瀬三千代。“IFLA-SAL General Session 報告”。アート・ドキュメンテーション研究。No.31, p.4-5 (1996.10)

梁瀬三千代. “ネットワーク情報資源の利用と課題”. 平成8年度図書館研究協議会集録. p.3-23 (1997.3)

[日吉]

天野善雄. “大学教育と図書館の改革”. 塾監局紀要. 23号, p.2-6 (1996)

白石幸男. “日吉における情報処理教育について: これからのコンピュータ教育”. 塾監局紀要. 23号, p.7-13 (1996.10)

[矢上]

森園繁. “散歩の産物”. 三田評論. 990号, p.106 (1997.4)

[信濃町]

長谷川博子. “「看護研究」のための文献検索について”. 慶應義塾看護短期大学紀要. Vol.7, p.153-157 (1997.3)

平吹佳世子. “研究業績データベースについて”. Keio 医学部病院ニュース. No.171, p.21 (1997.6)

市古みどり. “Unified Medical Language System (UMLS) とその Internet Grateful Med への応用”. 医学図書館. Vol.43, No.3, p.334-341 (1996.9)

市古みどり. “ピッツバーグ大学フォーク医学図書館での3ヵ月”. 塾監局紀要. 23号, p.114-115 (1996)

岡野純子. “医学文献サーチガイド第2版(書評・新刊紹介)”. 情報の科学と技術. Vol.46, No.11, p.661 (1996.11)

[藤沢]

広田とし子, 金子康樹, 木下和彦, 持田裕人, 石原智子, 天野善雄. “コンピュータを活用した利用案内システムの構築について(その2)”. 塾監局紀要. 23号, p.62-66 (1996)

風間茂彦. “図書館に於ける資料保存の枠組み”. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会会報. No.17, p.2 (1997.3)

風間茂彦他編. 利用のための資料保存1. 概説編, 資料の敵を知り, 対策を練る, 2. 実践編, 計画を具体化する. 東京, 紀伊國屋書店, 1996.10, VHSビデオ2巻

[研究発表]

[田]

加藤好郎. “シラバスと大学図書館のかかわりについて”. 平成8年度(第36回)大学図書館司書主務者研修会. 1996.9.4, 金沢都ホテル

加藤好郎. “大学図書館における組織の再構築について”. 私立大学図書館協会・東地区部会研究部パブリック・サービス研究分科会. 1996.10.9, 昭和女子大学

加藤好郎. “大学図書館の新しい歩みに向けて: そのサービスの歴史と今後の展開”. 平成8年度私立大学図書館協会東地区部会館長・事務長会議. 1996.10.11, 札幌ガーデンパレス

宮木さえみ. “慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターと藤沢市図書館との相互協力”. 第9回国立大学図書館協議会シンポジウム. 1996.12.11, 千葉大学

村上篤太郎. “電子図書館時代の図書館業務と図書館員”. 日本薬学会第117年会薬学図書館協議会シンポジウム特別講演. 1997.3.27, 町田市民ホール

梁瀬三千代. “レファレンスサービスの変貌と原点”. 私立大学図書館協会東地区部会研究部レファレンス研究分科会. 1997.7.8, 慶應義塾大学北新館

[日吉]

平尾行蔵. “CD-ROMの管理と運用”. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会平成8年度第1回実務担当者会. 1996.7.29, 慶應義塾大学日吉メディアセンター(日吉図書館)

木下和彦. “新しいメディアを知る: 大学図書館での導入例を通して”. 神奈川県県立学校司書等研修講座第2分科会. 1996.10.21, かながわ県民センター

[信濃町]

長谷川博子. “「看護研究」のための文献検索について”. 第3回医学図書館研究会. 1996.11.14, 東京大学医学図書館

市古みどり. “研究のための文献検索”. 日本看護学教育学会第5回ワークショップ. 1996.8.5, 東海大学健康科学部

市古みどり. “最近のアメリカの医学図書館事情: パブリックサービスを中心に”. 北海道地区大学図書館協議会研究集会. 1996.8.9, 北海道医療大学

市古みどり. “医学図書館のレファレンスサービス”. 第3回日本医学図書館協会継続教育コース. 1996.11.15, 東京大学医学図書館

市古みどり. “Unified Medical Language System (UMLS) とその Internet Grateful Med への応用”. 第68回日本医学図書館協会総会. 1997.5.22, 旭川グランドホテル

和田幸一. “選書基準とその実際”. 第3回医学図書館員基礎研修会. 1996.8.8, 自治医科大学

[藤 沢]

廣田とし子. “大学図書館に於けるデジタルメディアの導入と問題点”. 私立大学図書館協会東地区部会研究部平成9年度第1回研修会. 1997.6.20, 東洋大学

廣田とし子. “増えるデジタルメディアと苦悩するライブラリアン”. 私立大学図書館協会東地区部会研究部平成9年度第1回研修会パネルディスカッション. 1997.6.20, 東洋大学

風間茂彦. “図書館に於ける資料保存の枠組み”. 神奈川県内大学図書館相互協力協議会平成8年度第2回実務担当者会. 1996.11.15, 慶應義塾大学日吉メディアセンター (日吉図書館)

小川治之. “研究教育を支援するための新しい図書館システム”. 東北大学図書館部職員研修会. 1996.9.25, 東北大学

小川治之. “マルチメディアを活用した新しい情報サービスの展開: 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの事例”. 鹿児島大学図書館部職員研修集会. 1996.11.28, 鹿児島大学

小川治之. “慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターにおける情報化の現状”. 文部省大学図書館職員長期研修会. 1997.7.23, 慶應義塾大学湘南藤沢

[受 賞]

[信濃町]

市古みどり. 日本医学図書館協会奨励賞. 第27回 (平成8年度), 1997. 4. (対象論文: “Unified Medical Language System (UMLS) とその Internet Grateful Med への応用”. 医学図書館. Vol. 43, No. 3, p. 334-341 (1996.9))

[藤 沢]

風間茂彦他. 日本産業映画・ビデオコンクール奨励賞 (日本産業映画協議会主催). 第35回, 1997. 5. (対象: 利用のための資料保存 1. 概説編, 資料の敵を知り, 対策を練る. 東京, 紀伊國屋書店, 1996.10. VHS ビデオ)

## 展示会 予告

### 「日本中世印刷史」展

平成10年1月26日(月)～31日(土) 10:00—19:00 (最終日は17:00 まで)

丸善 日本橋店 4F ギャラリー

慶應義塾図書館と同大学附属研究所斯道文庫に所蔵する, 平安時代から室町時代に至る古刊本を展示いたします。

平安時代後期刊『成唯識論述記』, 鎌倉時代刊春日版『妙法蓮華経』, 我が国最古の挿絵入

刊本の一つといわれる泉涌寺版『仏制比丘六物図』, 我が国最古の印刷目録たる建治3年(1277)刊高野版『弘法大師御将来目録』, 訓点や振り仮名も印刷した享禄2年(1529)刊『御成敗式目』など約70点。

## 資料 Ⅲ

## 年次統計資料 &lt;平成8年度&gt;

## I. 図書費 &lt;平成8年度実績及9年度予算&gt;

内 訳 各メディアセンター	平成8年度実績 <単位：円>			平成9年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	計	図書支出	図書資料費	計
三田メディアセンター	717,544,959	19,785,579	737,330,238	683,976	64,976	748,952
図 書 館	351,628,318	19,785,579	371,413,897	328,093	64,976	393,069
学 部* (私大研究設備相当額)	365,916,341 -	- -	365,916,341 -	355,883 (27,817)	- -	355,883 -
日吉メディアセンター	177,009,192	5,726,072	182,735,264	180,377	7,264	187,641
図 書 館	67,762,989	3,465,061	71,228,050	68,650	4,887	73,537
指 定 寄 附 金	270,000	-	270,000	-	-	-
学 部* (私大研究設備相当額)	108,976,203 (6,359,351)	2,261,011 -	111,237,214 -	111,727 (7,289)	2,377 -	114,104 -
医学メディアセンター	161,137,360	10,044,987	171,182,347	177,260	10,480	187,740
"	161,137,360	10,044,987	171,182,347	177,260	10,480	187,740
理工学メディアセンター	176,309,826	4,251,475	180,561,301	202,143	4,622	206,765
"	176,309,826	4,251,475	180,561,301	202,143	4,622	206,765
指 定 寄 付 金 (私大研究設備相当額)	- -	- -	- -	- -	- -	- -
湘南藤沢メディアセンター	180,010,541	25,379,704	205,390,245	180,000	26,450	206,450
湘南藤沢メディアセンター	180,010,541	25,379,704	205,390,245	180,000	26,450	206,450
合 計	1,411,741,578	65,187,817	1,477,199,395	1,423,756	113,792	1,537,548

注) \* 特別図書費は含まず。

\*\* ( ) 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時に手当したものの。

## Ⅱ-1 蔵書統計 &lt;年間受入及び所蔵冊数&gt;

内 訳 各メディアセンター		単 行 本			製 本 雑 誌			非 図 書 資 料	合 計	
		和	洋	計	和	洋	計			
年 間 受 入 冊 数	三田メディアセンター	14,902	18,062	32,964	7,762	7,235	14,997	10,615	58,576	
	図 書 館	(10,279)	(8,102)	(18,381)	(5,452)	(2,558)	(8,010)	(1,910)	(28,301)	
	学 部	(4,623)	(9,960)	(14,583)	(2,310)	(4,677)	(6,987)	(8,705)	(30,275)	
	日吉メディアセンター	13,216	5,194	18,410	1,591	1,994	3,585	2,012	24,007	
	図 書 館	(10,606)	(808)	(11,414)	(1,245)	(346)	(1,591)	(451)	(13,456)	
	学 部	(2,610)	(4,386)	(6,996)	(346)	(1,648)	(1,994)	(1,561)	(10,551)	
	医学メディアセンター	1,912	1,195	3,107	2,900	6,292	9,192	574	12,873	
	理工学メディアセンター	2,290	871	3,161	1,836	5,589	7,425	324	10,910	
	湘南藤沢 メディアセンター	11,511	6,547	18,058	2,577	2,491	5,068	1,595	24,721	
	合 計	43,831	31,869	75,700	16,666	23,601	40,267	15,120	131,087	
	所 蔵 冊 数 累 計	三田メディアセンター	736,269	816,621	1,552,890	206,507	205,608	412,115	102,950	2,067,955
		図 書 館	(511,146)	(463,651)	(974,797)	(126,508)	(75,304)	(201,812)	(55,474)	(1,232,083)
		学 部	(225,123)	(352,970)	(578,093)	(79,999)	(130,304)	(210,303)	(47,476)	(835,872)
		日吉メディアセンター	334,056	170,692	504,748	43,019	54,224	97,243	19,165	621,156
		図 書 館	(249,271)	(26,748)	(276,019)	(28,437)	(2,385)	(30,822)	(6,311)	(313,152)
学 部		(84,785)	(143,944)	(228,729)	(14,582)	(51,839)	(66,421)	(12,854)	(308,004)	
医学メディアセンター		42,090	43,000	85,090	63,724	133,440	197,164	6,209	288,463	
理工学メディアセンター		61,652	35,083	96,735	44,708	127,423	172,131	2,020	270,886	
湘南藤沢 メディアセンター		96,322	75,654	171,976	23,188	17,873	41,061	14,780	227,817	
合 計		1,270,389	1,141,050	2,411,439	381,146	538,568	919,714	145,124	3,476,277	

注) 三田メディアセンター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

## Ⅱ-2 蔵書統計 &lt;逐次刊行物：タイトル数&gt;

種別 各メディアセンター	カレン ト			ノ ン カ レ ン ト			カレント・ ノンカレント 合 計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田メディアセンター 図 書 館 学 部	5,932 (2,569) (3,363)	4,640 (1,100) (3,540)	10,572 (3,669) (6,903)	5,768 (3,519) (2,249)	3,459 (1,738) (1,721)	9,227 (5,257) (3,970)	19,799 (8,926) (10,873)
日吉メディアセンター 図 書 館 学 部	1,100 (666) (434)	920 (90) (830)	2,020 (756) (1,264)	781 (349) (432)	1,126 (31) (1,095)	1,907 (380) (1,527)	3,927 (1,136) (2,791)
医学メディアセンター	1,698	2,009	3,707	1,105	1,643	2,748	6,455
理工学メディアセンター	1,206	1,666	2,872	3,071	5,276	8,347	11,219
湘南藤沢 メディアセンター	1,170	1,483	2,653	427	309	736	3,389
合 計	11,106	10,718	21,824	11,152	11,813	22,965	44,789

## 参考データ：非図書資料

各メディアセンター	内 訳	種 別	マイクロ資料 CD-ROM	A-V 資料	合 計	
年 間 新 規	三田メディアセンター	タイトル数	200	34	234	
		筒 数	10,355	260	10,615	
	日吉メディアセンター	タイトル数	165	215	380	
		筒 数	1,438	574	2,012	
	医学メディアセンター	タイトル数	161	119	280	
		筒 数	168	406	574	
	理工学メディアセンター	タイトル数	127	13	140	
		筒 数	300	24	324	
	湘南藤沢メディアセンター	タイトル数	122	314	436	
		筒 数	1,007	588	1,595	
	累 計	三田メディアセンター	タイトル数	2,181	8,116	10,297
			筒 数	87,842	15,108	102,950
日吉メディアセンター		タイトル数	910	3,565	4,475	
		筒 数	10,882	8,283	19,165	
医学メディアセンター		タイトル数	265	1,613	1,878	
		筒 数	2,157	4,052	6,209	
理工学メディアセンター		タイトル数	408	175	583	
		筒 数	1,617	403	2,020	
湘南藤沢メディアセンター		タイトル数	657	2,041	2,698	
		筒 数	11,309	3,471	14,780	



## Ⅲ-1 利用統計 &lt;貸出及び閲覧冊数&gt;

内 訳 各メディアセンター	館 外 貸 出				館 内 閲 覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学 生	そ の 他	計	一般図書	貴重書	
三田メディアセンター	17,956	168,339	10,207	196,502	*	1,036	0.95
日吉メディアセンター	9,697	146,070	6,738	162,505	*	—	1.05
医学メディアセンター	70,351	25,462	40	95,853	*	—	1.11
理工学メディアセンター	2,559	56,324	11	58,894	*	—	1.05
湘南藤沢メディアセンター	3,841	73,323	950	78,114	*	—	1.12
合 計	104,404	469,518	17,946	591,868	*	1,036	1.03

\* 開架のため実数不明。

## Ⅲ-2 利用統計 &lt;相互貸借(複写依頼を含む)&gt;

内 訳 各メディアセンター		依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合 計
		国 内	国 外	計	国 内	国 外	計	
三田メディアセンター	現物(冊)	208	0	208	137	288	425	633
	複写(件)	2,085	17	2,102	1,137	422	1,559	3,661
日吉メディアセンター	現物(冊)	15	1	16	17	1	18	34
	複写(件)	771	0	771	169	33	202	973
医学メディアセンター	現物(冊)	53	0	53	55	0	55	108
	複写(件)	23,290	278	23,568	3,044	105	3,149	26,717
理工学メディアセンター	現物(冊)	11	0	11	15	0	15	26
	複写(件)	22,387	0	22,387	1,736	65	1,801	24,188
湘南藤沢メディアセンター	現物(冊)	21	0	21	90	0	90	111
	複写(件)	421	0	421	91	5	96	517
合 計	現物(冊)	308	1	309	314	289	603	912
	複写(冊)	48,954	295	49,249	6,177	630	6,807	56,056

参考データ：早慶 ILL

	三田 MC		日吉 MC		医学 MC		理工学 MC		湘南藤沢 MC		合 計	
	現 物	複 写	現 物	複 写	現 物	複 写	現 物	複 写	現 物	複 写	現 物	複 写
貸	208	421	15	45	1	862	11	653	13	27	248	2,008
借	102	287	17	36	0	4	14	447	6	12	139	786

## Ⅲ-3 利用統計 &lt;複写サービス&gt;

各メディアセンター	内 訳 種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	3,104	44,247	861	17,804	3,965	62,051
	簡易印刷	175	136,003	0	0	175	136,003
	OHP・スライド作製	7	8	0	0	7	8
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	447,043
	マイクロフィルム	1,346	—	223	—	1,569	73,762
日吉メディアセンター	OHP・スライド作製	—	63	0	0	—	63
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	1,580,098
	マイクロフィルム	—	—	—	—	51	1,032
医学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	58,610	377,784	90,245	521,416	148,855	889,200
	OHP・スライド作製	111	561	0	0	111	561
理工学メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	864	18,207	21,853	193,487	22,717	211,694
	O H P	—	—	—	—	—	—
	電子コピー (セルフ式)	—	1,019,181	516	12,974	* 516	1,032,155
	マイクロフィルム	62	1,774	18	226	80	2,000
湘南藤沢 メディアセンター	電子コピー (オペレーター付)	237	1,861	365	3,275	602	5,136
	簡易印刷	1,528	1,846,230	13	230,718	1,541	2,076,948
	OHP・スライド作製	28	2,665	0	0	28	2,665
	電子コピー (セルフ式)	—	—	—	—	—	791,524
	マイクロフィルム	—	—	—	—	—	2,297

\* は学外のみ件の件数

参考データ：電子コピー枚数

各メディアセンター	内 訳	オペレーター付	セルフ式	合 計
三田メディアセンター		62,051	447,043	509,094
日吉メディアセンター		—	1,580,098	1,580,098
医学メディアセンター		899,200	—	899,200
理工学メディアセンター		211,694	1,032,155	1,243,849
湘南藤沢メディアセンター		5,136	791,524	796,660
合 計		1,178,081	3,850,820	5,028,901

Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>  
利用者別

種別 各メディアセンター	学内者		学外者	合計
	教職員	学生		
三田メディアセンター	2,095	20,334	3,285	25,724
日吉メディアセンター	2,225	7,484	419	10,128
医学メディアセンター	1,985	211	2,018	4,214
理工学メディアセンター	1,308	4,716	2,593	8,617
湘南藤沢メディアセンター	477	3,490	147	4,114
合計	8,090	36,245	8,462	52,797

## 業務内容別

種別 各メディアセンター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田メディアセンター	10,647	991	13,991	95	25,724
日吉メディアセンター	1,936	619	7,554	19	10,128
医学メディアセンター	1,997	1,039	1,178	0	4,214
理工学メディアセンター	5,568	215	2,726	108	8,617
湘南藤沢メディアセンター	451	68	3,589	6	4,114
合計	20,599	2,932	29,038	228	52,797

IV-1 計算機利用統計 <情報システムサービス>

(1) 利用課題数

区 分	M-1700/10 (三 田)		ワークステーション系 (三 田)		M-1600/8 (日 吉)		ワークステーション系 (日 吉)		ワークステーション系 (矢 上)		CNS-ワークステーション系 (SFC)		合 計	
	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生	教職員	学 生
文 学 部	3	95	12	737	—	—	14	240	—	—	10	13	39	1,085
経 済 学 部	10	332	19	821	3	2	28	938	—	1	5	41	65	2,135
法 学 部	10	79	14	757	4	—	18	695	1	2	8	15	55	1,548
商 学 部	25	317	19	688	2	2	19	383	—	2	2	6	67	1,398
医 学 部	1	—	2	5	13	—	8	35	2	—	12	34	38	74
理 工 学 部	3	12	2	57	27	6	22	690	6	111	4	25	64	901
総 合 政 策 学 部	—	13	4	30	—	—	—	11	—	2	98	2,101	102	2,157
環 境 情 報 学 部	—	4	5	41	—	—	—	7	—	1	121	1,901	126	1,954
文学・社会学研究科	—	12	—	88	—	—	—	2	—	—	—	5	—	107
政策・メディア研究科	—	1	—	15	—	—	—	2	—	—	—	371	—	389
経営管理研究科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	—	7	—
諸 研 究 所	10	—	25	66	1	—	18	—	4	—	—	—	58	66
設 置 講 座	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
諸 学 校	1	1	5	4	3	3	9	29	1	—	63	—	82	37
業 務	493	—	146	—	329	—	30	—	—	—	84	—	1,082	—
情報システムサービス	110	—	23	—	82	—	30	—	—	—	5	—	250	—
外 部	—	8	6	—	—	2	10	—	—	—	—	783	16	793
そ の 他	13	9	17	1	8	6	2	75	—	—	3	7	43	98
合 計	679	887	299	3,310	472	21	208	3,107	14	119	422	5,302	2,094	12,746

(2) JOB 件数

月	M-1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)
4	14,163	1,883
5	14,300	3,892
6	14,894	5,431
7	11,910	2,991
8	5,180	639
9	10,595	982
10	19,835	2,628
11	14,680	2,248
12	18,011	3,052
1	10,773	920
2	9,381	915
3	10,120	1,358
計	153,842	26,939

※M-1700/10・M-1600/8 はバッチと TSS の合計

(3) CPU 時間

月	M 1700/10 (三田)	M-1600/8 (日吉)
4	10.9	15.5
5	10.8	13.6
6	7.0	24.5
7	8.3	12.7
8	3.5	1.7
9	10.3	1.7
10	12.1	7.8
11	9.6	10.1
12	11.0	17.9
1	7.4	2.6
2	5.9	2.1
3	6.2	2.0
計	103.0	112.2

## IV-2 計算機利用説明会 &lt;情報システムサービス&gt;

課 題	期 日	場 所	参加人数
TSS (入門編)	5/16	三 田	28 名
日経 NEEDS 検索システム	5/21・10/22	三 田	39 名
MS-EXCEL	5/17・10/16	三 田	40 名
MS-WORD	5/23・10/17	三 田	42 名
SPSS/PC+	5/22	三 田	15 名
電子メール (入門編)	5/15・5/24・5/27	三 田	65 名
CNN ニュース検索	5/20 (3回)	三 田	60 名
TSS (初級編)	10/21	三 田	11 名
電子メール (中級編)	10/15・10/23	三 田	50 名
UNIX (初級編)	10/24	三 田	26 名
パソコン利用セミナー	4/24・5/9	日 吉	15 名
Winsows 入門	5/10	日 吉	16 名
UNIX 入門	5/13・10/15	日 吉	22 名
メールとニュース (mnews)	5/14・6/6・10/18・10/29	日 吉	58 名
UNIX エディタ使用法 (Mule)	5/15・10/17	日 吉	15 名
メール (mh-e)	5/16・6/4・10/22・10/31	日 吉	57 名
電話回線からの利用法	5/17・6/5・10/30	日 吉	45 名
ワープロ入門1 (MS-Word)	5/21	日 吉	14 名
ワープロ入門2 (MS-Word)	5/22	日 吉	12 名
表計算とグラフ (MS-Excel)	5/23	日 吉	14 名
計算室利用案内	10/8・10/9	日 吉	7 名
パソコン環境と操作方法	10/16	日 吉	2 名
UNIX エディタ使用法 (vi, jvim)	10/16	日 吉	8 名
インターネットでの情報検索	10/23	日 吉	25 名

今回の特集は「メディアセンターの位置付け—大学内での融合性を求めて—」というテーマを設け、メディアネット事務長をはじめ、各地区事務長へ原稿を依頼致しました。特集を組んだ主旨は、ここ数年で著しく変わった図書館やパソコン室、研究室におけるネットワーク環境整備とそれに伴う利用者へのサービス形態の変化を強く感じていたことに端を発します。

今まで図書館でしか利用できなかった目録検索や文献収集は、時間や空間を超えて可能になってきました。また、各地区個別に展開していたサービスが、インターネットを介することにより、画一化したサービスができるようになってきました。FirstSearchの導入はその一例だと思います。

平成8年4月に設置された業務改革推進室は、3年後のパソコンひとり一台設置を目指すとともに、事務のネットワーク・コンピューティングの

インフラ構築に取り組んでいます。大学が21世紀構想を掲げる中で、メディアセンターは大学の方向性にどのように関わっていくのでしょうか。そういった疑問を抱いた時、特集の企画が生まれました。各メディアセンターが、どのような姿勢を打ち出そうとしているのかを提示することも必要なのではないかと思った訳です。特集を読んで、各地区の姿勢を少しでも読み取ることができれば幸いだと思っています。

第5号では若い方にも原稿を書いて頂きました。MediaNet レポートやスタッフルーム、慶應義塾博物館コレクションがそうです。

雑誌の装丁は、今年表紙を変えてみました。カラーページでの印刷も初めての試みです。多くの人々に読んで頂き、“今”のメディアセンターの動きを皆さんへ伝えることができれば嬉しい限りです。  
(梁瀬三千代)

※「MediaNet」のバックナンバー (No.1～No.4) をご希望の方は、希望の号数と冊数を明記し、切手 (1冊 ¥270, 2冊 ¥390 普通郵便) を同封の上、下記の発行元 慶應義塾大学メディアネット本部宛てにお送り下さい。

なお、3冊以上ご希望の方、または MediaNet の送付についてご不明な点は、発行元の内線 2506 本間までお問い合わせ下さい。

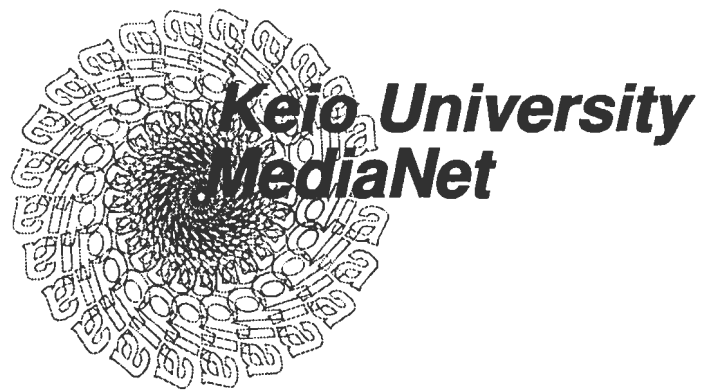
MediaNet 第5号 1997年10月31日発行

編集 MediaNet 編集会議  
発行者 斎藤 勉  
発行 慶應義塾大学メディアネット本部  
〒108 東京都港区三田 2-15-45  
電話 03-3453-4511 (内線 2502)  
印刷 (有) 梅沢印刷所

MediaNet 編集会議

編集長 梁瀬三千代  
編集員 藤井康子 竹内健祐 木下和彦 大塚加奈恵  
五十嵐由美子 長島敏樹 吉沢亜季子

E-mail : medianet-edit@mita.cc.keio.ac.jp



**Mita Media Center**

**Hiyoshi Media Center**

**Medical Information and Media Center**

**Information and Media Center for Science/Technology**

**Shonan Fujisawa Media Center**